

## 2015 年度 山村再生担い手づくり事例集の作成についての提案

‘15. 5. 15 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

### 【2014 年度の事例集づくりを振り返って】

- ・ 取材者と取材先の新しい交流が生まれ、新しいイベントや小商い、資金集めなどの取組に発展した。
- ・ 山部会と川部会、山部会と海部会の交流の進展に寄与することができた。

### 【2015 年度の目標】

年度内に 20 件以上の活動団体（川・海の団体を含む）への聞き取りとレポート作成を行う。

### 【スケジュール案】

- 1) 取材先の確定（～7 月）
- 2) 取材者の募集、確定（～8 月）
- 3) 取材者と取材先のマッチング（～9 月）
- 4) 取材（9 月中旬～11 月）
- 5) 調査者によるレポートの作成・提出、交通費等の請求（12 月～3 月）

\* 交通費等の計算・支払事務は豊田市の株式会社 M-easy 戸田友介代表が担当

### 【取材先候補】

#### ●長野県

根羽村

森の民ねばりん（南木一美氏）

#### ●岐阜県

恵那市

寺沢俊二氏

串原農林（三宅大輔氏）

#### ●愛知県

豊田市

おいでん・さんそんセンター（鈴木辰吉氏）

（稲武地区）

ファーストハンド

（足助地区）

NPO 法人都市と農山村交流スローライフセンター（山本薫久氏）

（下山地区）

しもやま里山協議会

新城市

NPO 法人 BIO de BIO（黒田武儀氏）

岡崎市

鳥川ホテル保存会（松田直人氏）



矢作川流域圏懇談会

2014年3月

## 矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

## 山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案し、実施しました。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。



# 目 次

## 長野県

### 根羽村

- 1 根羽村森林組合 . . . . . 1
- 2 ねば杉っこ餅 . . . . . 4
- 3 根羽村猟友会 . . . . . 6

## 岐阜県

### 恵那市

- 4 恵南森林組合 . . . . . 8
- 5 串原林業 . . . . . 11
- 6 NPO法人 奥矢作森林塾 . . . . . 14
- 7 NPO法人 福寿の里自然倶楽部 . . . . . 17

## 愛知県

### 豊田市

- 8 矢作川水系森林ボランティア協議会 . . . 19
- 9 とよた森林学校 . . . . . 21
- 10 とよた森林学校OB会 . . . . . 23
- 11 とよた都市農山村交流ネットワーク . . . 25
- 12 豊森なりわい塾 . . . . . 27
- 13 株式会社 M-easy . . . . . 29
- 14 旭木の駅プロジェクト . . . . . 32
- 15 千年持続学校 . . . . . 34
- 16 おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局  
. . . . . 36
- 17 green maman . . . . . 38
- 18 農業生産法人 みどりの里 . . . . . 40

### 岡崎市

- 19 NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋 . . . 42
- 20 岡崎森林組合 . . . . . 44
- 21 おおだの森保護事業者会 . . . . . 47



# 根羽村森林組合

調査団体名	: 根羽村森林組合	団体代表者名	: 大久保憲一
設立年	: 1951(昭和26)年	対応してくれた人の名前	: 今村 豊
団体URL	: <a href="http://www.mis.janis.or.jp/~nebasin/">http://www.mis.janis.or.jp/~nebasin/</a>		
活動拠点	: 長野県下伊那郡根羽村407-10	調査員	: 洲崎燈子、高橋伸夫
取材日	: 2013年11月27日	レポート作成者	: 高橋伸夫

## 活動内容

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52～60ha程度で材積5,000～6,000m<sup>3</sup>である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外の材を含め年間約2,500m<sup>3</sup>を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20m<sup>3</sup>なので、年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

## キャッチフレーズ

山の民の志で進める森づくりと木づかい

## 会のモットー(何を大切にしているか)

全ての森林資源を活かした持続可能な森林づくり、林業の理想を目指す。その担い手が森林組合であり、森林組合がまず中心となって持続可能な村づくり、地域づくりに率先して取り組む。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

1995年からは再興期で、村内の民間製材工場の閉鎖に伴い村で設備を購入。2006年、建築士会に材料屋として入会(工務店や設計士の満足する製材加工をする)。2000年頃、乾燥技術の確立。2013年3月、JAS規格取得。現在、林産技能職員(約10名)の全てがIターン者である。

## 連携している団体・専門家・自治体など

安城市、明治用水、アイシングループ、信州大学農学部、岐阜女子大学、JIA長野建築士会(建築士・工務店)、矢作川流域圏懇談会

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

伐採・搬出の1次、製材次加工の2次、工務店への直送販売による3次の6次産業化。切り捨て間伐の未利用材を木の駅プロジェクトで収集し、特別養護老人ホームの薪ボイラーで使用するNPO「薪の駅」の設立を2014年4月に計画しており、材の収集・乾燥から燃焼までの作業を4,500円/m<sup>3</sup>で担当する。小中学生まで木の駅プロジェクトの登録対象として、地域通貨がお小遣いになるようにする。

## 現在直面している課題

- ・製材加工の利益率向上。全ての地域資源を活かした産業の創設による雇用と生業の確保。
- ・Iターン職員の定着率向上。

## 今後やってみたいこと

JAS工場の資格を活かして矢作川下流域への販路拡大を図りたい。このため、長野・愛知・岐阜・静岡の各知事に木づかいプロジェクトリーダーになってもらい、根羽村村長を含めた5者での対談を企画したい。建設予定の小さく住まう魅力的な木の住まいをモニター体験しながら、林産資源の活用や田舎暮らしの良さについて話し合う中で各県の対策事例の紹介や情報交換を行い、行政の壁を超える協力体制などを構築してもらおう。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

3県の森づくり・木づかいのキーパーソンを発掘し、森づくり・木づかい推進のワーキングショップ・ブレインストーミングを行いたい。キーパーソンとは各県の林業普及指導員、地域材中心の工務店、木工クラフトマン、建築士、建築士グループ等の木づかい推進団体と、耕ライフ、とよた森林学校等の木育活動団体など。彼らが既に行っている取り組みをライフステージアタック表(各ライフステージでの木づかい推進アイデアを一覧表にしたもの)の実践活動として紹介し、さらに多くの市民を森づくり、木づかいの世界に誘いたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>1ターンの定着率は？ 定着率向上の対策は？

<答え>定着率は正直に言って良いとは言えない。自分の技能や生活水準を上げることが優先して、地域よりも個人の力としたい考え方の者もいる。技術を習得した3年目程度で転出されると落胆が大きい。本人の問題でなく、同伴者が地域になじめない場合も定着を阻害する。根羽村での林業を志す1ターナー者に対して「根羽村森林組合 基本理念・存在意義」というマニュアルを作成配布して、組合や作業の詳細説明からモチベーションの維持方法、根羽村へのなじみ方などを解説。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>低コスト造林に着目した理由は？

<答え>山主へ還元金の確保が必要。職員の各種保険や手数料等でもコストが掛かるので、補助金もできる限り確保して林産収入を補填したい。間伐を15~20mの帯状伐採とすれば3回程度に分けて伐採ができる。伐採と同時に植栽も行えば植栽の補助金も受けられ、コンテナ苗を使用すれば作業効率も高くなる。さらに獣害対策を施せば、獣害対策補助金も受けられる。伐採跡に人工芝を敷いて獣の動きを変え、罠にかかりやすくするなどという案もある。

## その他、伝えたいこと

●**トータル林業の実現**:「トータル」には根羽村の全員が組合員であることと、木の全てを活かすという意味を含む。材として使用される部分はもちろんのこと、端材や木の皮・オガ粉なども残らず利用する。以前は材の乾燥に灯油を使用していたが、現在はこうした木くずを活用している。さらに、枝は小型ストーブの燃料に。また、葉からアロマオイルを抽出できないかなども検討。

●**長野県以外への進出・拡販**: 村民全てを森林組合員とする政策を継続して人工林率73%。村で木材加工工場を保有して今年JAS規格を取得、準備は整ったわけである。この根羽村で林業が成り立たないとすれば、国内どここの林業も成り立たないということである。矢作川の水源として下流域から認められ交流してきた歴史もある。矢作川の流域である愛知県に根羽村の森林製材を普及させたい。また、同じ流域で疲弊している林業を回復するために根羽村の製材工場やノウハウを活かしたい。例えば、豊田市産の材を根羽で製材し、JAS製品とするといったことが考えられる。

●**里山資本主義**: 里山の産物を活用し、流通させたい。豊田市足助地区の香嵐渓は里山を観光資源として確立した成功事例。すてきな森と木と水、そこで過ごすすてきな時間は商品になる。そこで生まれるスモールビジネスを生業にしたい。

写真



根羽杉の家で見学者に説明する  
今村氏(右)



低コスト造林試験地



プロセッサによる造材

年表

年	できごと
1958 昭和33	村内各戸へ13haの貸付山制度実施
1966 昭和41	貸付山貸付料廃止(年間800円)
1979 昭和54	矢作川水質保全対策協議会へ加入
1981 昭和56	根羽中学校が安城市七夕祭りに招待(以後毎年)
1982 昭和57	根羽村森林組合が全国優良組合として表彰を受ける 安城市野外教育センターが茶臼山に完成
1992 平成4	緑化推進運動功勞により内閣総理大臣表彰を受賞
1995 平成7	村内民間製材工場閉鎖に伴い、村で設備を購入
2005 平成17	長野県ふるさとの森林づくり条例に基づき「森林整備保全地域」に全村指定 根羽杉の柱50本提供事業開始 アイシングループと森林の里親契約を締結
2006 平成18	「ふるさとの森づくり県民の集い」を根羽村で開催 根羽杉モデル住宅「杉風(さんふう)の家」完成 川上村・根羽村村有林交換盟約書調印
2009 平成21	組合事務所の改築。「森づくり」と「木づかい」の職場が同じ場所になる

2006～2012年 製材加工場施設の拡充(製材・加工・乾燥機、構造材用モルダー、木質ボイラー)



# ねば杉っ子餅

調査団体名 : ねば杉っ子餅  
 設立年 : 1999(平成11)年  
 団体URL : [http://nebakanko.com/shisetsu/neba\\_sugikkomochi.html#](http://nebakanko.com/shisetsu/neba_sugikkomochi.html#)  
 活動拠点 : 長野県下伊那郡根羽村1855  
 取材日 : 2013年11月27日

団体代表者名 : 石原みちゑ  
 対応してくれた人の名前 : 石原みちゑ、原 小夜子  
 調査員 : 洲崎燈子  
 レポート作成者 : 洲崎燈子

## 活動内容

根羽村の40～70代の主婦15人ほどの団体で、原木椎茸を使ったきのおこわ、よもぎの草大福、米粉を練ったからすみ、ねぎ味噌たれの五平餅など、地元の素材を活かした手作りの農産加工品を生産し、自家製の野菜とともに村内外のイベントで販売している(主に週末)。岐阜女子大学の学生との共同で、森林組合が根羽杉で作った弁当箱に根羽の山の幸いっぱいのお弁当を入れた「根羽のはこいり娘」も開発した。村内のイベントや仏教行事での食事の提供もっており、250人分の食事を作ることもある。

## キャッチフレーズ

地産地消で生涯現役！

## 会のモットー(何を大切にしているか)

根羽にある物を使う、根羽にいる人を使う。お客さんとお互いの顔が見える対面販売にこだわる。からすみや豆餅など伝統の行事食を定番の商品にして、根羽の味として伝えていく。村の農産物を使うとメンバーも張り切って野菜を作ってくれる。メンバーには「家に引きこもらず、体が動くうちは来て」「この仕事がある日は限られているので、こちらを優先して」と働きかけている。メンバーが培ってきた知恵や技術を活かし、お客さんに喜んでもらうことの生き甲斐を感じられる場になっている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

何度も試食し、お互いに注意して真剣に商品開発を行うようになった。お客さんの反応もよく見るようになり、商品を食べてもらうことに緊張感を感じるようになった。イベントに出店する時、経験に基づいて出店先の客層や天候によるニーズの違いを見極め、売的商品や量を変えたり、売り手も買い手も運ぶのが大変な重量級の野菜(大根、白菜など)を避けるなどの工夫をするようになった。年収が500万円に届くようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

根羽村、安城市、アイシン、株式会社JTN、岐阜女子大学など。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

村内の主婦に、負担にならない勤務体制で、子どもを抱えて正規で働けない人や自営業者の奥さん、定年退職者にも末永く働ける場を提供している。メンバーの中には70代後半で入院しても「杉っ子餅に行かなきゃ」と言い、退院したら杉っ子餅に戻って亡くなる寸前まで働いていた人もいる。

## 現在直面している課題

・現在は石原、原の両氏で会を取り仕切ってうまくやっているが、後継者の確保が課題。新しい人も少しずつ入っているが、責任を持ってやってくれるかは未知数。  
 ・本当は毎日、半日でも活動できるといいのだが、取り扱っている商品に餅など日持ちがしない物が多いため、販路がはっきりしないと難しい。

## 今後やってみたいこと

日持ちする商品が少なく、根羽村の複合施設ネバーランドなどでの販売が難しいので、冷凍できるからすみ(カット済み)を随時解凍して販売できるようにしたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

ネバーランドなどとの商品情報の共有と連携。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>活動している上での苦勞を教えてください。

<答え>村外のイベントに出店する際は深夜2時、3時から準備を始めることもある。そんな時も、活動日が限られていることもあるが、メンバーが積極的に出てきてくれるのがありがたい。活動場所(旧保育所)の隣が墓地で夜は少し怖いですが、今は昔と違って火葬だから大丈夫と皆で言いながらやっている。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>原木椎茸ほか、きのこの栽培について教えてください。

<答え>村内できのこの原木となる広葉樹を販売している。きのこおこわの椎茸は村内で原木栽培している方から買ったり、メンバーが自前で少量栽培しているものを持ち寄って調達している。原木はほとんどマキ(アベマキ)で、樹皮が厚いためとても長持ちする。シデの木も原木にするが、椎茸は早く出るものの、樹皮が薄く長持ちしない。シデ、サクラはナメコ栽培にも使う。

## その他、伝えたいこと

組織が続かないと元も子もないので賃金の大幅アップはできないが、年末にささやかながら各メンバーが働いた時間に応じた手当を支払う。するとメンバーのやる気がアップする。今年度は収益で初めて旅行に行く(なばなの里)。個人経営ではないので、黒字になればその分を分け合う(機械の修繕代を除いて)。活動を続けてこられたのは、メンバーそれぞれの家族が応援してくれていることも大きく、ありがたい。

## 写真



原さん(左)と石原さん(右)



よもぎ大福作成風景



「根羽のはこいり娘」の弁当箱



心温まるおもてなし。右下が名物のからすみ

# 根羽村猟友会

調査団体名	根羽村猟友会	団体代表者名	石原邦雄
設立年	50年ほど前	対応してくれた人の名前	西尾竹司
団体URL			
活動拠点	長野県下伊那郡根羽村	調査員	高橋伸夫、洲崎燈子、安藤里恵、鈴木啓佑
取材日	2013年12月9日	レポート作成者	鈴木啓佑

## 活動内容

昔は各家の玄関に火縄銃が掛けてあり、昭和初期くらいから各部落ごとに猟をしていた。根羽猟友会として一つになったのは50年ほど前。

現在猟友会は総員20名。猟銃所持者は全部で13名、内、空気銃1名でほとんどは罠と銃を両方とっている。その他は罠猟免許のみ。

猟期(銃)は11月15日～2月15日(罠は11月15日～3月15日)、その他期間は駆除期間として罠猟のみをしている。有害鳥獣駆除隊を昨年7月から新たに結成。特にシカとサルの食害がひどく、住民が困っている。サル、シカ、イノシシ、カワウ、アオサギは一年中、申請して報告があったらすぐに飛んでいけるように対応している。

シカは昨年度は244頭捕獲、4月から11月に260頭捕獲した。ほとんど「くくり罠」で捕獲している。長野県では猟期は12cm、それ以外の駆除期間は20cmの罠を使用している。「箱罠」はほとんど入らない。厳冬期はほとんど「巻狩り」で捕獲する。厳冬期のくくり罠は凍り付いてしまい、正常に作動しないことが多いのであまり使い物にならない。根羽村では2007(平成19)年8月に、村が獣肉処理施設をネバーランド内につくってくれた。以前は野原で解体をしていたが、暗くなると車のライトで照らすも自分の陰で見えなくなったり、風があれば木の葉等がかかり衛生面でもよくなかった。今では食肉として売れるようになった。シカがメイン。獣肉は半分はネバーランドに卸して、半分くらいを仲間ですべてさばいている。イノシシも真空パックして、ラベルを作って売っている。シカは全てネバーランドに卸し、ネバーランドが商品化している。愛知県へも、名古屋市内のホテルに毎年クリスマスには20kgから30kgのシカのロースを納めている。収益はそれほどない。肉自体が高ければ料理も高くなってしまふ。だから、損得勘定を別にして、根羽村のネバーランドが捕れた肉を活かして商売してくれればそれでいい。1頭捕っても何千円くらい。

## キャッチフレーズ

鉄砲撃ち、昔は道楽もん、今は人助け

## 会のモットー(何を大切にしているか)

住民が困らないように有害鳥獣を駆除することが猟友会の使命。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

いろいろ規制が変わり、それをクリアしていかなければならないことが大変。特に2007年の佐世保の散弾銃乱射事件以降、銃刀法が改正され厳しくなり、他の地域では半数近くの人が猟友会をやめた。後継者が少なくなった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

有害鳥獣駆除隊の事務局を根羽村役場内に置いている。隊長は村長。  
他地域猟友会

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・獣肉処理施設: 村内集客施設ネバーランドに併設した処理施設により、駆除した獣肉を衛生的に処理し販売できるようになった。
- ・有害鳥獣駆除隊: 射撃試験免除などで、狩猟免許を更新しやすくしている。また、サル、シカ、イノシシ、カワウ、アオサギは通年捕獲できるように申請を出し、速やかな対応ができるようにしている。

## 現在直面している課題

猟友会員が少ない上、後継者も少ない。西尾氏が現在67歳。氏より若い方は5名しかおらず、10年後どうなっているのか心配している。  
猟銃所持者は上矢作町で3名。津具村も少ない。平谷村も3名。売木村も少なくなった。根羽村は多い方。根羽村ではもともと各戸に猟銃は1丁あった。それくらい盛んだった。

## 今後やってみたいこと

シカの皮をなめして利用したり販売してみたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>昔から猟が盛んだったようですが、もともと獣は多かったのでしょうか。

<答え>もともと多かったのでしょうか。

シカはもともとはいなかった。初めて見たのは12、3年前でそれから一気に増えた。

クマも増えている。毎年1頭か2頭は人家のすぐ近くに出没する。

イノシシは減っている。逆にシカが増えた。イノシシは夜行性で昼間寝ているが、シカは昼夜関係なく活動している。

イノシシの睡眠をシカが邪魔をするので、イノシシがいやがって愛知の方へ移動していると思われる。

カワウも10年くらい前から増えだした。カワウは魚350g/日くらい補食するといわれている。海にいる頃は人間の利用しないボラを主に補食していたのでよかったが、河川では大きな被害となる。カワウは3月から13羽、アオサギは1羽か2羽しか駆除していない。カワウが増えだしてからヤマセミが減った。

サルは増えているか減っているのかわからない。多い時には60、70頭くらいの群れで現れる。

アライグマも増えた。今年度も6、7頭死んでいるのを見た。

ハクビシンも出る。よく轢かれて死んでいる。

## その他、伝えたいこと

今では各自治体における害獣駆除の補助金も多く出されるようになり、猟師を生業にする若い人も出てきた。サルは罠でも捕れるようになったが、銃の方が多し。罠は1人30個しか設置できない。それを見回る必要があるため、勤め人では難しい。

## 写真



自家製シカ肉の薫製とイノシシ肉(商品)を見せる西尾氏



根羽村ネバーランド特製“肉のくわちゃんシリーズ”『いのしのたか!』

# 恵南森林組合

調査団体名	: 恵南森林組合	団体代表者名	: 山内章裕
設立年	: 1999(平成11)年1月(5組合合併)	対応してくれた人の名前	: 大島徳雄 専務
団体URL	: <a href="http://k-nan.jp/">http://k-nan.jp/</a>		
活動拠点	: 岐阜県恵那市 恵南地域	調査員	: 蔵治光一郎、近藤 朗、安藤里恵、田中五月
取材日	: 2013年12月11日	レポート作成者	: 田中五月、(近藤 朗)

## 活動内容

1999(平成11)年に上矢作町、串原村、明智町、山岡町、岩村の5森林組合の合併により誕生した岐阜県で3番目の広域合併組合であり、この恵南地域の83%にあたる約27,400ha(国有林 4,800ha、民有林 22,600ha)の森林を管轄している。事業は、これらの森林・作業道整備、特殊伐採が主である。2005(平成17)年度の組織改革後、国有林のみならず民有林の間伐増大、経営計画作成にも着手し、境界確定作業も担う。

●**組織改革** ……合併後、2004、05年度に赤字となり危機感が芽生え、2005年度(下期)より大幅な組織改革、職員の意識改革に着手した。2006年度から事業量増大を図り、民有林伐採にも着手、短期間で黒字に転換できた。

●**東濃・森林づくりの会** ……民間企業と協力した民有林整備体制の構築を目指し、特定非営利活動法人として立ち上げた(設立は2012年)。この串原支部が串原林業の三宅大輔氏であり、民間事業体として森林経営計画を策定した成功例である。

●**森の健康診断** ……矢作川森の健康診断の恵那地域第1回目(2006、07年)では、平均密度1,679本/haであったものが、第2回目(2012年)では1,360本/haに減少した。これは5年間でこの地域の間伐が著しく進んだということであり、恵南森林組合の事業転換(民有林増大)と重なる。

## キャッチフレーズ

森の資源を活かし守り想う ～それぞれの地域にフォレスターを!～

## 会のモットー(何を大切にしているか)

環境に配慮した適切かつ持続的な森林管理を進めることで、組合員と地域社会に貢献するとともに、働く仲間とその家族の幸福を追求する。(HPより) 林業本来のあるべき姿を追求したい。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

国有林伐採、治山事業など公共事業主体であったものが、経営危機(2004、05年度)を契機として民有林にもシフトしていったこと。この時(2006年度～)は、年度末に余ってくる補助金にはすべて手を挙げるなどして、事業量を大幅に増大させた。  
なおこの頃には、経営改革として、組織も大きく変えた。職員自らが問題と向き合い、考えることが重要である。

## 連携している団体・専門家・自治体など

岐阜県森林組合連合会、東海木材市場、岐阜県庁

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

### ●東濃・森林づくりの会をつくり、民有林の整備促進(支援)を進める

森林組合だけの整備能力には限界があり、多くの民有林の整備を進めることはできない。やる気のある民間と森林組合が手を組んで整備を進めたい。そのためには、森林経営計画を策定する必要があり、そのコンサル的な支援を行うための会として立ち上げたものである。

全体としては、まだ思うように進んでいないが、その中で串原林業は自ら経営計画を立てている。その代表である三宅大輔氏は、かつて恵南森林組合の職員であり改革期を経験している。

別パターンの手法として、森林組合が経営計画を立てて、作業を民間業者が行うケース(松下薪材)もある。

### 現在直面している課題

経営は持ち直したが、材価はまだまだ落ち込むと考えており、これからさらにどのような方向に行くのか悩んでいる。大きな課題である。

### 今後やってみたいこと

国有林には森林官がいる。それぞれの地域、民有林にも、森林官「フォレスター」がいるような状況をつくりたい。そのような人材が地域の森林を見守り、育てていくというのが良い。

そのためには、地元の若者が林業に関わり、将来的に独立する流れが良い。

民有林では山主との関係性が難しいが、「あそこのせがれかー」という感じで受け入れられやすい。

(串原林業・三宅さんの「山主さんたちが協力的で作業がしやすい」という話と通じる)

一方、従業員募集には、1ターン者の応募が多い。

### チームオリジナルの質問

<質問内容> 今後、どのようなパートナーがほしいか?

<答え>

●材木のはけ口がほしい。いつまでも市場に出してて良いのかと考えている。市場に出すと、数日後にはお金が入るといふメリットはあるが、手数料で金額が安くなるというデメリットも大きい。今は製材所などに直接卸すということができていない。

<質問内容> 森の健康診断の1回目と2回目で、大幅に平均密度の数値が減少していた。これは、恵南地域で広域的に間伐が著しく進んだ結果である。面積的にも大幅に民有林に手を付けない限り達成できない数字であるが、なぜ、このようなことができたのか?

<答え>

●実際に民有林での間伐を進めたが、「組合がつぶれてしまう」という危機感が、これをできるようにした。愛知県などでは、施業単価が高いため、わざわざ民有林に手を付けるということにはならないのではないかと。

### その他、伝えたいこと

●林業を実施していくにしても、地域に運送業者や機械(重機)業者、土建業者が必要で、できる限り地域の会社と協力して仕事をしていきたい。地域のリスク管理(災害、雪対策)でも、このような業者は必要であり、われわれは地域と共存していかなければならない。



恵南森林組合事務所(恵那市上矢作町)



取材に答える恵南森林組合の大島徳雄専務

# 串原林業

調査団体名	串原林業	団体代表者名	三宅大輔
設立年	2007年	対応してくれた人の名前	三宅大輔
団体URL	なし		
活動拠点	岐阜県恵那市串原	調査員	近藤 朗、蔵治光一郎、安藤理恵、田中五月
取材日	2013年12月10日	レポート作成者	田中五月

## 活動内容

現在の従業員は3名、2014年4月からは農業部を立ち上げ5名体制となる。恵那地域で初めて、民間事業体で経営計画を作成し、交付金をもらって林業を実施している。

現在は20～30人の山主のものである50haの森林の経営計画を立てている。

民間事業体で林業を行うことは非常に大きな意味がある。旧来の森林組合だけの林業では、交付金をもらうための計画となってしまう、本来の山づくりとはかけ離れた状態となっているケースが多かった。

一方で、三宅さんのように意欲のある民間事業体だけでやろうとしても、経営計画の作成、交付金の申請、交付金情報の収集など、民間事業体だけでは難しいことが多々存在していた。

これを、恵南森林組合と協力して、民間事業体でも経営ができる状態としている好事例。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

串原の山守となる。

山だけでなく、串原の地域も守る。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

6年前に独立したものの、最初は森林組合の下請けだったが、2013年度からは自力で経営計画を立てることができるようになった。

自力で経営計画を立てることにより、木が非常に傷みやすい夏場は「伐らない」と決めることができるようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

恵南森林組合、恵那市 林業振興課、恵那市 串原振興事務所、恵那農林事務所 林業課

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

三宅さんが恵南森林組合で働いていた時期、毎日遠くの国有林まで移動して、林業を行っていた。移動中、車の中から「串原の山を整備したい、何とかしたい」という思いを何度も強く抱き、独立を決意。

独立後は、2013年に経営計画策定までこぎつけ、2014年には地元の高校生が就職することが決まっている。

「地元串原の山を、地域を守る」という思いで、さまざまな計画を作成中。※〈今後やってみたいこと〉に記述

## 現在直面している課題

A材は市場で売れるが、B材以下は市場では売れないので、何らかの対策を考える必要がある。

例えば、市場に卸すのではなく、地域で「少々の曲がりや問題はなし、この地域の木材で家を建てたい」という方々に直接売るなど。



## 今後やってみたいこと

1. 串原林業のストーリーを付加価値として、市場だけでなく、直接工務店や消費者に届けられるような形にしたい。  
⇒xx年後にこんな山を目指して林業をしている、林業と農業で串原を元気にする、B材/C材は地元温泉で薪利用など。
2. 串原農林業という形にしたい。  
⇒前述のように夏は木を伐らず、代わりに農業を行う。今ちょうど、大学などの学食の料理を作る名古屋の会社に収穫物を売るといった話があり、進めたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

串原林業が大事にしている「技術」と「ソフト面での戦略」を担ってくれる、もしくはサポートしてくれる人が必要。  
⇒調査チームが考えるには、名古屋など都市部にも串原林業のソフト面での戦略を支えるパートナーがいると良いと感じた。

## その他、伝えたいこと

本職が林業なので「串原の山を守っていききたい」という思いが非常に強いが、それだけにとどまらず、へボ祭りなどの文化継承、観光案内所などのような町のインフラづくりも併せて行い、「串原を守っていききたい」「子どもたちに誇れる串原にしたい」という思いが強い。

社会背景として、行政の人員削減、助成金などの減少からくる町のインフラ会社(土建屋など)の減少があるため、三宅氏のように本職だけにとどまらず「地域全体をなんとかしたい」という思いを持つ人の存在は、農山村社会に非常にインパクトがある。また、今後の農山村社会ではこのような人がどの町や村にも育っていく必要がある。串原林業としても、林業だけでは経営が難しい時期が来ても、農業や土建的な仕事で会社を安定させることができるし、串原の住人からしても「串原林業であれば、たいていのことはやってくれる」となると、安心して生活できる。

4月から農業部門を設立し、串原林業から『串原農林』と名称を変更する予定。

調査チームからも、林業だけでなく、へボ文化継承などを含めて、広く地域に役立つ会社になるとよいのでは、という意見が上がった。

写真



現場で三宅氏に説明を受ける調査員



こんな50年クラスの檜が、市場卸値67,000円とのこと。  
林業従事者でなくとも、何とかしたい！と思ってしまう



パートナーの方が作業道をつくっている最中だった



現場にある移動式製材機(40cmまで製材可能)

# NPO法人 奥矢作森林塾

調査団体名	: NPO法人 奥矢作森林塾	団体代表者名	: 大島光利
設立年	: 2006年	対応してくれた人の名前	: 大島光利
団体URL	: <a href="http://shinrinj.enat.jp/">http://shinrinj.enat.jp/</a>	調査員	: 眞木宏哉、浜口美穂
活動拠点	: 岐阜県恵那市串原地域、上矢作地域	レポート作成者	: 浜口美穂
取材日	: 2013年12月8日		

## 活動内容

2000年の恵南豪雨により、一夜にして3万7千㎡もの流木が矢作ダムに流れ込んだ。この災害の時、消防長だった大島さんは、山林が荒れていることを身をもって実感し、同志に呼びかけて定年退職後の2006年、同会を立ち上げて山林(里山)再生、水質保全、森林環境教育に取り組み始めた。

そのうちに空き家が増え始め、活用を考える中で、2008年に空き家調査・意向調査・データ分析を行い、2009年には、移住希望者や都市の人も巻き込みながら「古民家リフォーム塾」も始めた。

同団体のスタッフは5人だが、地元住民、移住者などに手伝ってもらいながら事業を進めている。

### <里山再生>

●炭焼き・・・ダムに流れ込む流木を一度に大量に炭化する大型窯、伝統的な黒炭窯、ドラム缶を利用した研修窯3基があり、研修窯は地元小中学生の森林環境教育に使用。流木炭は、リフォームした家の床下調湿、土壌改良、水質改良に活用。木酢液からディーゼル燃料を抽出するほか、稲のイモチ病を抑える実験をしている。

●河川環境整備・・・河川に流木炭を入れて水質保全。地元住民・小中学生と、養殖したカワニナとホタルの幼虫を放流し、ホタルの里づくりを行う。河川の草刈りの応援、生きもの調査などによる環境教育も。

●「里山ぼらんていあ」・・・毎月第2日曜日に実施。古民家の手入れ、田んぼや畑仕事、山仕事など。

●公園環境整備・・・草刈り、剪定、間伐材でベンチづくりなど。

### <田舎と交流、移住につなげる取り組み>

●古民家リフォーム塾・・・毎年、1泊2日で10回講座を実施。地元の大工さんが指導。現在は、移住者待機住宅として利用予定の旧串原駐在所をリフォーム中。

●里山体験イベント・・・どんど焼き、つるかご編み、へぼをぼう、中山太鼓体験、縁会(独身男女ふれあい交流)、等々。

●田舎暮らし体験館「結の炭家(すみか)」・・・リフォーム塾で一番初めに再生した築130年の古民家。宿泊し、田舎暮らしの体験ができる場、地元の人と交流できる場にしている。

### <指定管理者として運営>

●奥矢作レクリエーションセンター ●串原体験道場「創手味亭(つくってみてい)」 ●串原郷土館

### <情報発信>

●広報誌「山結人(やまゆいびと)」を発行・・・新聞折り込みや、串原地域では市の広報紙と一緒に全戸配布し、地域に会の活動を発信している。

## キャッチフレーズ

みんなでやろまいか

## 会のモットー(何を大切にしているか)

地域を訪れる人、移住者、地元の人、みんなで一緒に地域をつくっていこう。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

流木が活動の原点で、設立当初はやらざるを得なかった。今は楽しみながらやっっていこうと変わってきた。慌てることはない。頑張りすぎると続かない。

## 連携している団体・専門家・自治体など

地域組織、串原林業、立教大学・野中健一教授、岐阜県立森林文化アカデミー、東京大学・蔵治光一郎准教授、矢森協など多数。また、恵那市のNPO連絡協議会をつくる動きもある。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

### ●空き家ゼロを目指す移住促進活動

空き家調査から始まり、意向調査をしてデータ分析。空き家のオーナーに傷み具合などを連絡。古民家リフォーム塾では、地元の大工さんの指導の下、田舎暮らしに興味がある人、移住希望者などが集まり作業を行う。完成したら、地元の人を交えて交流会。その他、移住のための山水の引き方研修、野菜の育て方研修、チェーンソーの研修などを1泊2日で年3回ほど行っている。その他、空き家の相続の書類を揃える手伝い、高齢者施設入所者の家の管理、移住者の相談にも乗る。リフォームには6~8カ月間かかるが、この間を、移住者と生活を共にして串原地域を理解してもらう期間としている。

大島さんいわく、「移住希望者にメリットは説明しない。メリットは全国一律どこも同じ。だからデメリットしか説明しない。全部ありのまま見せる」。移住者は、地域の自治会に入ることが前提。住民会議のどこかの委員会に所属し、すぐに地域の人と一緒にイベント・祭りの実行委員になる。移住した人は「串原の人」という扱いを受け、それは「受け入れてもらえたという安心感につながる」。

この6年間で空き家を10棟リフォームし、27人が移住。移住者は千葉から大阪まで広範囲。情報源は口コミ、HP、DM、取材記事など。さらに移住希望者は14名いて、空き家を待っている状態。一日でも早く移住希望者が古民家で暮らせるよう努力している。

2013年10月、過疎地域自立活性化優良事例表彰で、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞。

### 現在直面している課題

NPOの後継者づくり。

### 今後やってみたいこと

若者がもっと移住してほしい(現在は、移住者の4割くらい)。そして、ここで起業し、地元の人を雇ってくれるのが望み。そのバックアップはしていきたい。また、農地も余っているので使ってほしい。

### チームオリジナルの質問

<質問内容> 里山ぼらんていあに参加していた移住者、移住予定者に質問。「移住を決めた要因は？」

<答え>

●犬山市から3年間通い、やっと空き家を手に入れた人(来月からリフォーム開始)・・・若い頃から田舎暮らしに興味があった。3年前にネットで見つけて、空き家ツアーに参加。気に入ったのは「人」。ここにはしっかりしたNPOの活動がある。物件だけではやっていけない。助けたり、助けられたり。困ったら訪ねる場所があることが大事。

●第1期リフォーム塾生で住居を新築して移住した人・・・ここには実力者がいない。みんな同じようなレベルで生活し、「とりもって」(協力して)きた地域。それがいい。

●NPO事務局・端さん・・・2013年2月に森林整備講習会に参加。4月に移住を決めた。都市から近いわりに自然が濃い。駅も信号もコンビニもないけれどそれも魅力。ここに集う人たちが楽しそう。地域の皆さんがよそ者をよそ者にする人たちではない。

### その他、伝えたいこと

●大島さんに、「他の閉鎖的な地域ではこのような活動はできない？」と聞いたところ、「できる」と即答。ポイントは、「地域の人に何をやっているか、まめに情報発信すること」。

●行政主導ではダメ。民間がやって行って行政がバックアップする体制がいい。

## 写真

「里山ぼらんていあ」の12月の活動場所は、リフォームした築150年以上の古民家の庭木の手入れ。お昼は、この家に移住した人が手打ちそばをごちそうしてくれた。みんなで和気あいあいと話が弾む。



第1期リフォーム塾で再生した「結の炭家」。交流施設として活用。リフォームのコンセプトは、昔の形に戻すこと。新建材は全部取り払い、柱だけにしてから始める。ここ松本部落では、5軒の空き家が埋まり、空き家ゼロの地域になった。

# NPO法人 福寿の里自然倶楽部

調査団体名 : NPO法人 福寿の里自然倶楽部 団体代表者名 : 渡会三治  
 設立年 : 2011(平成23)年4月 対応してくれた人の名前 : 渡会三治、横光八洲男  
 団体URL : <http://fukujyu-no-sato.com/>  
 活動拠点 : 岐阜県恵那市上矢作町 調査員 : 近藤 朗、浜口美穂、安藤里恵  
 取材日 : 2013年11月8日 レポート作成者 : 安藤里恵

## 活動内容

- ・過疎化と高齢化が進む上矢作町に少しでも活気を取り戻したいということで、NPO法人 福寿の里自然倶楽部を立ち上げた。信号もコンビニもない町だが、約10haの「アライダシ原生林」(正式名称:アライダシ自然観察教育林)をはじめ手付かずの自然だけはどこにも負けない。北の南限と南の北限の自然が融合した地域にあるアライダシ原生林は、他に類を見ない珍しい植生が見られる。霊峰大船山、その山腹にある大船神社はかつて信仰の山として村人の永遠の心のふるさとである。境内には樹齢2,500年とも言われる巨樹の弁慶杉があり、また近隣の標高1,000mある大船牧場では360度のパノラマが楽しめ、これらを巡るエコツアーを実施している。
- ・12月には間伐体験(人工林:ヒノキ・スギ)も行っている。

## キャッチフレーズ

自然の宝庫上矢作 ～自然と遊ぶ 自然と学ぶ～

## 会のモットー(何を大切にしているか)

- ・上矢作や原生林を訪れた人々に心安らぐ感動を提供したい。取り組みを通して上矢作の自然の素晴らしさを少しでも知っていただけたらいいと思う。「また来たいな」という思いが生まれれば最高である。
- ・信号もコンビニもないが、手付かずの自然だけはあり、どこにも負けない誇りを持っている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

- ・設立から3年目になるが、多くの人たちが上矢作町を訪れてくれて、自然とふれあう中で自然の素晴らしさや大切さなどを感じていただいていることが一番うれしい。恵那市にこんな素晴らしい自然があるのかと皆さんびっくりして帰られる。だんだん知名度が上がってきたなと感じている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

- ・恵那市役所ふるさと活力推進室、観光交流室、農業振興課、岐阜県恵那市農林事務所農業振興課、恵那市観光協会、上矢作まちづくり委員会、恵那市観光協会上矢作支部、上矢作道の駅ラフォーレ福寿の里、上矢作農産物加工所ふくちゃん工房、上矢作石川トマト農園

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・自然体験活動プログラムを展開(エコツーリズム事業)／アライダシトレッキングツアー、大船山・松並木トレッキングツアー、子ども自然キャンプ、星空観察会など。
- ・町内観光地周辺環境保全事業／創造の森、大船山牧場遊歩道、モンゴル茶屋、矢作川源流の森・復興の森の草刈り・伐採など。
- ・間伐体験

## 現在直面している課題

- ・NPOを設立して3年目。手付かずの自然資源を案内するエコツーリズム事業(COOP岐阜が全面協力)を展開してきて、着実にツアー参加者は増加している(2011年:152名、2012年:315名、2013年:341名)が、まだまだ、プログラムの内容が一面的であったり、参加者の地域が岐阜県内外・美濃市など固定的である。地元の中学生は学校として来るが、それ以外に地元の人は訪れない。大きな広がりにはなっていない。広報、宣伝不足の感否めない。近隣の子どもたち以外にも、矢作川流域など広く活動・周知・交流できることが最大の望みである。

## 今後やってみたいこと

- ・宿泊をセットにした自然体験プログラムを取り入れたい。
- ・矢作川流域圏の上流と下流での交流を行いたい。
- ・愛知県三河地方の人々が参加できるような体制をつくりたい。
- ・大学生を連れてきて教育体験プログラムを行いたい。
- ・いろいろな団体とコラボできるツアーを組みたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・情報＝三河地方の山村体験に関心のある団体。
- ・人脈＝専門的および教育的視点で中山間地域の地域づくりに対し協働で取り組める産学関係者。
- ・矢作川流域「圏」での交流をどんどん広げていきたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> ツアーガイドが伝えたいことは？

<答え> 原生林を通して、人の営みを伝えたい。何を学ぶか、何を知るか、知ったことをどう活かすかを重要視している。ただのガイドではなく、インタープリターとしての立場の確立が必要である。

## その他、伝えたいこと

### ・略歴

1994(H6)年 恵那郡上矢作町と東濃森林組合の管理者が原生林を残す方向で動き出す。

2004(H16)年 まちづくり委員会が運営を行う。

2011(H23)年 NPO法人 福寿の里自然倶楽部が発足する。

・エコツーリズム日程・・・5月10日前後～11月後半まで

・以前は幡豆郡吉良町(現 西尾市)と上矢作町で交流があったが、合併により地域の特色が失われてしまった。

・上矢作町の高齢化率は現在40%。担い手は高齢化し、若者は都会や近隣の恵那市などに出ていってしまう。

・町内にある国民健康保険上矢作病院や老人ホーム福寿苑には、外から働きに来る人しかいない。

・大船山牧場には岐阜県内唯一の風力発電があるが、現在はほとんど稼働しておらず、エコツアーとして利用が危ぶまれる。

・豊田市や岡崎市など流域圏の子どもたちと交流をしたいという思いがとてもあった。まずは事例集づくりのメンバー全員で視察と交流を兼ねて、アライダシ原生林トレッキングツアーを5月に実施してもらう予定。

## 写真



←福寿の里事務所の入っている、奥矢作木センター玄関

↓事務所内にて(左から):横光八洲男さん、渡会三治さん、取材者(近藤、安藤)



↓玄関にて(左から):取材者(浜口、近藤)、渡会さん、横光さん



# 矢作川水系森林ボランティア協議会

調査団体名	： 矢作川水系森林ボランティア協議会	団体代表者名	： 丹羽健司
設立年	： 2004年1月	対応してくれた人の名前	： 丹羽健司
団体URL	： <a href="http://www.yamorikyuu.com/">http://www.yamorikyuu.com/</a>	調査員	： 後藤伸也、蜂須賀 功
活動拠点	： 矢作川流域	レポート作成者	： 蜂須賀 功
取材日	： 2014年1月30日		

## 活動内容

矢作川水系森林ボランティア協議会（以下、「矢森協」という）は、現在14の森林ボランティアグループから構成されており、約250人が所属している。主に、森の健康診断と協働間伐モデル林事業の2つの事業を行っている。

### ●森の健康診断

2005年から毎年6月第1土曜日に開催している。流域の人工林の現状を市民の五感と科学で明らかにしようと、これまで豊田市、根羽村、恵那市、平谷村、設楽町、岡崎市などで9回行われ、延べ約2,000名の参加者があり、調査も2巡目に入っている。森林ボランティアをリーダーに地元サポーター、自然観察サポーター、一般参加者を合わせて1班8人程度で編成し、植生調査と混み具合調査を合わせて50数項目の調査をマニュアルに従って調査する。現地では、調査後、林分の診断と処方全員で討議し、全体では秋に報告会を開催し、研究者によって集計分析された結果を参加者で共有している。2014年度で10回目を迎え、森の健康診断は終了する。

### ●協働間伐モデル林事業

豊田市山間部の幹線道路沿いの森林をモデルとして、山主と矢森協で林分調査を行い、森林インストラクターによる講習の後、山主と一緒に間伐を行う事業。年間8ha行っている。山主たちは、森林ボランティア（矢森協）から楽しさを、森林インストラクターから確かな技術を学び、山主たちの山仕事に対する意識が変わりつつある。

### <設立までの経緯>

2000年9月の東海豪雨は想像を超える豪雨であり、あと30分続けば豊田市内は水没していたかもしれない。矢作ダムの一面を覆い尽くす流木、「沢抜け」と呼ばれる土砂崩落などにより、山がいかにかぼつたらかしであるかを代表の丹羽氏は感じた。そこで、山の現状を調べるために、山主1,000戸にアンケートを行ったところ、山主は自分の山の現状を全く知らない、素人であることがわかった。同時に丹羽氏は、足助きこり塾で森林ボランティアを始め、その過程で、伊那市の森林塾で島崎メソッドに出会い、山仕事の楽しさを伝える精神と確立されたメソッドに感銘を受ける。その後、島崎メソッドの森林塾を豊田市に誘致し、森林ボランティアの育成をしながら、その受講生の活動の場として、足助きこり塾が中核となって、矢森協を設立した。

## キャッチフレーズ

山と都会に幅広い森の応援団づくり

## 会のモットー（何を大切にしているか）

「森林ボランティア、無償奉仕から交流学习へ」

無関心な山主に科学的で愉快的な山仕事を伝えること、広範な都市住民に森林と山村の実態を知らせること、プロの林業者に持続可能な林業を行えるよう応援することを目指す。

## 設立から現在に至るまでに変化したこと

矢森協の設立後、毎年、森の健康診断や間伐モデル事業を行ってきたが、森の健康診断事業も落ち着き、「成熟した時期」を迎えている。

また、組織が大きくなってきたための悩みかもしれないが、矢森協の理念の浸透が希薄になってきた気がする。「チェーンソー暴走族」にならないよう、矢森協の歴史、流れを皆に伝えていきたい。



## 現在直面している課題

最近、森林ボランティアの作業中の事故がよく報告されている。矢森協でも、いつ起きてもおかしくないと認識しており、安全対策は重要な課題である。活動が広がれば広がるほど、事故の起こる可能性は高くなる。事故を防ぐにはどうすればよいか、矢森協内部で徹底的に議論した。その結果、事故を防ぐ特効薬はないが、従事者がお互いに見守りあい、自分の弱さを見せることを恐れない、すなわち「弱さの情報公開」をすることが重要だとわかった。迷った時は遠慮なく、仲間に聞く人間関係づくり、言いあえる関係をもつことが大切である。

## 今後やってみたいこと

森の健康診断が来年度で10年を迎え、終了するが、今後は、現在も行っている森の健康診断の全国出前授業をもっとやっていくことになるのではないかと考えている。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

全国で森の健康診断を始めようとする団体に、現地に出かけてリーダーの養成から運営までのノウハウを教えるため、人材、費用の確保が必要になる。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 行政とどのように関わっていますか。また、補助金などの支援を受けていますか。

<答え> 行政(豊田市)からは、金銭的にほとんど助成を受けていない。各グループや会員からも、カンパはいただいているが、会費として強制的な徴収はしていない。その点が自立しており、民主的な運営で、最適なスタンスだと思っている。

また、会員はとよた森林学校の卒業生を対象としており、卒業後はその先輩が面倒を見る形で、森林ボランティアとして育成している。矢森協としては、ある程度能力を持った人で、きちんとした団体しか受け入れない。そのため、メンバーは非常に自主的で、細かな指示をしなくてもみんな動けるところがすごい。

## その他、伝えたいこと

○私たちの仕事は、家庭教師。

山主にプロのように教えることはできないが、学生家庭教師のように、科学的に山仕事を学び、気づく楽しさを教えることはできる。

○私たちの仕事は、触媒。

都会住民に対し山の大切さを語り、素人山主に対しラブコールを送り、山仕事のプロに対し自信を持ってと励ます、3者の間の「触媒」となっている。

## 写真



森の健康診断の様子



協働間伐モデル林にて

# とよた森林学校

調査団体名	: とよた森林学校	団体代表者名	: 北岡明彦
設立年	: 2010(平成22)年	対応してくれた人の名前	: 北岡明彦
団体URL	: <a href="http://woodytoyota.net/gakkou/0_index.html">http://woodytoyota.net/gakkou/0_index.html</a>		
活動拠点	: 愛知県豊田市森林課	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
取材日	: 2013年11月21日	レポート作成者	: 長澤壮平

## 活動内容

1. 人工林の間伐ができる人材の育成。
  2. 今までに森林や林業に関心がなかった森林所有者に森林や林業の基礎知識を解説する。
  3. 森林・林業の理解者などの「森の応援団」を増やす。
- 以上の目的のために年間14の講座を開いている。大きく分けて、「人材育成コース」と「森の応援団コース」の2コースがある。前者は本格的に人材を育成するコース、後者は市民が気軽に参加し、森林への理解を深めるコースになっている。特に「森の応援団コース」は人気が高く、抽選となる講座もある。

## キャッチフレーズ

### 行政の英断

### 会のモットー(何を大切にしているか)

大事なものは、人づくり。もう一つは、一般市民への啓蒙普及。  
豊田市の“森づくり”という基幹があって、これを支援するため、そして実現するためにはどうしたらいいかということコンセプトとしている。継続こそ力なり。

## 設立までの経緯

1996(平成8)年に山里足助森林協力隊が誕生したのに続き、元信州大学教授島崎洋路先生(とよた森林学校長)が講師を務めた講習会の受講生によって、森林ボランティアグループが市内各地に結成された。各グループは徐々に交流を深めていき、「みんなで森林から学び、森林を知り、森林のためにそれぞれの立場で努力しよう」と、2004(平成16)年1月に『矢作川水系ボランティア協議会(矢森協)』を結成した。現在も「森の健康診断」や「間伐モデル林事業」等々の企画、運営を行っている。都市と農山村の交流を進めるNPOも誕生した。こうした先駆的運動があって、豊田市に『とよた森林学校』が設立された。  
(『矢作川流域 森林物語』発行豊田市 から抜粋)

## 連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校OB会、とよた都市農山村交流ネットワーク  
講座の抽選に外れた人の受け入れや講座修了者のレベルアップなど、広範な活動によって広報・啓もう活動をしていただいている。どう考えてどうお願いしたいか全てわかって協力いただいている。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

先に掲げた、講座の実施が具体的な活動。これまでの成果はまだ見えない。例えば豊田市民は41万いる。8年やってきたこの講座の参加者は、1,000人とか2,000人の単位。豊田市民では1,000人いないだろう。少なすぎる。できれば最低1割(4万人)まで来てほしい。ただ、あまり門戸を広げすぎてイベント型にする気持ちはない。  
豊田市には緊急に間伐しなくてはならない森林が20,000haある。森林組合は年間1,400ha間伐している。そういう中で、ボランティアがやる面積は5haだが、都市住民も森づくりに参加するという、それ自体に意味があると思う。

## 現在直面している課題

セミプロ養成講座は、今の林業の実情からして難しい面がある。講座を終えて実際に林業に携わる人は2割ほど。せっかく講座をやっているけど林業が厳しい状況なので、なかなか業として成り立たせるところまでいけないというのが大きな課題。

## 今後やってみたいこと

自分の持っている山をどういうふうにしたらよいか。それを森林所有者の立場で考えれば、「自分が気持ちのいい山だ」と思えること。自分が、あるいは家族、子ども、孫、ひ孫に、わしがつくった山はこういう山だと誇れるような山をつくってほしい。ひとつのパターンとして、針広混交林がある。ヘクタールあたり数十本は、とてもいい杉や檜が残っている。隣を見ると、シラカシのいい木がある。で、林床にはちょっと草花も咲く。そんな森はどうかと提案している。それが豊田市の森づくりだろうと思う。それは林業生産している多くの人の考え方とは違うかもしれない。けれど林業生産をしている人でも、必ずしも人工林一辺倒がいいとは思っていない。どうしたらいいのかわからずにいる人の方がはるかに多いと思う。いろいろな考え方を多くの人に話して、自分で選んでもらう。最後は自分で選ぶことが一番大事なことから。そういういろいろな話をする機会をつくるのが、行政としては大事なことではないかと思う。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 良い森とはどんな森ですか？

<答え> 豊田市に限れば、豊かな動植物のいる森。生物の集合としての、まさに生態系としての森林。目指す豊田の森というのはそういう森ではないか。林業一辺倒ではなく、公益的機能も得られる森林。豊田市の場合、自家林業では生計は成り立たない。そこを基本にすると間違えてしまう。

<質問> 写真を見ると楽しそうですね。

<答え> 僕が楽しまない参加者は絶対楽しくないですから。まず僕が楽しむようにしている。だから楽しいと思うことしかやらない。それから、子どもたちが喜んでくれるのがやっぱり一番楽しい。本当に楽しい。

## その他、伝えたいこと

1人でも多く市民の方に参加していただきたい。「自分はわかっている」という人ほど来ない。でも、そういう人にこそ来てほしいと思っている。

## 写真



# とよた森林学校OB会

調査団体名 : とよた森林学校OB会  
 設立年 : 2010(平成22)年  
 団体URL : [http://www.woodytoyota.net/gakkou/0\\_index.html](http://www.woodytoyota.net/gakkou/0_index.html)  
 活動拠点 : 愛知県豊田市および広域  
 取材日 : 2013年11月21日

団体代表者名 : 山本薫久  
 対応してくれた人の名前 : 山本薫久、高部ほなみ  
 調査員 : 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平  
 レポート作成者 : 長澤壮平

## 活動内容

『とよた森林学校』の修了生たちが任意に集まり、OB会として組織化した。幹事は、山主から2人、観察リーダーから2人、森林ボランティアから2人、その他から2人を選んで、多様な人に担ってもらうようにしている。

- 自然観察会:リピーターの受け皿として、そして森林学校ではカバーできない地域外のフィールドなどで、自然観察会を行っている。また、「樹木観察会」は、この地域の樹木を学習する趣旨で開講している。
- 間伐モニタリング調査:間伐ボランティアが施業した場所の間伐前、間伐後の推移を調査している。
- 間伐技術ステップアップ講座:森林ボランティアの技術向上のための講座を行っている。
- 木工教室:間伐材でベンチを作っている。

## キャッチフレーズ

手弁当で応援する豊田の森づくり

## 会のモットー(何を大切にしているか)

受講者が自分で何かやっというときの一つの手がかりになればという思いでやっている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

最初は70人くらいだったが、会員が徐々に増えてきている。現在は概ね150人くらいで推移している。

## 連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校とは常に連携を保っている。

## 現在直面している課題

山主に間伐技術ステップアップ講座を受けてほしい。間伐ボランティアはあらかじめつながりがあるのでいろいろと情報が回るが、山主には森林学校の講座を受けた後のフォローがないので、そこが課題でもある。

## 今後やってみたいこと

子持ちのお母さんたちは、自然観察会などには参加しにくい状況。そこで、歩けるくらいの子であれば、同伴で参加できるような親子の自然観察会をやりたい。これができるのはOB会じゃないかと思っている。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

保母の資格をもっている人などに、お願いできるかもしれないと思っている。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 運営を自立的にやるうえでの経済的な苦勞は？

<答え> メインの講師もほとんどボランティアで来ていただいており、会報の発送もとよた森林学校に同封していただいているので、経済的にはあまり問題ない。

## その他、伝えたいこと

交流会を開くなど、外部と広く交流していきたい。

## 写真



OB会の活動風景

# とよた都市農山村交流ネットワーク

調査団体名	: とよた都市農山村交流ネットワーク	団体代表者名	: 山本薫久
設立年	: 2008(平成20)年12月10日	対応してくれた人の名前	: 山本薫久
団体URL	: <a href="http://www.toyotasanson.net/">http://www.toyotasanson.net/</a>		
活動拠点	: 愛知県豊田市の農山村	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
取材日	: 2013年10月29日	レポート作成者	: 長澤壮平

## 活動内容

活動の目的は、都市と農山村が交流する場をつくることによって、都市部の人たちに農山村の魅力を伝えるとともに農山村を活性化すること。足助、旭、稲武、下山、小原、松平など豊田市の農山村域でさまざまな交流事業をしてきた。旧町村ごとに地域会(6地域会)を組織し、幹事が集まり毎月打ち合わせを行っている。農都交流の取り組み、都市と農山村のネットワークを構築し推進する組織が、とよた都市農山村交流ネットワーク。

もっとも力を入れている活動は「セカンドスクール事業」。ひとつは、豊田市内の希望する小学校が行事として2泊3日の農山村体験をするというもの。小学生3人から4人で1軒の農家に泊まり、3日間は田舎の子になる。野菜が大好きになったり、食事作りや後片付けが当たり前になったり、保護者がびっくりするほど子どもたちによい影響を与えている。もうひとつは、希望する小学生が2泊3日や1泊2日で農山村体験できるフリー版を実施している。毎回希望者が殺到し、事業の拡大を目指している。2013年度は約250人の小学生が参加した。

その他、広く大人を対象に行っている事業として、農業体験、山里の料理・道具などを手作りする山里の知恵を学ぶ講座、森林の恵みを体験する講座など、多彩な講座を開き、都市の人々が農山村に触れる機会を提供している。

## キャッチフレーズ

### 農山村の教育力

#### 会のモットー(何を大切にしているか)

私たちの子や孫たちが 住み続けたいと思う 帰りたいと思う そのような「山里」にしたい  
訪れる人が また来てみたいと思う 住んでみたいと思う そのような「山里」にしたい  
そのような「山里」の 山・川・里で  
自然にふれ 山仕事をして 野良仕事をして 人と交わることが 幸せだと思  
そんな輪(ネットワーク)を広げたい

## 連携している団体・専門家・自治体など

2010年3月、農山村で活動するさまざまな団体やグループと「農山村へのシフト千年委員会」を立ち上げて、毎月、会合を開催している。それらの団体と共に実行委員会をつくって、農山村地域で「あすけ夢里まつり」「ほんわか里山交流まつり」、豊田の市街地のど真ん中で「いなかとまちの文化祭」を開催している。延べ数千人の参加を得ている。これらの取り組みによって、多くの市民に暮らしの原点である農山村の自然、営み、文化に注目をしていただいている。その動きの中で、今年度、豊田市は『おいでん・さんそんセンター』を設立した。このセンターは市の組織として、都市農山村交流を進めようとするもので、とよた都市農山村交流ネットワークと目的や事業内容がほとんど一致している。このため、高度な協力体制が可能になり、農山村交流の取り組みは今後ますます活発になると予想される。セカンドスクールでは豊田市教育委員会の協力を得ていて、未来の山村を担う次世代教育となっている。

## 現在直面している課題

地域ごとに特色があり、セカンドスクールのやり方も地域ごとに全く異なるため、一律の活動にせず、そうした地域ごとの特色を活かすよう気を配っている。

## 今後やってみたいこと

セカンドスクールの受け入れ態勢を充実させ、さらに拡張していきたい。また、『おいでん・さんそんセンター』やさまざまな団体と協力共同をさらに進め、取り組みを充実させていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

活動は豊田市と連携しているが、縦割りではいけないと思っている。例えば、産業部の農政課がやってるからグリーンツーリズムだ、地域づくりだから社会部だ、持続可能な社会といえば企画だというのではなく、それら全てを総合するような取り組みとしてやっていきたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>若い人や地域の人たちとの結びつきをどうやってつくってきたのか。

<答え>地域で本当に意欲がある人とは、結びつきやすい。田舎に住んでいても、どうでもいいという人たちとは難しい。それから、自分の世代しか考えてない人も難しい。子や孫とか、先々のことを考えてない人たちは、今の生活に満足しているので、新しいアクションはいらないと考えている。しかし、旭地域の人たちは子や孫の時代がどのようになるか見ているし見えているので、活動に意欲的。そういう人たちと一緒にやっていける。

## その他、伝えたいこと

いろいろなところで皆さんがもうやっておられるので、一緒になってやれば良いと思う。豊田市で完結するのではなく、根羽とか設楽とか恵那とかと結びつのが大事。この地域は山も海も都会も近いので、やりやすいと思う。流域圏全体が結びついて一緒にやっていきたい。

## 写真



セカンドスクールの様子

# 豊森なりわい塾

調査団体名 : 豊森実行委員会  
 設立年 : 2009年5月  
 団体URL : <http://www.toyomori.org/>  
 取材日 : 2013年1月19日

団体代表者名 : 澁澤寿一  
 対応してくれた人の名前 : 中川恵子  
 調査員 : 太田 司、丹羽健司  
 レポート作成者 : 太田 司

## 活動内容

「余計な予備知識を一切入れずに取材をしてこい」と共同取材者から命を受け、筆者は豊森なりわい塾（通称「とよもり」。以下、豊森と記載）が何であるかを知らないまま取材地へと向かった。そして実際に「豊森とは何か？」ということが今回の取材ないし雑談の中心話題となった。取材対応者の中川氏によれば、豊森の活動が何であるかは単に断言しにくく、あえて言うならば、豊森的な幸福論を共有し追求する場であるという。塾内において「豊森的」という合言葉を共有しつつも、「豊森的」とはどういう状態であるかを自問し、塾生と塾自体が共に成長している様子が伺えた。

豊森は豊田市、トヨタ自動車株式会社、NPO法人 地域の未来・志援センターの三者の協働で行っているプロジェクトである。森林および里山を学びの場とし、人と地域づくりを考え、それらを活用する仕組みづくりと担い手を創出していく活動を行っている。塾生には都市部や里山地域から、学生やトヨタ自動車の社員など、老若男女が集っている。2009年から5年目の活動で、今期が3期目となる。

塾生たちは各講座で、地域コミュニティーの暮らしや経済など、特に森林と共に生活する里山の問題点などを学び、議論を深める。さらには、実践的なアイデアを持ち寄り、住民たちと共に里山の生活に活用するような取り組みまでも行う。過去の塾生の中には、ただ学ぶだけでなく、実際に里山での生活を選択し、移住を決意した者も少なくない。

このような議論の中で形成されるのが、彼らが口にする豊森的な活動である。豊森的な活動とは、さまざまなフィールドの人間たちが、それぞれの思いで、森林と里山について語り合い、実践に移していくことであるのだろう。まるでさまざまな色の絵の具で描かれた、一つの里山の風景が目浮かぶようである。そこには森と里を生業とする人間たちが生き生きと存在している。

## 会のモットー

地域を知り、地域に入る。まちとむらをつなぐ仕組みをつくる。自然に根ざして暮らし・しごとを創る。現代の百姓を目指す。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

豊田市の農山村に関りながら、継続的に豊森を実施していく中で、多くの人たちが仲間とつながり、地域を見つめ直し、自分を見つめ直して、実践の伴う新しい価値観を持った人材が輩出されている。塾生の中から実際に山里に移り住んで、地域の針葉樹を活用した家具づくりの工房を立ち上げたり、ふるさとにUターンして事業をスタートさせるなど、地域に根ざした暮らしや事業を始める人や、農山村に関りながら新たな生き方を選択する人たちも現れた。

## 連携している団体・専門家・自治体など

とよた森林学校、おいでん・さんそんセンター、夕立山森林塾、地域再生機構など



## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

カリキュラムの中でフィールドワークを実施し、地域の人々から知恵を学ぶ。また、地域住民と共に活動することで、共に山村を再生する方法を模索していく。塾生たちは豊森で学んだことを、それぞれの意図と方法で日々の生活や仕事に活かしていく。実際に山村に移り住むことを選択する者や、自主的に交流や農的な活動を行うものも数多くいる。

## 現在直面している課題

豊森での活動を広く知ってもらい、継続的な運営のための塾生を確保すること。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 豊森は何を目指しているのか。

<答え> 豊森が目指していることは、塾生が自ら考え行動していくことである。各塾生が当塾に来る動機は実にさまざま。「豊森なりわい塾」で学んだことをベースに、塾生たちがそれぞれの目指すものを実践していけば良いと考えている。シアワセな社会とは何か、これからの社会のカチをみんなで模索する、そのプロセスが豊森的なあり方。

## その他伝えたいこと

筆者が取材に訪れた際に講座が丁度開催されていた。豊田市足助の会館の一室では30人以上の人々が、山村の問題点と再生へのプランを熱心に議論していた。和気あいあいと話す彼らを見て、筆者は山村の問題点の解決方法への実に単純かつ最も重要なヒントを学んだような気がした。山村にこのような話し合いの場所が少ないこと自体が問題だったのではないだろうか。大勢が村のことを真剣に考え、自由にものが言える場所があり、そこには他所からの意見も加わり、いつも新鮮な話題であふれているナマの議論が行われる場所があまりにも存在しないのではないかと。そして同時に筆者は悲しさを感じた。それはそこに村人の実態との大きな隔たりがあり、この単純な解決方法が実践できない事実についてのやるせなさを感じたからである。しかしながら、種をまく人間がいなければ、もちろん収穫はない。ここ豊森には、それぞれの塾生がそれぞれ自分らしい希望の種をまこうとしている、何とも言えない心地よさがあった。

## 写真



# 株式会社 M-easy

調査団体名	: 株式会社 M-easy	団体代表者名	: 戸田友介
設立年	: 2003年	対応してくれた人の名前	: 戸田友介
団体URL	: <a href="http://www.m-easy.co.jp/">http://www.m-easy.co.jp/</a>		
活動拠点	: 愛知県豊田市太田町蟹田6番地 福蔵寺内	調査員	: 眞木宏哉、浜口美穂
取材日	: 2013年11月27日	レポート作成者	: 浜口美穂

## 活動内容

### ●活動の経緯

戸田さんが名古屋大学の学生だった当時、大学、学生、経営者の有志が集まってこれからの社会のあり方について議論する「ひと循環型社会支援機構」に参加。これをきっかけに、「これから農業がどんどん衰退していき、自分たちの時代は、安心して食べられるものがなくなってしまうかもしれない！」と思い立ち、若者による農業をベースにした未来づくりをすることを掲げて、同機構の支援も受け、学生を中心に同社を設立した。

2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を開始。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜と一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は2013年10月末に同社から独立。

2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。

結果、7人が独立して移住。現在は、時につながりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなでつくる「まるっこくらぶ～みんなでつくってみんなでわける野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。2013年3月には「生きるを考える講座」を行った。

## キャッチフレーズ

地域に根ざした、はたらきかた・くらしかた・いきかた

## 会のモットー(何を大切にしているか)

地域で生きていくこと。  
生き方、暮らし方を問い続けながら、ライフステージに合わせた活動を行っていく。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

当初はどう稼ぐかということばかり考えていたが、スタッフや地域のじいちゃん・ばあちゃんから、どう暮らしていくかということが一番大切なんだと学んだ。  
その後、田舎と街をつなげる中間の役割を担うことを考えて実行しようとしたが、地域のことができないことに気づいた。街に4分の1くらいいるパートナーが必要。同社のスタッフを増やすのではなく、その時々でつながりながら一緒にやれるパートナーをつくっていきたい。田舎体験の企画のときには、地域の人に手伝ってもらうこともある。法人としては小さく、でも、さまざまな人とつながりながら、活動は大きくなっていくことが理想。

## 連携している団体・専門家・自治体など

旭地区のさまざまな地縁組織や団体、豊田市のさまざまなまちづくり団体、旭木の駅実行委員会(事務局)、とよた都市農山村交流ネットワーク(監事)、東京大学 牧野篤教授、名古屋大学 高野雅夫准教授、NPO法人 樹木環境ネットワーク協会 洪澤寿一氏など多数。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

(同社と個人の動きは明確に分けていないことを前提に)

2013年4月に、豊田市の地域会議制度を利用し「あさひ若者会」を結成(事務局は旭支所)。

●背景:お年寄りと若者の間には気持ちの隔たりや遠慮があるが、若者を巻き込んでいかないと地域づくりはできない。若者も地域のことを真剣に考え、何かやりたいと思っている。

●具体的取り組み:渋澤寿一氏を招いて講演会、年配者を案内人に村歩き、ワークショップ(何十年か後の旭がどうなっているか、何がしたいかを出し合う)など。

●戸田さんの感想:地域の若者たちは、「持続可能な社会」という言葉は使わなくても、そのことが腹に落ちているように感じた。

●若者たちが起こした変化:築羽(つくば)自治区で、笛の吹き手がないから郷社の祭りをやめようという話がお年寄りの中から出たが、若者たちは「いないなら、笛の練習をしよう」と練習会を開き、祭りは継続された。

●今後の可能性:若者会で「ターン」を呼び込むことができるように。また、「ターン」で入ってきた人と若い衆同士のつながりができるように。

## 現在直面している課題

課題があるから楽しい。何かやるときに、多様な人がつながって一緒にやればいい。お寺が本来、住職だけのものではなく、檀家のためや地域の人のために存在するように、同社もその感覚でやれるといいと思っている。

## 今後やってみたいこと

子どもができてから「教育費はどうするの?」とよく聞かれるが、教育まで外注するのかなと思う。教育費のためにお金を稼ぐなら、その時間をいろいろなことを体験させたり、親の働く姿を見せたりする時間に充てたい。地域が学校になるような、地域の人々が先生になるような仕掛けをつくりたい。

地域の中では、自分のライフステージと合わせてさまざまなことを変化させてやっていけば、自分が納得できる仕事ができる。今は小さな子どもたちが集う企画など。山里では死ぬまでやることがあると思う。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>若者PJの他にも、豊森なりわい塾、とよた都市農山村交流ネットワーク、旭木の駅プロジェクト、千年持続学校など、さまざまなプロジェクトが旭地区に集中する理由は何?

<答え>

○豊田市の中でも高齢化率は41%と、一番高い分、危機感がある。

○旭地区は財産区や観光資源など、経済的基盤が弱い。国道もない。他の地域に比べて何も無い分、お金とは関係ないコミュニティが残っている。観光にも毒されず、人がいい。都会の人をつなげるにも、ここなら今までの観光のあり方とは違う、濃密に人と関わりながら気づきを得る新たな観光ができるのではないかな。

○地域をなんとかしたいという数人のキーマンが動いてきたことと、外部からのプロジェクトの刺激がいいご縁で重なりあって、人が人を呼ぶ動きになってきたということだと思う。捨てずにあきらめずに地道に行動し続ければ、いつかかたちになる。

## その他、伝えたいこと

○「ターン」で来る人に

一番大切なのは、自分が自分なりに生きていくこと。悩んでいる過程もとても大事。稼ぎに意識がいきがちだが、自分なりの暮らしをつくることを意識して役割を担い、その延長に稼ぎ仕事があると考え、心を平穏に保ちながら住み続けることができると思う。孤立しがちなので、お祭りやお役に積極的に出て、その場を楽しんで!

写真



同社の事務所になっている福蔵寺にて。写真右の右側が戸田さん



ピザ窯が地域のイベントなどで活躍



戸田さん宅で薪割り実演

# 旭木の駅プロジェクト

調査団体名	旭木の駅プロジェクト(実行委員会)	団体代表者名	高山治朗
設立年	2011年	対応してくれた人の名前	高山治朗
団体URL	<a href="http://kinoeki.org/">http://kinoeki.org/</a> (木の駅プロジェクト ポータルサイト)		
活動拠点	愛知県豊田市旭地区	調査員	眞木宏哉、浜口美穂
取材日	2013年11月27日	レポート作成者	浜口美穂

## 活動内容

「木の駅プロジェクト」は、伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、土場まで運べば、1トン(軽トラ約2杯分)で6,000円相当の地域通貨「モリ券」が対価として得られるという仕組み。2009年に岐阜県恵那市で始まり、現在、全国で約40カ所に広がっている。旭地区は2011年3月、全国で3番目にまずは社会実験として取り組みを始めた。

### ●背景

2005年に矢作川流域圏の町村を合併した豊田市は、2007年に豊田市森づくり条例を制定し、森林所有者と市、森林組合が一体となって間伐する「森づくりの団地化戦略」を進めている。また、市民側でも「森の健康診断」に取り組むなどの動きがあり、その流れの中で、木の駅プロジェクトが立ち上がった。

### ●プロジェクトの流れ「旭木の駅プロジェクト」の流れを紹介しよう。

- ①出荷したい人はまず実行委員会に登録する。
- ②放置材あるいは間伐した木を山から搬出し、土場に持ち込む。出荷樹種は柿の木以外は何でもOK。長さ50～210cmまで、末口直径5cm以上。
- ③土場には登録者の札が立っていて、その前に積む。
- ④自分で出荷材の長さ末口直径を計測し、事務局に申告。(第1～4回までは体積×比重0.8で重量を出していたが、第5回は比重0.75で計算)
- ⑤事務局から、1トンあたり6,000円相当の地域通貨「モリ券」(1モリ=1,000円)が発行される。
- ⑥モリ券は地元の登録店のみで使える。登録店は、飲み屋、温泉、食料品店、床屋、森林組合、ガソリンスタンド、コンビニなど多種多様。
- ⑦出荷材は、名古屋港木材倉庫(株)が1トン3,000円で買い取り、チップに製品化される。

### ●これまでの結果

第1回(2011年3月)、第2回(2011年11月～12月)、第3回(2012年2月～3月)、第4回(2013年11月～2014年3月)、現在、第5回目(2013年11月～2014年3月)実施中。3回目に、森づくり団地(豊田市施策)の伐り置き材の出荷などにより、出荷量が飛躍的に増え、第4回の出荷量は350トンに及んだ。出荷者数は53人、登録商店数は34店舗。

## キャッチフレーズ

軽トラとチェーンソーで晩酌を

## 会のモットー(何を大切にしているか)

### 「継続こそ力なり」～そのポイント～

- ・山林保全活動の必要性はわかっているが、考えだけでは動かない。経済的な要素を取り入れることで継続性のある動きになる。
- ・間伐からモリ券交換、流通の仕組みが簡単で受け入れられやすい。年配の人でも参加しやすい。
- ・買い取り価格とモリ券発行の差額3,000円を寄付金、志材(モリ券に交換しない寄付材)、市の地域提案事業負担金で賄っている。市が実行委員会に参加し、負担金を出すようになったのは第4回目から。2012年度は1トンあたり逆ザヤ分の9割(2,700円)を200トンまで補填するように負担金をもらい、2013年度は300トンで8割、2014年度は300トンで7割(3年限定)と、変化している。関わるみんなが自分たちでやろうという気になることを最重要と考えている。市からも出荷された材の分だけ補填してもらおう形で、縛られないようにやっている。
- ・しっかりした事務局体制をつくる。モリ券の5%を事務処理費に回し、そのうち2%を登録商店が負担している。
- ・出荷量は自己申告に基づくため、顔が見える範囲でしかやれない仕組み。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

### 第5回からの変更

- ・「土場利用会」をつくり、出荷者自らが土場の準備・片付け・運用を行っている。
  - ・商店が主体となって登録商店カタログができた。
  - ・モリ券1,000円券に加え、新たに500円券を発行。使いやすくなった。
- その他にも細かい変更事項あり。出荷者も商店もみんなが少しずつ工夫をし始めた。「少しずつ、少しずつ」が大事。

### 連携している団体・専門家・自治体など

豊田市旭支所、豊田森林組合、矢作川水系森林ボランティア協議会、森林ボランティアグループ、数名の研究者

### 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山林の健全化、地域通貨による商店の活性化など、システム自体が山村再生の取り組みそのもの。出荷者に対して、安全講習も行っている。

### 現在直面している課題

- ・現在、5回目までマンネリ化しつつある。新たなモチベーションが必要。
- ・逆ザヤ分を埋める付加価値の高い販路、販路の多様化が必要。

### 今後やってみたいこと

新たなモチベーションとして、事業者が加わるとよいと思っている。例えば、建設会社や薪の会社など。

### チームオリジナルの質問

<質問内容>プロジェクトに対する住民の反応は？

<答え>最初は、みな半信半疑。旭支所と森林組合の後援があったため、説明会にはとりあえず参加し、よくわからないが、とにかくやってみようかという感じ。80代の方はそんなことやっても・・・という反応だった。しかし、モリ券を手にし、例えば、刺身は外の地域のスーパーで買っていた人が、地元の店で初めて買って美味しさがわかるなど、地元店の魅力再発見につながり、モチベーションも上がった。また、第3回目くらいから、個人の山主が出荷するだけでなく、お宮や公会堂周辺を集落の衆が協力して出荷し、夏休みに子や孫を呼ぶ会を開催したり、祭りの余興資金にしたりする活動にも広がっている。

### 写真



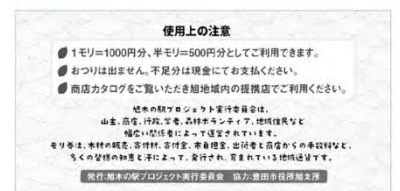
↑↓2011年3月の出陣式



↑土場は4カ所ある



↑熱い思いを語る高山さん



↑モリ券

# 千年持続学校

調査団体名	: 千年持続学校	団体代表者名	: 高野雅夫
設立年	: 2011年	対応してくれた人の名前	: 高野雅夫
団体URL	: <a href="http://sustaina1000.cocolog-nifty.com/blog/">http://sustaina1000.cocolog-nifty.com/blog/</a>	調査員	: 太田 司、丹羽健司
活動拠点	: 愛知県豊田市旭地区	レポート作成者	: 太田 司
取材日	: 2014年2月15日		

## 活動内容

田舎への移住には4つのカベがあると考えている。①住むところがない②生業がない③医療機関がない④高校、大学などの高等教育機関がない。これらのカベに取り組み、若い人の移住を応援しようと、生まれたのが千年持続学校。まずは①、空き家探しは借り手と貸し手のイメージがなかなか折り合わない。それならいっそ造ってしまおうとなった。受講料5万円×30名＝150万円が建築資金（現代版の＜講＞）。受講生は自然エネルギーや大工技術を学びながら力を出し合い、家をつくる（現代版の＜結＞）。完成予定の家の住み手は、地元の方々話し合いの上、移住を希望する受講生の中から決定した。

## キャッチフレーズ

自然(じねん)なマネージメント

## 会のモットー(何を大切にしているか)

さまざまな人が集まり学び合うことから、地元の人、その子ども、I・Uターン者、都市の人、それぞれの学びたいことや、生活に密着した衣、食、住に関わることを専門的に学べる場となってゆくことを目指している。田舎暮らしを目指す人たちに、家をつくるという行為を通じて、田舎暮らしにはどうしても必要な、助け合い、共に生きる 現代版「結いと講」の生活術と心を伝えていきたい。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

2011年9月に開講してから毎月最終土日に講座を行い、その他に自主作業も行っている。つぶれた小屋の撤去作業から始まり、近くの山で木材を伐り出し、伝統軸組み工法の大工仕事で木材を加工して、2013年6月30日に上棟式を行った。この間に、待ちきれず受講生の中から4家族10人が旭・足助地区へ移住した。30歳代を中心に20歳代も多く、意外と50～60歳代は少ない。河合棟梁の伝統工法を伝えたいと思いと本物を学びたいという受講生の意欲が反応し、技術は非常に向上したものの、計画の2倍近い時間がかかっている。一方、定例会や自主開催ワークショップには子どもたちも集まり、家づくりに励む大人の姿を見ながら子どもたちが勝手に遊ぶ、懐かしく微笑ましい光景が出現している。設立当初は専従事務局を置いたが、半年過ぎから定例開催日にホームルームとして全員で協議して運営する方式に変更した。

## 連携している団体・専門家・自治体など

とよた都市農山村交流ネットワーク、おいでん・さんそんセンター、足助きこり塾

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山を見、木を伐り、製材することから、地元と協調しての上棟式や、耕作放棄地の活用や、農産加工に至るまで、モノとワザと文化での地域の宝物探しが始まっている。また、家づくりだけでなく、藤村氏を迎えての3万円小仕事ワークショップや心と体のワークショップが催されたり、移住も実際に進行している。

## 現在直面している課題

家づくりは、設計士の市川さん、伝統工法伝承にこだわる地元の棟梁・河合さんの強力な無償ボランティア講師を得て可能になった。その分、講師・受講生とも求めるレベルやこだわりも高くなる。必然的に時間も費用も計画以上にかかることになり、工期も費用も倍以上かかることになった。どの辺で折り合いをつけるかが難しいが、それがまた楽しくもある。

## 今後やってみたいこと

地元と協働しての、土地探し、地域融和、仲間・資金集め（結と講）、職人探し、家づくりからエネルギー自給までの標準マニュアル的なものをつくって提供したい。3事例ぐらい経験すれば、どこでもできるよう標準化できるのではないか。素人でもできることとプロに頼まなければできないことを見極めて、心地よくシェアしていけたらいい。そこは地元のプロの出番ができるし、学びの場にもなる。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

地域の人材データベース、集落の作法集

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 地元との関係づくりで配慮したことは？

<答え>

導入に当たっては、地元のキーパーソンがきめ細やかに動いてくれた。少し距離を置いて見られていたが、学校としてはあえて何もしなかった。入居予定者が隣近所に関わっていくことに寄り添うことを優先した。上棟式では集落の人たちも集まってくれてお祭りのようになった。むらに子どもらの声が聞こえることが大きい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> やってみて一番驚いたことは？

<答え>

受講生たちが何組か待ちきれずに、本格移住や仮移住など始めたこと。その過程で互いに助け合う仕組みや作法を自然に学び、つくっていったこと。

## その他、伝えたいこと

定例会には100人の集落に子どもも合わせると50人くらい集まる。地域と世代をつなぐ村がこうしてできていくのかもしれない。広がりも深まりも運営も自然（じねん）に進んでいく。

## 写真



上左:上棟式 下左:腰板打ち 下中:親子で木酢液塗り 下右:近くの寺でぬかど炊飯 上右:竹小舞





# おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局

調査団体名	: おむすび通貨 一般社団法人 物々交換局	団体代表者名	: 吉田 大
設立年	: 2010(平成22)年	対応してくれた人の名前	: 吉田 大
団体URL	: <a href="http://www.f-money.com/">http://www.f-money.com/</a>	調査員	: 沖 章枝、松井賢子、長澤壮平
活動拠点	: 愛知県豊田市足助町	レポート作成者	: 長澤壮平
取材日	: 2013年11月21日		

## 活動内容

おむすび通貨の単位は、おむすび1つ程度のお米をあらわす「むすび」。1むすびは50円で、10むすび券もある地域限定のお金。

おむすび通貨は提携店で使え、有効期間は6カ月。有効期間を終えると、提携店は集まったおむすび通貨を地元農家がつくったお米と交換する。農家はそこで得たおむすび通貨を、事務局で現金と交換する。

地域のお米をおむすび通貨に換え、6カ月経つとまた地域のお米に換えられて地域の食べ物になるという、一連の流れをつくりだす。おむすび通貨という地域通貨を循環させることで、お米の地産地消を促すとともに人々のつながりをつくりだす。

お米がその土地の恵みとして生まれ、その土地で食べられるとともに、人々の温かい交換のつながりをつくろうという取り組み。

消費者がおむすび通貨を手に入れるには、イベントの『こども商店街』の際に購入、提携店での購入、物々交換局の事業への参加などの方法がある。

大きなイベントになっている『こども商店街』は、子どもが自ら店を出したり、警察官や放送局などさまざまな職業に就くことで、仮想的な商店街を開き、地域のつながりや、子どもの社会勉強を促す取り組みとなっている。

## キャッチフレーズ

地域のお金が人のつながりをつくる

## 会のモットー(何を大切にしているか)

今、私たちは、あらゆるものの価値を価格で考えている。そのことで、ものに含まれているいろいろな人間的な価値が見過ごされてしまう。その合理主義みたいなものが、思いやりを失わせ、人のつながりを切断してしまっている。おむすび通貨の取り組みで、人がものを交換するときの温かさや思いのつながりをつくっていききたい。

あくまで地域の人自身の取り組みであって、おむすび通貨はその道具にすぎない。コミュニティーにはいろいろな人がいる。弱い人がいて、強い人がいて、わがままな人がいて、やさしい人がいて、むかつくやつがいて、それがコミュニティー。その中での助け合い、支え合いみたいなものを、一緒にゆっくりと合意形成をしていく。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

最初は農家支援というところを全面に押し出して、無農薬の米を扱っていた。応援してくれる人もそういうことに興味ある人たちで、活動の規模が小さかった。しかし、環境運動やパフォーマンスではなくて、社会の仕組みが作りたかった。無農薬や自然農だけでは、本当にやりたいことができない。そこで、減農薬でもいいとしたり、提携店も、大企業は参入できないがパチンコ屋でもいいですよとした。徐々にかたちができるにつれて、本来目指していた形にシフトできてきた。環境運動とか啓発活動というよりも、まさに関わっている人たち自身の取り組みで、おむすび通貨はその道具になっている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

豊田市の商工会議所青年部。豊田市内で150くらいの提携店を集めてくれた。

『とよたこども商店街』は商工会議所青年部が主催。私たちはあくまで企画の支援をやっている。

## 現在直面している課題

補完通貨の難しさは、一気にブレイクさせなくてはいけないところ。正直、提携店が500ぐらいにならないと貨幣としては機能しない。そこまで短期間でどうやってもっていくかというところ。今は上り調子でいる。

## 今後やってみたいこと

将来的には、紙幣の形態と電子マネーとの複合の形態にするつもり。その電子マネーの決済システムを数年以内に立ち上げようとしている。たぶん3年くらいかかると思うが、そうなったときは提携店が1,000くらいになっていて、そのときに融資事業を始めようと思っている。講のように、地域の身近な信頼が基盤になるもので、そこまでいけばやりたいかたちが出来上がると思う。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>これまでに実感できた成果は？

<答え>貨幣として本当に機能してるかといえばまだ難しいが、まずはイベントなどで子どもたちや親御さんがとても喜んだとか、提携店の人がおむすび通貨を持ってきた人と会話が弾んでうれしいとか、そういうことがよく聞かれるのがうれしい。

## その他、伝えたいこと

社会の仕組みは自分たちでつくれるということ。世の中の仕組みで悪いことがあると文句ばかり言う人がいるけれど、自分たちでつくれるんですよと言いたい。お金でいろいろな人が苦しんだり、いろいろな問題が生じているが、そのためのお金も自分たちでつくり、変えることができるということ。

## 写真



おむすび通貨



こども夢の商店街(名古屋市円頓寺商店街にて)

## green maman

調査団体名	: green maman	団体代表者名	: 宇角佳笑、中根桂子、小松昌世、小黒敦子
設立年	: 2007年	対応してくれた人の名前	: 宇角佳笑、中根桂子、小松昌世、小黒敦子
団体URL	: <a href="http://ameblo.jp/green-mamann/">http://ameblo.jp/green-mamann/</a>		
活動拠点	: 愛知県豊田市	調査員	: 後藤伸也、蜂須賀 功
取材日	: 2013年11月26日	レポート作成者	: 蜂須賀 功

## 活動内容

green mamanは、朝市を毎月第4火曜日、豊田市寺部町の守綱寺で行っている。また、スーパーやまのぶ梅坪店「ママンズ キッチン ことり」では、惣菜や弁当、おやつなどを販売し、「green mamanのお気に入り」では、フェアトレード商品や朝市での商品を販売している。2014年1月からは、毎月第2木曜日に、タキソウ家具本店での朝市も開催している。

子育て中の主婦、宇角さん、中根さん、小松さんおよび小黒さんの4人が、田中優さん(反原発や平和活動を続ける文筆家)の講演を聞き、「私たちにも何かできるのではないか」という思いから、green mamanは始まった。「地域で循環」をもとに、エネルギー、人、お金、モノが地域でうまく回るような仕組み、持続可能な社会をつくろうと、まず、農業すなわち「食」からスタートする。

朝市を企画運営し、地域で野菜を作っている人(農業生産者)に出店してもらい、地域の人に野菜を売ろうとしたが、当時豊田市内では産地直売が中学校区単位で進んでおり、なかなかgreen mamanの野菜は売れなかった。そこで、ただ売るのでなく、商品の情報(作っている場所、人)や料理方法、「買い物は投票」という考えなどを併せて紹介するうちに、徐々に浸透していき、現在では野菜、米、パン、ジャムなどの食料品に加え、雑貨なども朝市で出店されている。

## キャッチフレーズ

まちの中の結

## 会のモットー(何を大切にしているか)

朝市では、地域の良心的な農業生産者と消費者をつなげ、農家の思い、農作物の価値を消費者に伝えていきたい。また、環境・平和・衣・食・住・健康について、朝市、やまのぶでの「ことり」「green mamanのお気に入り」などの場を通して、気になったこと、興味を持ったことを学び合い、行動を起こしたり、発信していきたい。

## 設立から現在に至るまでに変化したこと

活動を続けるうちに、農業生産者と消費者に交流(つながり)ができ、ただ「買って終わり」だけでなく、作り手である農業生産者も、より良いものを作るきっかけになっている。

さらには、green maman、生産者と消費者、他団体との交流が深まり、現在ではメーリングリストでさまざまな情報を交換し合っている。メーリングリストも500人を超え、特に子育てのことでは、皆が助け合う感じになり、現代版「結(ゆい)」が育ってきた。

注:メーリングリストは、主に、豊田市近郊に住む子育て中のママが、子育てに役立つ情報を伝え合うツールとして9年ほど前にできたもので、登録する人たちでつくり上げられている。green mamanが管理するものではない。

## 連携している団体・専門家・自治体など

- ・スーパーやまのぶ(おかずや商品の販売など)
- ・守綱寺、タキソウ家具(朝市の場所の提供など)
- ・おいでん・さんそんセンター、千年委員会(他団体との交流)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

定期的な朝市の他に、地元の大豆を使った味噌づくりや、徳山ダムの写真家・大西さん、名古屋大学准教授の高野先生を招いた環境講演会など、さまざまなイベントも行ってきた。

### 現在直面している課題

朝市を企画運営する際に、どうしても費用が掛かる。以前は、自分で費用を持ち出していたが、最近は農業生産者から出店料をもらい、最低限の経費を賅っている。

### 今後やってみたいこと

現在、自分たちでも田んぼを借りて米を作ることになった。自分で作るにより、米を作ることがいかに大変か、生産者の苦勞がわかり、価値観も変わってきた。また、米作りを通じ、いろいろな人との交流もでき、充実している。今、green mamanのメンバーで、マンの理解者でもある人に指導していただきながら米を作っている。今後は、私たちと同じように、指導してくれる方と市街の米作りに興味がある家族でグループをつくり、田植えや稲刈りだけのイベントではない“田んぼでお米を育てるグループ”がいくつかできていくといいなと考えている。

### そのためにはどんな情報・人脈が必要か

里山の人で、米作りの指導をしていただける人(参加される家族をイベントの参加者でなく、お米と一緒に作る仲間として作業していただける人)。

### チームオリジナルの質問

<質問内容>山間地域の振興で重要なことは何か。

<答え>私たちの朝市での活動のように、やはり林業においても「出口」、すなわち木を消費する仕組みが大切ではないか。木(材木)の需要があり、業(なりわい)として継続的に成り立つ仕組みが必要である。

また、地域間の連携ももっとすべきである。例えば、豊田市の旭地区はかなり先進的にさまざまなことに取り組んでいるので、設楽町など人づくりや空き家対策の面で一緒に何か進めればよいと思う。

### その他、伝えたいこと

green mamanでの出会いをはじめ、現在ではさまざまな団体と交流し、多くの人と出会ってきた。「おひさまクラブ」という未就園児を対象としたグループやプレーパーク(冒険遊び場)の人と関わり、子育てに大変役に立っている。ここでは、子育てをみんなで助け合い、例えば、不要になった子ども服を提供したり、子どもの面倒を一時的に他のお母さんに見てもらったりなど、「子どもは地域で育てる」という感覚ができてくる。ここでは、子育ては大変だから2人目を産むのはやめようと思うお母さんはあまりいないのではないかと思っている。すごく居心地が良い場所である。まさに「子育ての好循環」が生まれており、当初始めた「地域で循環」から循環の輪が大きく発展しつつある。

### 写真



green mamanのメンバー



朝市の様子  
(守綱寺にて)

# 農業生産法人 みどりの里

調査団体名	農業生産法人 みどりの里	団体代表者名	山中 勲
設立年	2008年	対応してくれた人の名前	野中慎吾
団体URL	<a href="http://okome.boo-log.com/">http://okome.boo-log.com/</a>		
活動拠点	愛知県豊田市	調査員	後藤伸也、蜂須賀 功
取材日	2013年11月15日	レポート作成者	蜂須賀 功

## 活動内容

スーパーやまのぶの山中勲氏が社長から会長に就任する際に、安全安心な食品を自前で提供したいという思いから、山中氏が退職金を投じて農業生産法人を立ち上げた。代表は山中氏で、社員は野中夫婦のほか2人おり、合計4人いる。

農薬、肥料を使わずに主に米、イチゴ等を栽培し、スーパーやまのぶ梅坪店の「ごんべいの里」(添加物・化学肥料・農薬などをできるだけ少なく、または使用しない商品)で主に販売している。

一般のほとんどの農家では収穫量の増加、農作業の効率化、市場への規格適合のため、農薬や肥料を使っているが、みどりの里では無農薬、無肥料を通じ、作物の本来持っている生命力、おいしさを引き出し、人間の体に良い農業を行っている。そのため、草取りや土壌管理などに苦勞するが、毎年試行錯誤を重ね、自然栽培の確立に取り組んでいる。

## キャッチフレーズ

安全安心を食卓に

## 会のモットー(何を大切にしているか)

無農薬、無肥料を基本に、自然の力をそのまま引き出す農業の確立。

現在の農業は収穫量を増やしたり、害虫が付かないよう、肥料や農薬を使っているが、食物側からすれば、その行為は「人が余計なことをしている」と言えるのではないか。食物は本来、自然のルール(摂理)で育つものである。

無農薬、無肥料の農業は大変ではあるが、少量でも品質が高く、安全、安心な食物を提供している。

## 設立から現在に至るまでに変化したこと

当初はスーパーで米等を販売していたが、最近では個人の店に対しても宅配したり、無農薬・無肥料の食物が体に良いことから、患者の免疫力を高める総合医療の分野にも進出しつつある。

## 連携している団体・専門家・自治体など

- ・スーパーやまのぶ
- ・木村秋則氏(環境にやさしい循環型農業を目指す自然栽培を行い、無肥料・無農薬の米・野菜作りに挑戦)

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山村再生を目的として事業を行っているわけではないが、産業として継続的に行っていくこと(プロとして提供していくこと)が大切と考えている。それが結果的に中山間地の再生につながると思う。

## 現在直面している課題

無農薬、無肥料の農業は、どうしても人件費が高くなり、採算をとるのが難しい。人を雇っても、年中仕事があるわけではなく、臨時的に人手が必要なおきのみ、雇える仕組みがあるとよい。

- ・やはり、草刈りが大変である。
- ・天候に柔軟に対応するのが難しい。

## 今後やってみたいこと

一時的に人手が欲しい場合に、柔軟に人を雇えるようにしたい。試みとして、軽度の障がい者施設と協力して、草刈りなどをお願いしている。

また、農業を始めたきっかけがオイスカでの国際協力の経験であるため、いつかは農業の国際貢献ができればいいなと思う。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

臨時的に障がい者を雇う場合、仕事の情報と人材の情報がマッチングするような仕組みが欲しい。また、障がい者を雇う際に補助金など行政からの支援がもっとあることが望ましい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 中山間地でみどりの里のような自然栽培を中心とした農業を行うことができますか？

<答え> 物ごとには、「天・地・人」が揃っていないとなかなか進まないと思う。天はタイミングであり、地は土地である。したがって、自分のやっている自然栽培は、豊田市のような平野部でできることであり、これをそのまま山間地で行うことは無理だし、できないと思う。それよりも、山間地にあった農業があるのではないかと思う。例えば、養蜂、養鶏、家畜などが適していると思う。

## その他、伝えたいこと

○自然栽培（無農薬、無肥料）で体に良いものを作り、食べてもらいたい。

・肥料（窒素）を入れる代わりに、根を大きくしたり、温度管理をして、自然の力すなわち食物が本来持っている力で育てる。

（腐敗のメカニズム）

肥料の投与 → 硝酸性窒素の発生 → モノの分解（腐敗）が促進

・人間は窒素を過剰にとると、アンモニア性窒素として排出できるが、植物はそれができないために、体内に取り入れ、それを落とすたくて病気になってしまう。

・植物は本来光合成で空気からほとんどの養分をとっている。二酸化炭素と水で炭水化物を作っているが、窒素が入ることによりタンパク質ができ、炭水化物が分散され、炭水化物（糖、でんぷん）の薄いものができることになる。自然栽培を行うと、炭水化物がギュッとつまったおいしいものができる。

・品質が高く、腐りにくく、今までにないもの（全く別のもの）ができる。

・とてもおいしく、病害虫もつかず、品質も安定する。無農薬というだけで作りやすい。

## 写真



イチゴの栽培。おいそー！



作業風景



野中さんと木村さん。笑顔が最高

# NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋

調査団体名 : NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋  
 設立年 : 2005(平成17)年8月30日  
 団体URL : <http://matagiya.jp/>  
 活動拠点 : 愛知県岡崎市夏山町字外田  
 取材日 : 2013年11月19日

団体代表者名 : 日浅 一  
 対応してくれた人の名前 : 日浅 一  
 調査員 : 井上祥一郎、西原 均  
 レポート作成者 : 井上祥一郎

## 活動内容

看板は有害鳥獣駆除だが、額田の山の幸のありがたさを地域と子ども世代に伝えることが本筋。身の丈に合った解体所を、助成金に頼ることなく自力で設置している。鳥獣という資源保続(子獣は逃げる)を目的とした捕獲檻を開発し、2件の特許を取得している。この特許は誰でも自由に使えるようにしている。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

命の大切さを「無益の殺生をしない」ことで伝えたい。野生資源を調整することが、地域のタンパク資源を有効に利用することにつながる。捕獲獣を殺すときも苦しまないように気をつけている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

世の中が有害鳥獣被害の防止から、野生鳥獣の肉を食材にする「ジビエ」をもてはやす風潮に変化したことから「ジビエ」指向で活動に加わりたい人が増えた。

## 連携している団体・専門家・自治体など

残念ながら上部団体の猟友会にも活動が理解されない。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自然資源は常に大きな変動があり、その調整が地域資源の保続のため重要という観点であるので、1種の森林資源の活用という見方ができる。現場にはイノシシとシカがいるが、繁殖力の強いイノシシが中心になっている。シカの繁殖力では資源減少はすぐにくる。イノシシでは200kgを越す個体が、電柵破り等の教育をするので、大きな個体から捕るようにしている。200kgを越すイノシシはほとんど見なくなった。

## 現在直面している課題

後継者:活動に参加する若者は増えているが、「ジビエ」の流行に乗りたいという志望動機では任せられない。旨い「旬」は短期間という宿命がある。ダニアレルギーのある人は向かない。

## 今後やってみたいこと

現在の活動の継続(そんなに変わってはいけなさと考えている)。地域の資源を地域の人が必要にすることが重要という発信をしていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

行政やマスコミがよく勉強すること。捕獲獣の報奨金を上げて問題解決にはならないし、ジビエ賛歌も表面的。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 捕獲獣の殺し方は？

<答え> 短時間に放血し、味に影響を与えない。

## その他、伝えたいこと

イノシシ料理を観光資源とする温泉宿が愛知県にも多いが、ほとんどが猟師との直取引で買い手市場になっている。価格が安く、猟師を生業にすることを難しくしている。駆除で殺したイノシシ等は処分法が決められているので、温泉旅館に持ち込まれるものは、違法のイノシシ肉の扱いになる。猟師もここに持ち込んで、ここから正規のルートで流通させることを買い手側も考えること。行政の指導が必要。

野生獣の肉の臭みという問題は間違った情報。例えば、昔、渓流水に漬けることは、冷蔵施設や冷凍施設のない時代のことで、肉の腐敗防止法だった。それを「臭み」を抜く方法として今も語られることがある。子どもたちはここで肉を食べることがあるが、臭いという言葉は聞かれない。本物に出会って間違った情報が訂正されていくことは、成果の一つである。

## 写真



愛犬を手に日浅 一氏  
(三州マタギ屋施設内で)



捕獲檻(シマウリは自分で逃げられるように配慮)



解体処理施設&大型冷蔵庫をバックに日浅氏と井上



# 岡崎森林組合

調査団体名 : 岡崎森林組合 団体代表者名 : 代表理事組合長 眞木宏哉  
 設立年 : 2008(平成20)年(岡崎市森林組合と額田町森林組合が合併)。前身をたどれば1921(大正10)年設立の額田郡宮崎「河原土工森林組合」に行き当たる。  
 団体URL : <http://okamori.org/> 対応してくれた人の名前 : 代表理事組合長 眞木宏哉  
 活動拠点 : 愛知県旧額田町森林組合施設 調査員 : 井上祥一郎、後藤伸也  
 取材日 : 2014年2月19日 レポート作成者 : 井上祥一郎

## 活動内容

人口、約38万人の岡崎市は古い城下町だが、23,300haに上る森林を擁する「森林都市」でもある。当組合は市内にあって、その森林のあり方に責任を負う希少かつ最大の専門技能集団である。制度的には森林組合法に基づく森林所有者の共同組織であり、地域の森林管理の主体として、施業集約化等により森林・林業の再生に積極的役割を果たすことが期待されている。

主な活動内容は、①地域最大の資源でもある森林の「保全整備」と「林産・素材等販売」、②地域の木材の利用が国土資源の保全につながり、流域の人びとの生命にも関わるという事実を踏まえた「木質社会の見える化」という息の長い地域運動である。具体的には、主伐・除間伐・下刈り、枝打ち・作業道作設・集材・造材・搬出・輸送・素材販売・毎木調査・選木・本数調整伐・林地境界(施業界)の画定・団地化説明会・造林事業提案書・・・多岐にわたる。

## キャッチフレーズ

岡崎森林組合は、提案力・技術力・経営力で、ふるさとの森のチカラを活かします。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

「のびやか」に活動すること。本組合の職員は以前と違って地元出身者は少なく、ほとんどがターンの人たちで占められている。若者も多い。彼らを引き寄せるのは「森の魅力とそれを発揮させる森づくりの意義」だ。自分たちが経験したような体験がない中で、お互いをのびやかに理解し合い、大切な岡崎の森を守っていくという使命感のもと、提案力・技術力・経営力の向上、共有に努めている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

この地域では、早くも明治43(1910)年に明治136(2003)年を目途にした長期にわたる森林計画(宮崎村有林事業計画書)を策定し、森林を村おこしのソフト・ハード両面にわたるエネルギー源として位置づけてきた。第2次世界大戦後の復興期やその後の拡大造林時期には既にかんりの蓄積を持っており、森林の地域資源としての貢献は特筆に値する。組合員は、先人の苦勞に感謝し、先見性に学び、さらなる森づくりに汗を流した。

山間地にあっても豊かな地域生活を支えてくれた森林だが、昭和39(1964)年の木材関税がゼロになった頃から材価低迷、森の資産価値の低落という環境下で荒廃の危機に瀕している。

現在では、組合員の所有森林に対する関心も希薄になり、経営・施業の意欲が著しく低下している。

## 連携している団体・専門家・自治体など

林業振興機構、森林林業技術センター、他の森林組合、三州マタギ屋など。  
 岡崎市とはもちろん緊密な連携がある。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

①組合員のための組織、②絆、③森林整備・林産(材の販売)、④原価管理・安全管理、⑤山間地域を含め森林都市(市域の60%)、⑥情報共有、これらの点を意識して活動をしている。専門的になるが、高性能林業機械の活用、施業の団地化・集約化、路網整備等による素材生産性の向上に合わせ、採材・造林技術、販売営業力を高めることが、山村再生や担い手づくりに欠かせない活動である。

## 現在直面している課題

「組合の灯を消してはならない」が大前提であり、昨今の林業を取り巻く経済情勢の下では、経営の持続が課題である。そのためには、赤字決算を背負った組合の経営構造を変える必要があり、事業の選択と集中が欠かせない。歴史はあるものの、不採算であった木工部門を民間企業に有償貸与し、工場設備をデザイン力・企画力・営業力に活かしてもらえることを期待している。同様に製材部門も縮小した。

## 今後やってみたいこと

月並みな言い方になるが、まず森林施業の集約化・団地化である。3,000人に上る組合員の所有規模は概して小面積であり、個人単位の施業では森林再生は到底おぼつかない。そのためにも林地境界の明確化が急務であり、行政と連携して少しでも成果を上げていきたい。また、この地域では電力供給力が未熟な時代には、組合立の水力発電所が多く設置された時期があり、製材所や家庭に電力を供給していた歴史がある。水力も森の恵みであるが、木質エネルギーも同様である。現在、豊田・新城・設楽・津具・東栄など7つの森林組合があるが、これらが協働すれば、木質エネルギーの安定的供給組織としても機能すると思う。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

林業界の低迷は、木の成長に要する時間軸の長さという宿命とそれに付随する安定的供給体制の不足に一因があるので、広域的な体制整備と情報収集、そのための人材確保とが不可欠になる。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>外国人による林地買取はないか。

<答え>山の売買はあるが、目が行き届いているので、現時点ではそのような事態は承知していない。列島改造が叫ばれた時代の遺産として、別荘地やゴルフ場がある。額田にも2カ所のゴルフ場がある。当初は流域への環境影響が懸念されたが、地域の雇用と活性化の上で一定の評価を得ている。岡崎市と豊田市の境に、県企業庁がトヨタテストコースを造成中だが、岡崎側は緩衝緑地、設備等は豊田市側で税収に大きな差があると取沙汰されている。

## その他、伝えたいこと

イノシシなどの害獣被害が中間山間地に見られるが、市域にはシシ垣が延長50~60kmも残されている。石積みの壁の山側はオーバーハングするように積まれているなど、先人の工夫の跡が残っており、この復元を目的として「万足平を考える会」が発足した。地域の歴史の見直しになろう。

先に触れた明治136年計画について述べたい。山のポテンシャルを地域改革に活かそうとしたのが、初代宮崎村村長・山本源吉。明治中期、源吉は先進の八名郡山吉田村に学び、山焼き廃止、部落区有林の改良、造林奨励を進めた。山焼きが造林に切り替わり、500町歩の村有林が設けられ、明治43(1910)年「愛知県額田郡宮崎村有林事業計画書」が策定され、その30年後の昭和12(1937)年、植林が完了した。同計画書は総論、地況、林況、沿革、村治、地方経済、造林、保護、収支概定、結論の10章からなる。「収支概定」の章では明治136(2003)年度までの「理想収入」を掲げ、総額192万4191円89銭(現時点ではおよそ210億円)を見込んでいる。そして、皆で造林した山林を至宝として村民協力の下に経営していけば、卓越した財源を得、自治の発揚を図ることができると、森林経営の意義を説いている。「宮崎村」を受け継いだ現在の岡崎市域の山林の状況はどうか。市域の6割に及ぶ森林資源は、先人の望んだ地域の至宝に値する存在であろうか。健康な森と活力のある林業は、郷土岡崎が先進都市としての持続可能性を高め、強靱な立ち位置を確保する必須条件である。先人の志と実践に学びつつ、再生と活性化を探っている。

写真



眞木組合長



岡崎森林組合



愛知県産間伐材使用の看板



岡崎森林組合 製材所

# おおだの森保護事業者会

調査団体名	: おおだの森保護事業者会	団体代表者名	: 浅井董亮
設立年	: 2000(平成12)年	対応してくれた人の名前	: 浅井董亮
団体URL	:		
活動拠点	: 愛知県岡崎市榎山町	調査員	: 井上祥一郎、西原 均
取材日	: 2013年12月16日	レポート作成者	: 井上祥一郎

## 活動内容

旧額田町の故郷の森ともいえる「おおだの森」が、燃料革命後の薪炭林の利用低下で手入れが不十分な雑木林に変わってしまった。第二東名高速道路のインターチェンジの設置が決まり、榎山町が玄関口にあたるので、シンボルとしておおだの森の整備が取り上げられ、行政トップの要請で活動が開始された。現在は、有志がサクラとカエデを植栽する活動を月2回の頻度で行うようになっている。その他、イベントとして4月の第2週に花見の会、新年に初日の出を見る会を開いたり、研修会として他事例を見学に行ったりしている。会員数は53人、現地作業は15名から20名程度。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

おおだの森にサクラとモミジを植え、将来、サクラの名勝となる夢。  
無理を言わない、遅刻・早退も自由。それらの理由も聞かない。気持ちよく皆で力を合せて作業することを心掛けている。  
植栽樹種は、現地に以前からあるもの以外は植えないことに決めている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

立ち上げ時から2006(平成18)年までは行政主導であったが、岡崎市に合併してからおおだの森保護事業者会が主体となり、それを行政がサポートするようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

岡崎市役所がほとんどであり、その他では福井県の「菜の花好夢店」と若狭での交流が続いている。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

先に書いた年2回のイベントのほか、岡崎市にある小学校の授業の一環としておおだの森体験や、岡崎の人間環境大学のゼミ、JAや地域社会教育委員会の歩け歩け大会などにおおだの森を活用してもらっている。また、岡崎市の環境まちづくり会議も年3回、おおだの森を活用している。

## 現在直面している課題

設立当初から見ると、植樹本数も増え2,600本となった。これらの手入れは除伐と下刈りであるが、散策路の草刈りやイベントもあり、人手不足の傾向がある上に、会員が高齢化や病気等で減少しており、新規会員を募集中であるがなかなか集まらない。

## 今後やってみたいこと

おおだの森では地元住民の理解で植樹させてもらっているが、今少し植樹できれば大変良くなる箇所が一部の反対者がいてできないため、これを何とか解決したい。同じ理由で周回道路が途中で止まっており、これも解決すれば素晴らしい山となると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

上記問題は簡単なことでなく、人脈や情報があれば解決できるかはわからない。

### チームオリジナルの質問

<質問内容>後継者はいるか。活動だけがをするようなことはないか。

<答え>会長の後継者なら候補者はいる。一昨年草刈り機による事故があったが、運良く大ごとにはならなかった。今後も安全第一で作業をするよう指導している。

### 写真



おおだの森をバックに浅井会長

## 取材者名

安藤里恵（おいでん・さんそんセンター）

井上祥一郎（伊勢・三河湾流域ネットワーク）

太田 司（やまおか木の駅）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

蔵治光一郎（東京大学 大学院農学生命科学研究科附属演習林 生態水文学研究所）

後藤伸也（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

近藤 朗（愛知・川の会）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

鈴木啓佑（二井寺農園）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

田中五月（一般社団法人 ClearWaterProject ）

長澤壮平（豊田市矢作川研究所）

西原 均（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

丹羽健司（地域再生機構）

蜂須賀 功（岡崎市環境部 環境保全課）

浜口美穂（ライター）

眞木宏哉（岡崎森林組合）

松井賢子（伊勢・三河湾流域ネットワーク）

（五十音順）



山村再生担い手づくり事例集Ⅱ

矢作川流域圏懇談会

2015年3月

## 矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

## 山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案しました。2014(平成26)年度に第1集が刊行され、本冊子は第2集となります。今年度は試行的に、川と海の活動団体も取材対象としました。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。





# 目 次

## 長野県

### 根羽村

- 1 木の駅ねばりん実行委員会 . . . . . 1
- 2 きくの会 . . . . . 4

## 岐阜県

### 恵那市

- 3 山のハム工房 ゴーバル . . . . . 6
- 4 三宅林業 . . . . . 9

## 愛知県

### 設楽町

- 5 たけうち牧場 . . . . . 11

### 豊田市

- 6 アンティマキ . . . . . 14
- 7 てくてく農園 . . . . . 16
- 8 あさひ若者会 . . . . . 18
- 9 足助里山ユースホステル . . . . . 20
- 10 新盛里山耕流塾 . . . . . 23
- 11 近藤しいたけ園 . . . . . 26
- 12 こいけやクリエイト . . . . . 28
- 13 アグロ・プエルタ . . . . . 30
- 14 とよたプレーパークの会 . . . . . 32
- 15 NPO法人矢作川森林塾\* . . . . . 35
- 16 矢作川水族館\* . . . . . 37

### 岡崎市

- 17 じさんじよの会 . . . . . 39
- 18 額田林業クラブ . . . . . 41
- 19 宮ザキ園 . . . . . 45

### 西尾市

- 20 東幡豆漁業協同組合\* . . . . . 48
- 21 佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ\* . . . . . 51

## 木の駅ねばりん実行委員会

調査団体名	木の駅ねばりん実行委員会	団体代表者名	石原明治委員長
設立年	2013年8月	対応してくれた人の名前	南木一美副委員長・事務局
団体URL			
活動拠点	長野県下伊那郡根羽村	調査員	沖 章枝、松井賢子、浅田益章
取材日	2014年12月13日	レポート作成者	浅田益章

## 活動内容

根羽村は豊田市役所から65kmと山深い所にある。根羽村のある国道153号線は風光明媚な自然がいっぱい。杉だらけの美しい村である。木の駅ねばりんはこの村で活動している。地元の豊富な杉の間伐材を、地元で建設中の高齢者福祉施設の暖房など、薪ボイラーによる燃料として使うことで、村内の地産地消の循環経済が成り立たないかとプロジェクト組織で推進している。2015年3月に予定されている高齢者福祉施設ねばねの里「なごみ」の開館が待たれる。村内流通の地域通貨、森券によって地域を活性化させる。広がる夢は大きい。

## キャッチフレーズ

村のおじいとおばあさんの心と体を暖める

## 会のモットー(何を大切にしているか)

山に向き合う為の仲間づくり

## 設立から現在に至るまで変化したこと

- ①毎月委員会を開催している。  
変化点を見つけて早い手が打っている。
- ②第一期終了後、実行委員会と別組織で“薪の駅”をたちあげた。  
非営利の木の駅プロジェクトと営利の薪事業と混乱が起きやすいが分けるのは難しい。  
森林組合との信頼関係、相互理解を大事にしている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

- ①根羽村森林組合長 ②根羽村役場
- ③根羽村内には多くの小規模の活動団体がある。村の元気のもと
- ④村外の団体「全国スギダラケ倶楽部」やドイツ・レッテンバッハ村と根羽村の交流、連携

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ①次世代がメシを食えるように。自分の持っている山を次世代につなぐ意識と山作業
- ②不在森林については森林組合がやっている。
- ③木の駅はハードルを低くして始めた。出荷者が安全安心に出荷できるように安全第1のスキルアップのしくみづくり
- ④気持ちよく自己責任が基本。仲間で助けあう  
平均年齢60代後半。最近50代が盛り上がっている。20代の登録者もいる。

## 現在直面している課題

- ①山に向き合う仲間づくり
- ②出荷量の確保
- ③木の駅実行委員会と薪の駅との棲み分け

## 今後やってみたいこと

現状自伐は少なく、大半は施業跡地の林地残材の収集。木の駅メンバーで山の間伐、搬出をやりたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

下記の団体と連携し進めている。

- ①木の駅プロジェクトとの連携、情報交換 <http://kinoeki.org/>
- ②矢作川流域圏懇談会との連携、情報交換 <http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/kaigi/yahagigawa/ryuiki-kondan/>
- ③日本全国スギダラケ倶楽部との連携、情報交換 <http://www.sugidara.jp/>
- ④木の駅アドバイザー 丹羽健司さんなど。

## チームオリジナルの質問

### <質問内容>

国交省や行政からの支援、指導を受けていますか？

### <答え>

国交省の支援はを受けていません。村役場との協同であることが大きい。

## その他、伝えたいこと

単に木材を売るだけではなく、より身近で気軽な木のある暮らしの提案と、根羽村の地域の魅力が体験できる交流とファンづくりを進めたい。

## 取材者の感想

取材した浅田が感じたことを最後に書きます。

訪問取材は2014年12月13日と2015年2月7日に行われた「根羽村 ここは世界の真ん中発表会」です。

知らないこと、驚くことばかりの村でした。「根羽村は日本で一番幸せな村を目指しています。」は本当ではないかと思いました。春夏秋冬。何度でも訪ねたい村です。矢作川の上流にあることが愛知県人としても嬉しいです。

- ①村内の林業の専門者は2軒ある。昔は10軒あったからずいぶん減りました。
- ②剰余材なので木の駅では売っていない。木材が欲しい人は森林組合で買えます。協力して行っている。
- ③新聞記事によると、木の駅プロジェクトの年間搬出量は2013年度目標で約300立方メートル。集荷者登録は32世帯。手間賃として支払われた地域通貨「ねばね森券」は44万円。村内の22のお店で利用された。
- ④高齢者福祉施設への薪の供給の次に考えていること。  
薪ボイラがもっと増えてゆく予感がしました。家でも事業所でも木の駅があれば便利になるでしょう。薪ボイラーは広葉樹しかダメであるが、オーストリア製(シュミット社)の薪ボイラーはスギ、ヒノキもOK。ヨーロッパには先進的なボイラーがある。豊田市すげの里には、シュミット製の薪ボイラー、薪ストーブがあるとのことです。 <http://www.ato-nagoya.com/experience/index.html>



① 木の駅実行委員会の南木さんに取材。キャロットにて



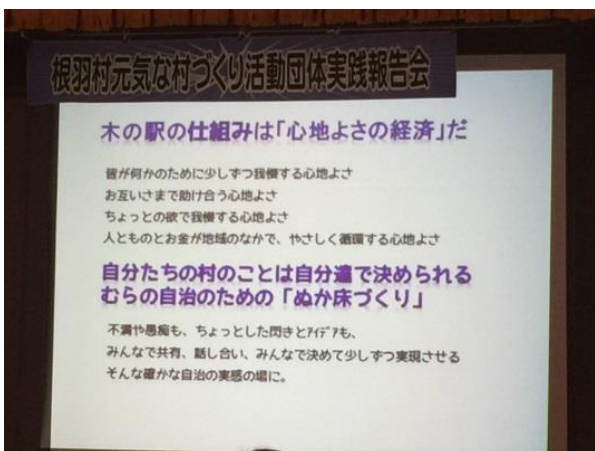
② 木の駅。153号線キャロットの隣にて



③ 建設中のねばねの里なごみ。ここで間伐材が薪ボイラーの燃料として利用される



④ 木の駅プロジェクトのしくみ  
根羽村活動団体実践報告会にて



⑤ 木の駅プロジェクトの目的  
「心地よさの経済を自治で」



⑥ 日本で一番幸せな村を目指して。  
ドイツのレッテンバッハ村とも交流

# きくの会

調査団体名 : きくの会  
 設立年 : 2007(平成19)年9月  
 団体URL :  
 活動拠点 : 根羽村老人福祉センター「しゃくなげ」  
 取材日 : 2014年12月20日

団体代表者名 : 田中きく江  
 対応してくれた人の名前 : 田中きく江 はじめ会員8名  
 調査員 : 松井賢子、浅田益章、沖 章枝  
 レポート作成者 : 松井賢子

## 活動内容 :

根羽村のような小さな村でもお葬式が村外で行われるようになって、村内の高齢者から遠くて出席できないと耳にするようになった。平成19年9月「きくの会」を設立。  
 食事作りのお手伝い・・・会席・精進おとしの料理をつくっている。  
 お葬式を「しゃくなげ」で執り行った後の「会食」を提供。会員8名、協力員70名で現在に至っている。  
 48回会食を作った。前日、手分けをして「地元のをそろえる」「地元のお店で買い物」等で必要なものをそろえる。  
 依頼人数によって、8名の会員以外に10人に1人の割でお手伝いを頼む。

## キャッチフレーズ :

食材は、「地元のものを使い」「そろわないものは地元の店で購入し」「地元の活性化！」

## 会のモットー(何を大切にしているか) :

昔の「結」が高齢化で出来なくなり、「有志」が集まって、昔から伝わっている「お葬式」・「精進おとし」の食事を、地元の食材、地元のお店で購入したものを使って作る。

## 設立から現在に至るまで変化したこと:

有志が集合して、職員の松井さんにアドバイスを頂き、8名で「楽学会」を発足。まず何から取り組むかの話し合いで、女性議員誕生を旨とし、神奈川に勉強に行き、平成19年4月石原明子さんが13名中4番で初当選し、まず(第一)の目標達成。次に「いかまい会」を発足し、何をしていくか検討した結果、現在の「きくの会」が出来た。  
 現在は「根羽村の子どもを守りましょう」の看板をつくり、小中学校や事業所に配布して、運動展開中。

## 連携している団体・専門家・自治体など:

根羽村役場、会席場として借りる「しゃくなげ」の職員

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など):

昔から根羽村に伝わっている「お葬式の食事」の食材を、会員と70余名の協力員を中心に提供して頂いている。地元の商店も注文した物をそろえて下さっている。地元にお金が入る様に協力している。

## 現在直面している課題 :

村内の自宅に住んでいない人が多くなりつつある。葬儀屋さん「しゃくなげ」で執り行ってもお料理は外から運んでもらい、最近は「折り詰め」でなく「きくの会」の様に「皿もり」「汁物」で出る様になって、注文取りが難しくなってきた。

## 今後やってみたいこと:

「お通夜」の食事作りをしていきたい。地元のスーパーで「おさしみ」を購入して、地元に貢献して下さる家もある。「お通夜」「葬儀後の会食」「精進おとし」と一貫して行っていくことを目指している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か：

区長さん、役場の方たちに声かけをして利用していただけるようお願いしている。  
村内の人たちにもっと地元にお金を落としてもらい、村の活性化に協力して下さるよう理解してもらえることが課題である。

チームオリジナルの質問：

<質問内容>「根羽村の子どもを守りましょう」の看板をどのように生かしているか？

<答え>小・中学校の校門前に毎朝7時から40分立って、全校生徒とあいさつをしている。「あいさつ運動」として。

チームオリジナルの質問：

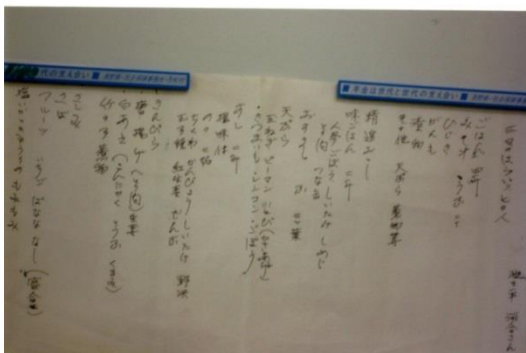
<質問内容>これからの「きくの会」の新しい目標

<答え>4月の選挙に向けて「第二の女性議員の当選」

その他、伝えたいこと：

- ・「ジャンボからすみ」作りに挑戦……一応できた。
- ・根羽村再発見……史跡めぐりを3回行った。「ネバーランド」だけでなく、外から多数の人達が来て、楽しんでもらうため、考えている。

## 写真



## 山のハム工房 ゴーバル

調査団体名	山のハム工房 ゴーバル	団体代表者名	石原 潔
設立年	1980(昭和55)年	対応してくれた人の名前	石原 潔
団体URL	<a href="http://gobar.jp/">http://gobar.jp/</a>	調査員	山本薫久、國村恵子、田中五月
活動拠点	岐阜県恵那市串原3777-3-1	レポート作成者	山本薫久
取材日	2014年11月25日		

## 活動内容

山のハム工房 ゴーバルは、旧串原村、標高600mを越す静かな山のなかにある。豚を育て、加工し、ハムやソーセージをお客様の食卓に直接届けている。冷蔵や冷凍の宅配便のない1980年から小さな工房ではじめた化学調味料や添加物を一切入れない手づくりのハム。岩塩のピクル液で20日間熟成させ、炭火でゆっくり乾燥させ、桜の薪でいぶす。そんな昔ながらの作り方はすこし大きくなった今の工房でもかわらない。

はじめは岐阜県農業共済組合連合会で獣医をしていた石原潔氏、愛農高校教員をしていた武義和氏、基督教独立学園の畜産職員をしていた榎本進氏の3人が、石原氏の妻眞木子さんのご実家(串原村)で共同農場をつくったことである。ネパールやインドの言葉で牛糞を意味する「ゴーバル」を使い「アジア生活農場ゴーバル」とした。「御言葉に生きる」「農業を通してアジアの人々をつなげる」「田舎にいて都会の人々をつなげる」を目指しさまざまな取り組みをしてきた。

そして地域の地域とのかかわりを重んじ、村の共同作業、保育園や学校の行事、消防団活動などを積極的に担ってきた。地元の養豚農家3軒とのかかわりのなか1986年に「串原食肉加工組合ゴーバル」、2005年ころより「山のハム工房ゴーバル」という通称を使いだした。今では石原氏のご子息石原弦さんが養豚をはじめられ、ゴーバルのハム・ソーセージにもなっている。肥育期の飼料は植物性にこだわり、遺伝子組み換えでないトウモロコシと大豆粕、大麦などを使う。母豚の環境にも配慮して飼育しているそうである。

山間地域の貴重な「雇用」の場になっている。そして若い人の就農、I ターンへの機会にもなっている。現在21人の方が働いてみえる。近所の方々もパートできてみえる。若い人は山形県の独立学園高校、三重県の愛農高校、島根県の愛真高校の卒業生が多いそうである。この地に移住する方が少なくない。現在フルタイムで働く方の中心は30代、40代が多い。田舎でやりたいことをやりながら働くあり方をすすめている。

## キャッチフレーズ

「ゆっくり流れる時間の中で」

- ・3週間お肉をねかせる事から始まって、ゆっくりと時間をかけている。だから、おいしい食べものがうまれてくる。
- ・水や空気、自然に助けられてゴーバルの味がつくられる。
- ・いっしょにみんなでごはんを食べる。自分で考えて仕事をする。そんなゆとりこそが大切。むだ話もしながら仕事はやったほうがいい。「仕事は上機嫌でやれ！」三宅弥生さん(かつてパートで来てくれていたが、今は定年退職)が残してくれた言葉を大切にしている。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

「生きることはわかちあうこと。LIVING IS SHARING」

ネパールの青年から学んだこと。時空をみんなでわかちあうからこそ、楽しんでくらせるのだと思う。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

ゴーバルの「精神」やあり方は変わっていないし、そこは変わらないと思う。しかし、養豚を直営してハム・ソーセージをつくるようになり、ますます「地に足がついてきた」と思う。

連携している団体・専門家・自治体など

愛農生産組合(農家の方々)、全国愛農会、愛農流通センター

### 山村再生やその担い手づくりに関る具体的な活動

- ・グローバルでみんなと働き暮らすこと自体で山村再生に貢献している。
- ・地域の自然と人々との関係を最大限活かした食と仕事をつくりだしている。
- ・若い方の農的暮らしの研修の場になっている
- ・地域の雇用の場になっている
- ・就農や農山村へのIターンの機会の場になっている
- ・福島子ども元気プロジェクトやフェアトレード・被災地関連商品など、山村のグローバルだからできる社会貢献をしている。とくに福島子ども元気プロジェクトは、被災地の子供達の保養キャンプであるが、地域の方々のたくさんの応援もあり成立する。

### 現在直面している課題

- ・物理的なこととしては、今の工場も建設して30年近くになるので設備更新をどうしようか考えている。生産量は求められているものギリギリになっている。ただ増やしていくのがいいのかというそもそもの課題はある。適正規模はどのくらいなのか考えながらやっている。
- ・組織的には「組合」。今後永續させるには「法人格」が必要なのか。みんなで考えていく。
- ・創設メンバーから次の世代へのバトンタッチも現実の問題となっている。
- ・養豚についてはTPPの問題もあり、伝染病予防対策もあり、気候だけでなく、社会経済的変動も予想され、これからの問題を抱えている。

### 今後やってみたいこと

- ・「ゆっくり流れる時間のなかで」「生きることはわかちあうこと。LIVING IS SHARING」  
いままでのようにやっていけたら。現在のスタッフやこれから来る人も含めて、内側から出てくる生き方を伸ばせるように展開したい。

### チームオリジナルの質問

- <質問内容>ご子息が養豚をされているが...
- <答え>息子も独立学園で学び、ネグロス島で養豚を体験してきた。養豚は10年やっている。ここ数年考えてやっているのは「動物の福祉」。食べてしまうのだが、しかし豚が豚らしく、本来の習性にあった飼育をして、元気に健康に育ててもらいたい。そのために古い豚舎を改修している。運動スペースもつくっている。子豚がおもいきり走れるスペースとか...。飼料は遺伝子組み換えでない大豆・とうもろこしなど十分気をつけている。豚に対するストレスがないよう、環境的に配慮している。母豚も適正な頭数にしている。現在母豚が100頭。

### チームオリジナルの質問

- <質問内容>母豚100頭でグローバルのハム・ソーセージに十分ですか？
- <答え>母豚1頭で1回に10頭の子豚を産みます。年に2回出産するとして、年間2000頭になります。グローバルだけでは使いきれないです。息子の出荷している肉豚の半分強程度をグローバルが使っている状態です。また、豚を1頭まるごと使うことを考え工夫している。豚全体をつかうことが大切なのだと考えています。今年は雨が多かったので豚の飼育はきびしい。

### 取材者のコメント

養豚も自然の条件、環境で生育が大きく左右される。やっぱり農業なのですね。自然農ではそだてた作物すべてをいただくことが重視されていますが、養豚でも同じ考えなのがおもしろいというか納得しました。



## 写真

1980年から小さな工房ではじめた、化学調味料や添加物を一切入れない手づくりのハム。岩塩のピクル液で20日間熟成させ、炭火でゆっくり乾燥させ桜の薪でいぶす。そんな昔ながらの作り方はすこし大きくなった今の工房でもかわらない。(活動内容本文より)



# 三宅林業

調査団体名 : 三宅林業  
設立年 : 1978(昭和53)年  
団体URL :  
活動拠点 : 岐阜県恵那市串原木根3399  
取材日 : 2014年 11月 21日

団体代表者名 : 三宅隆美  
対応してくれた人の名前 : 三宅隆美  
調査員 : 丹羽健司、洲崎燈子  
レポート作成者 : 洲崎燈子

## 活動内容

林業(伐採・搬出)と建築、製材、ストーブ用の薪の生産を行っている。代表の三宅さんは林業の一人親方で、必要に応じて人を雇って作業をしている。建築はもう1人のメンバー、大工の松井瑞穂さんが担当している。

林業: 山主と契約を結んで行っている。山づくりにあたっては、今お金が欲しいか、孫の代にいい木を残すのかといった、山主の意向を確認するようにしている。支障木等の特殊伐採もしており、依頼があれば東京や三重まで行くこともある。こうすれば口コミで仕事の人脈ができる。助け合い、結の精神で林業をやっている。

建築: ハウスメーカーにはできない、自然に逆らわない、自然の木の良さを生かした家づくりを行っている。地元の木を2ヶ月～半年かけて天然乾燥して使う。10年位前までは地元の木で家を建てることもっとよくあった。よその山で木を伐らせてもらい、伐採の費用はもらわずに伐った材をもらうこともあった。物々交換のようなもの。

製材: 三宅林業を立ち上げてから5年後、林業だけでは食べていけないと考え製材も手がけるようになった。やり方は丁稚奉公に行ってみよう見まねで覚えた。

ストーブ用の薪の生産: 名古屋、大府、瀬戸などの個人向けに、カナギ(広葉樹)の薪を販売している。長男の勤める設計事務所で薪ストーブのある家を建てた施主にも提供している。

## キャッチフレーズ

木は自然の贈り物、十人十色の木を生かす

## 会のモットー(何を大切にしているか)

林業: なるべく丁寧に仕事をするようにしている。(奥矢作森林塾の)大島光利さんには、「銭金抜きでいい仕事をする」と言われている。山主に少しでも多くの利益を返したい。森林組合の仕事はなるべくやらないようにしている。仕事の段取りが合わないと、負担が山主の方になってしまう。

建築: この辺りの木は東濃ヒノキと三河ヒノキの中間的な性質を持っており、赤味があって材が堅いのが特徴。矢作川の向こうでは木が変わる。建材を伐り出すのは秋の彼岸から春の彼岸までの時期。それ以外の時期に伐った材は柔らかいので市場に出してしまう。

木は自然の贈り物。木を伐ることは木の魂を頂くこと。1本の木をどう生かすかということを考える。南向き斜面の木は家の南側の柱にすると木も嫌がらない。一山千本の木を伐れば、伐った木をどこに使えばいいか分かる。木も十人十色。こういうことが分かる大工と仕事をしないといけない。今の棟梁とはあうんの呼吸で仕事ができる。木を挽く時に迷うことがあると助言してもらう。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

特になし

## 連携している団体・専門家・自治体など

連携しているのは個人のみ。大手とつき合うとたたかれる。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

林業、建築、製材、ストーブ用の薪の生産

## 現在直面している課題

特になし。2人の息子が自分の志を継いでくれている。長男は1年棟梁について大工仕事を覚え、今は設計事務所に勤めている。次男には山仕事を教えて、大体覚えた後に大工を5～6年やっている。1985年にケガをした時、子ども2人で相談して山仕事をすると決めたという。指が動かないので薪を出荷するのに子どもを連れて行って手伝わせた。山にも連れて行き、知らない間に仕事を覚えた。

## 今後やってみたいこと

特になし。やりたいことはやれている。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 林業は家業だったのですか？

<答え> 以前は百姓をやっていて、たまにアルバイトで林業をしていたが、雇い主が亡くなったので自分でやろうと思い、松井さんと2人で三宅林業を立ち上げた。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 特殊伐採について教えてください。

<答え> 特殊伐採は年に何度か手がける。森林組合に委託すると高い。以前奥多摩で、クレーンで高いところに乗って伐採する空師(そらし)の仕事振りを見て、自分もやろうと思った。人がやっているのを見て覚えた。先頃、旭で伐った樹齢400年の巨木は、自分の前に3人の人が伐るのを断念した。伐採した木材は名古屋の神社をつくるために使われた。ワイヤーをかける時に間違えると伐った木に挟まれるので大変危険。大きい木は上から玉切りしていくが、一番お金になるように伐る。博打のようなもの。いっぺんに段取りする必要があるので疲れる。

## その他、伝えたいこと

- ・自分の体で覚えたことは忘れない。
- ・山主にはいい木を残せと言っている。それができないなら、山を大事にしてくれる人に地付きで売った方がいい。今の山主は木の性質が分からない。昔の山主は熱心で、作業も自分でやった。
- ・今の串原は若い人が元気。皆が仲良くなるといい。

## 写真



取材風景。いずれも右側が三宅さん



特殊伐採の様子

## たけうち牧場

調査団体名	： (株)たけうち牧場	団体代表者名	： 竹内通王
設立年	： 1971(昭和46)年	対応してくれた人の名前	： 竹内通王
団体URL	： <a href="http://teleco.jp/takeuchi/">http://teleco.jp/takeuchi/</a>		
活動拠点	： 愛知県北設楽郡設楽町西納庫字駒ヶ原	調査員	： 浅田益章、松井賢子、沖 章枝
取材日	： 2014年11月15日	レポート作成者	： 沖 章枝

## 活動内容

## 牧場経営：

父母が戦後入植開拓した標高900mの段戸山麓で、独自で肉牛の肥育を手がける。酒造会社勤務をした後入学した八ヶ岳農業実践大学卒業後の23歳から始める。当初、農業後継者育成資金75万円を借り、生後1週間ぐらいの赤ちゃん乳牛にミルクを飲ませ育て、6ヶ月齢の素牛として売り回転させた。11頭の牛から開始。この時、牛舎は古材を買って手造り。以後スクラップ&ビルトを繰り返す。0.1歩でも前進したいと思ってきた。牛が500頭になれば人も雇えるようになると考え目標にした。

これまでにオイルショック、BSE、カイワレ騒動に翻弄されたこともあった。現在、牧場で450から500余頭を肥育。農業制度資金の融資を受ける時は、設楽町に保証人になってもらえる親戚もないため、友人とお互いの保証人になり合ったりを繰り返してきた。理解を得るため“ビーフ祭り”を催したことも。自己資本比率を高めようと努め、10年程前に100%達成。息子が後継者として戻ったので、今は新事業融資を受けている。

2014年8月、農業者としての究極の願いであったここで育った牛を、この空気の中で地元の新鮮な野菜と一緒に味わってもらおうという、『農園レストラン&BBQばんじゃーる駒ヶ原』をオープンさせた。従事者5人、パートさん3人。

## 地域活動：

○広い設楽町に若い農業者はそんなに多くなく、線や面で繋がる必要があると思い、同世代の者で、『設楽町農業青年会』を設立。丁度、四国の池田高校が甲子園に出場し優勝した頃で、「やる気になったら何かできるんじゃないか」と考えた。全国農業会議所主催の『若い農業者グループ活動コンテスト』に応募し、農林大臣賞を獲得(全国表彰)。

○『ばんじゃーる 自然塾 駒ヶ原』を開催 ※ばんじゃーる は、インドネシアバリ島地方の最少社会生活単位を表わす言葉。日本の『結』『講』にあたる。

○『山を拓き ここに暮らしを創る—愛知県段戸山麓戦後開拓集落 駒ヶ原・沖ノ平の聞き書き—』を2013年3月に発行。沖駒区開拓聞き書き実行委員会を立ち上げ実施。編集 山里文化研究所。

○沖・駒プロジェクト・・・旧駒ヶ原分校の校庭で、地域の人や自然が好きという若い賛同者で4月から11月第3日曜日にログハウスづくり。2013年に1棟完成、2棟目を建設中。丸太小屋造りの体験を通して交流事業をしている。

○R153からR257をつなぐ広域農道が建設中だが、ナナカマドとモミジを農道沿線に植栽し、ナナカマド街道を計画している。まだ名倉まで繋がっていないが名倉から津具へ。津具には先輩たちが植えたササグレモミジの街道があるのでそこへ繋ぐ予定。

○名倉で今春(2015年)から始める、中日新聞・中日文化センターと共催の『名倉でおいしいお米をつくろう』の講座を引き受けた。都市の人に、体験を通して農山村の楽しみ方や、地元住民との交流を図る事業を行う予定。(名倉地区営農推進協議会)

## キャッチフレーズ：

希望は外でなくここにある

## 会のモットー(何を大切にしているか)：

親たちが苦勞をして拓いてくれたからこの地がある。このことを忘れないでいたい。  
ここで暮らし続けたい人やここへ入ってきたい人達と交流して、次世代の人が住んでくれる環境を創りたい。

## 設立から現在に至るまで変化したこと:

場所を嘆いてはなにもできない、ここは山の中だけれど日本列島の真ん中、全国どこへでも行けると、肉牛を東京芝浦の市場へ出荷していた。BSE騒動で価格が大暴落し、実際にこの時捨て犬のように捨て牛さえもあった。東京で、どこへどんな売られ方がされているかわからないと思って、愛知万博の少し前、顔が見える範囲の東海地方へと出荷先を変えた。この時、直売の免許を取って牛肉を売りに行ったこともある。

ぼちぼちではあるが、県内でこの肉『段戸牛』を使いたいというシェフもでてきてくれた。段戸牛の特設コーナーを設けてくれているスーパーマーケットもある。人に恵まれたお陰で『農園レストラン』が開店できた。このことでまた、たくさんの人との出会いができた。不思議と同じような人が集まってきて、初対面同士が仲良くなるということも起きている。

## 連携している団体・専門家・自治体など:

東海農政局、6次産業化プランナー、愛知県農業改良普及課、JAあいち東、名倉地区営農推進協議会、特定非営利活動法人山里文化研究所

## 山村再生や、その担い手作りに関わる具体的な活動:

○地域の人や自然が好きという若い賛同者で取り組んでいるログハウスづくり ○ナナカマド街道計画 など  
詳細は活動欄に記述。

※以前から矢作川流域の根羽村、豊田市・稲武・足助と堆肥や牛肉の連携がある。地域的にも隣接している。森の健康診断、ばんじゃーる自然塾実施における協力もある。交流がより広く密になるとよいと思う(取材者)

## 現在直面している課題:

肉牛肥育の経営を成り立たせるためにどうするかということ。海外への働きかけやハム業界のバイヤーも来ている。業者の中にはハラルの認証をとったところもある。量を増やして価格競争しても外国製品には負ける。基本は地元。手をかけても出来るだけきっちりした良いものを作っていけないかやっつけいけないかと思う。

## 今後やってみたいこと:

国道153号線を段戸山方面に入ると高原の牧場風景が広がる。溪流は奥入瀬溪谷のようだし、なぐらのアグリステーション周辺は信州の安曇野に似ている。遠くまで行かなくても良いところがいっぱいあることを多くの人に知ってもらいたい。エコツーリズム、川遊びやバーベキュー、体験学習、ファーマーズマーケットなどをしたい。

6次産業の認証をとっているのので、ビーフジャーキーやローストビーフの加工品づくり。若者たちがここで生活できるマーケティングもしたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か:

来る3月22日に豊橋鉄道主催でメープルツアーが予定されているが、いろいろな情報の発信や都市と農山村の交流を企画できる人がほしい。自然が好きで働く場を探している若い人を呼び込みたい。人がわざわざここまで足を運んで食べに来たいという料理や雰囲気を提供できるように取り組みたい。

## チームオリジナルの質問:

<質問内容>①汚水が大雨の時に流出といった畜産の糞尿処理が問題になっているがここではどうしているのか? ②飼料はどのようにしているのか?

<答え>

①牛糞発酵プラント(ロータリ攪拌・エアレーション)1基、堆積発酵舎2棟、堆肥舎2棟の施設を駆使し、100%良質発酵堆肥を生産している。平成元年から豊田の堆肥屋さんと連携していて8割ぐらいはそちらへいつている。あと2割ほどは、この近辺の名倉、稲武、足助、根羽へ4t車で配達(有価)をしている。堆肥も農家さんが望むような良いものを作るという気持ちがないといけないと思う。

②愛知経済連の設楽の里でブランドの配合飼料を作ってもらっている。そこに県内産飼料米を2、3%混ぜている。飼料の自給はいずれと思うが、耕作地や耕作の機械の問題などあってまだまだというところ。

チームオリジナルの質問:

<質問内容> ③TPPの問題をどう捉えるのか？具体的にたけうち牧場の経営として怖いのか、怖くないのか？

<答え> ③正直いって怖い。神戸牛や松坂牛など一部のブランド産地はいざ知らず、普通の農家は、これから先、飼料穀物の値上げも為替の変動もあるだろうし、世界的な穀物自給バランスの崩れもあるだろうから恐れている。中山間地にこれ以上の効率化をもとめることができない。TPPIによって日本の中山間地域が壊されるという恐れがある。TPPIは農産物の問題が大きく挙げられているが、報道されていない健康保険にも影響が及ぶのではないかと不安に思う。

その他、伝えたいこと:

ログハウスでは自然塾をやっている。最近すこし休んでいるが、これまで年2回ぐらいのペースで催し物をしてきた。ブータンへ行って来た方の話や千年持続学校の話をして頂いた。交通費ぐらいの謝礼しか出せないが、それでいいという講師を紹介してほしい。特にレストランが冬季休業する12月から3月までは全館内が空いているので、活用したいと思う。

写真



沖・駒プロジェクトログハウス



農園レストラン&BBQ「ばんじゃーる駒ヶ原」



ナナカマドの植栽

■ 私たちがたけうちです。



私が育てた自慢の肉牛  
誇りをもって、  
お勧めいたします。

たけうち牧場ホームページより



# アンティマキ

調査団体名	アンティマキ	団体代表者名	村田牧子
設立年	2003(平成15)年	対応してくれた人の名前	村田牧子
団体URL	<a href="http://blog.goo.ne.jp/nihonkamoshika">http://blog.goo.ne.jp/nihonkamoshika</a>		
活動拠点	豊田市夏焼町ワカドチ383-5	調査員	蔵治光一郎、大島光利、森本徳恵
取材日	2014年12月5日	レポート作成者	森本徳恵

## 活動内容

周囲の野山で採取した草木で、染めものやリースなどを作る一方、環境や体になるべく負担の少ない素材を使った焼き菓子やパンの製造に携わる。直売所・どんぐりの里いなぶを始め、市街地のスーパーやまのぶ梅坪店などで販売するほか、豊田市とその近郊で開かれるイベントなどにも出店している。また、地元の体験施設・どんぐり工房では、毎月草木染めの講習会を開き、不定期に、焼き菓子やパンの講習会もどんぐり工房や市街地で開催している。

他にも、地元の有機栽培の米農家を応援するために始めた「こめこなクラブ」では、山里に移住した人たちと田舎好きの都会人が集まって農作業を手伝っている。さらに、友人のユキさん(志工房主宰)とミキさん(Miki-Co-Labo 主宰)と組んだユニット「奥三河Three trees+」では、通信の発行やイベントでの出店協力などを行っている。

「アンティマキ」は「まきおばちゃん」という意味。

## キャッチフレーズ

草木染め「きさくにくさきぞめ」 焼き菓子・パン「易しく優しい焼き菓子とパン」

## 会のモットー(何を大切にしているか)

苦労はしないで工夫すること。草木染めを通じて、自然が生み出す美しさや不思議さを知ってもらうこと。手作りのよさ、面白さ、楽しさを感じてもらうこと。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

京都で編集の仕事をしていた30代のころ、マクロビオティックの考え方に触れたのがきっかけで、田舎暮らしを志すようになった。12年前、先に田舎暮らしを始めていた両親の住む稲武地域に移住。ようやく夢がかない、草木染めとリースの工房「アンティマキ」を立ち上げる。8年前、家の改装を機に知人の勧めで菓子製造業の認可を取得。同時期に、大阪在住の友人のマクロビオティック料理講師を招いて、地元で講習会を開き、現在まで続けている。菓子製造業については、はじめは地元の直売所に少々卸す程度だったが、どんぐり工房での講習会や市街地のグリーンマン朝市での出店、インターネットによりネットワークが広がった。イベントでの出店や、焼き菓子やパンの講習会を開催してほしいという要望が少しずつ増えている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

どんぐりの里いなぶ、green maman、(株)M-easy、スーパーやまのぶ、豊田市(おいでん・さんそんセンター)、愛知県交流居住センター(三河の山里だより)

奥三河Threetrees+のメンバー(天然石けんの志工房、コンフィチュールのMiki-Co-Labo)

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔は牛馬の飼料や肥料として大事だった雑草は、今では邪魔者としてしか扱われていない。草木染め講習会では、百姓の敵・雑草から美しい色が生まれることを知ってもらい、参加者の自然を見る目が深まることを期待しているという。講習会の参加者からは、稲武を訪れるきっかけとなり、田舎が好きになったとの声がよくあがる。ブログやフェイスブックでは、山村暮らしの豊かさや楽しさ、しんどさを知ってもらいたくて、発信を続けている。

## 現在直面している課題

アンティマキの商品は村田さんお一人で制作・製造しているため、供給量に限りがあることが問題。ただし、商品製造のそもそもの目的は、人々に手作りの楽しさを知ってもらいきっかけになることでもあるので、講習会に参加して、作り方を覚えていただきたいと思っている。

## 今後やってみたいこと

織物製作や土いじり、しばらく手がけていないナチュラルクラフトの制作などに取り組み、さらに田舎暮らしを楽しみたい。現在も行っているブログだが、もっと頻繁に発信していきたい。手軽に作れる、焼き菓子やパンのレパートリーをさらに広げ、市街地での講習会開催にも力を入れたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまで、green maman や株M-easy のメンバーと知り合えたことで、ネットワークが広がった。村田さんが田舎暮らしをこころざしたのは30代半ば。いま、その年代の人たちが、田舎暮らしに興味を持ち、実践もしている。彼らとのネットワークをさらに広げたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 田舎暮らしブームの先駆けと思われるが、これから移住する人へアドバイスを。  
<答え> 田舎に移住したい人は、田舎に馴染まなくてはいけないと意気込むと思うが、無理はしないほうがいい。そもそも、都会と田舎では文化が微妙に異なるということを頭の隅に入れておくべきだ。無理に馴染もうとすると、本来自分がしたかった田舎暮らしをあきらめざるをえないこともある。実際を言えば、昔と違って、田舎の人でも同じ暮らし方をしているわけではなく、同じ価値観を持っているわけでもない。実は田舎の付き合いが辛いと思っている地元民もいる。不愛想と思われるか、変人と目されたりすることを怖がらないほうがいいと思う。移住者が楽しげに面白そうなことをやっていると、意欲的な人は自然に集まってくる。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 移住者を受け入れる側に要望があれば教えてほしい。  
<答え> 「村に住んだらこうするものだ」と、押し付けることを控えてほしい。例えば、村のお祭りに関していえば、都会からの移住者はお祭りというものに参加した経験のない方も多い。だから、珍しがって喜ぶ人もいれば、警戒する人もいる。もちろん、別の宗教を信じている人もいるはず。そういうひとたちを一律に「郷に入れば郷に従え」とばかりに無理に引き入れることはしないでほしい。文化が違うかもしれないということを考慮したうえで関わりをもってほしい。

## その他、伝えたいこと

田舎暮らしをしたいと思った最も大きな理由は、田舎なら、自分の生活に必要なものができるだけ自分の手で作れると思ったから。味噌とパン作りに始まり、各種保存食作り、草木染めで古着の再生、昨年からは醤油醸造も始めた。米作りではハザ掛けを手伝ったり、休耕田での麦作もおこなったりした。もちろん今も、生活のほとんどは人の手による品でまかなっているが、ささやかでも、自分で作れるということが楽しいし、生きる自信につながると思う。

写真 村田牧子さん  
(アンティマキ)



草木染めした生地  
(中央の黄色はカリヤス染め)



焼き菓子  
(素敵なお宅の窓辺にて)



## てくてく農園

調査団体名	: てくてく農園	団体代表者名	: 横江克也
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 横江克也・横江晴菜
団体URL	: <a href="http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/">http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/</a>		
活動拠点	: 豊田市榊野町池田26-4	調査員	: 蔵治光一郎・大島光利・森本徳恵
取材日	: 2014年12月13日	レポート作成者	: 蔵治光一郎

## 活動内容

農地を借り、野菜をつくる。鶏を飼い、卵を産んでもらう。不定期にジャムをつくる。これらを自家消費し、余剰を知り合いに「おすそわけ」する。おすそわけの方法は、決まったお客さんへの宅配のほか、インターネットでの購入申し込みも受け付けている。宅配は豊田市、瀬戸市内は自分で配達し、それ以外は宅配便で。名古屋や東京にもお客さんがいる。決まったお客さんは20~30人ほど。生産量としてはこれが限界。収入としては少し足りないが、生活はできている。

## キャッチフレーズ

おすそわけを食卓へ

## 会のモットー(何を大切にしているか)

生産、販売をするのではなく、あくまで、自分たちの暮らしの余剰分を、自分たちの暮らしを応援してくれる人に「おすそわけ」する。市場に出して、知らない人に売るのはすごく気をつかうこと。店頭で並べるのは大変。規格品は作りたくないし、作ることができない。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

基本は変わっていない。お客さんが20~30人になるまで、最初は口コミ、知り合いに分けていた。イベントに出展して宅配を募集し、お客さんが増えていった。野菜を先に始めたが、野菜は自分で作っている人も多い。卵は自分で作っている人は少なく、こだわりの卵を食べたいという人も多かったようで、増えていった。最近では、お客さんの顔が浮かぶようになり、こちらの思いだけでなく、お客さんのことを考えながら作るようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

農協、スーパー、市の販売所とは連携していない。行政からは青年就農の補助金、耕作放棄地を再生する補助金、電柵の補助金などをいただいた。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自分たちの生活で精いっぱいだが、消防団に入ったので、同じ世代で外から入ってきた人たちや、地元の若者とは知り合いになった。地域のお祭りに参加し、太鼓を習い、門松を作るなど、もともと好きだったので苦にならず楽しめた。草刈をするとありがたがられた。結果として、ほとんどの日曜日に予定が入っている。

## 現在直面している課題

提供できる量を増やしたいが、一人でやれることには限りがある。卵は好評だが、3~5月が旬で、1日90個ほど産む。その時はおすそ分けできる人が増えるが、それ以外の季節では1日20個ほどになり、欲しいという人に分けてあげられない。鶏は現在約100羽。もう少し増やしたい。

## 今後やってみたいこと

研修生の受け入れ。自分たちのような暮らしをしたい人を受け入れたい。  
ヤギを飼ってみたい。やってみたことがあるが、草の好き嫌いがあってきれいにはならなかった。  
知り合いの農家さんとお互いに手伝い合いたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

研修生が1年限りで住める場所(ゲストハウスのようなもの)があるとよい。研修生に給料は払えないので、行政の事業で給料を払ってくれる制度があるといい。そのような制度はすでにあり、14万とか20万とかいった給料が払われるようだが、払い過ぎではないか、感覚がおかしくなってしまうのではないかと思う。

## チームオリジナルの質問 1

<質問内容> 地域に、どういう受入体制があれば、外からの人が、もっと入りやすいと思いますか。

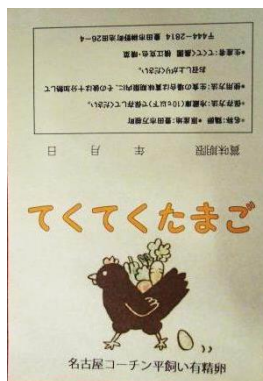
<答え> 四国の研修センターにいて、暮らす場所を探していたとき、豊田市に空き家バンク制度があったのがとてもよかった。売り家でなく、借りられること、行政が間に入って、採算度外視であること(不動産業者との違い)、1日に何軒も見回れたこと。豊田の中でも旭の物件が多かったので活発な地域だと思い、旭を選んだ。農業については自分で農地を探した。技術は研修で学んでいたの、行政や農協の仲介はない方がむしろよかったが、ゼロから始める人に対しては研修先、面倒を見てくれる人がいた方が入りやすいだろう。

## チームオリジナルの質問 2

<質問内容> お子さんが生まれた後の生活は。

<答え> 「みんなで子育て」。地域のお役(草刈、神社の掃除、祭りの際の太鼓や笛、門松作り、お楽しみBBQなど)に参加すると、自然と地域の子供になる。抱っこする人が交代で面倒をみってくれる。子供が少し大きくなれば、一緒に太鼓の練習をしたり、門松を作ったり、料理を手伝ったり。また、近所で田植えなどあれば、子供も一緒に田植え(泥遊び?)を手伝ったり。地域内で母親と子供が孤立しない。緊急時には、子供の面倒を見てくれる人が近くにいることは、ものすごい安心。母乳、布おむつで乗り切るつもり。小児科の病院は、大きなところは足助にあるが、近くにないか探している。子供が小学生になったときに地域の小学校(敷島小)がまだあるかどうか心配。農作業のマンパワーは、子育ての分、減ってしまうことになるので、お手伝いの方がいてくれれば助かる。子供が生まれることをきっかけに、やり方を変えた方がいいかもしれないと考え中。

## 写真



ご自宅での取材の様子

てくてくたまごはこの箱に入れて提供されます。中には「てくてく卵のひみつ」として①国産飼料100%②平飼い飼育③抗生物質不使用についての説明が書かれています。さらに「豆知識」として、「黄身の色は食べているものの色」として、てくてく卵の鶏のごはんはお米が中心なので、黄身が薄い黄色(とうもろこしやパプリカなど赤や黄色の強いものを食べると黄身がオレンジ色になる)で、昔庭先で飼っていた頃の卵はこんな色だったかもしれません、と書かれています。



# あさひ若者会

調査団体名 : あさひ若者会  
 設立年 : 2013(平成25年)年  
 団体URL : <http://asahidosokai.jimdo.com/あさひ若者会とは/>  
 活動拠点 : 豊田市小渡町15-1  
 取材日 : 2014年12月11日

団体代表者名 : 鈴木啓佑  
 対応してくれた人の名前 : 鈴木啓佑、戸田友介、中垣 隆  
 調査員 : 蔵治光一郎、森本徳恵、大島光利  
 レポート作成者 : 大島光利

## 活動内容

旭地区の未来のために力になりたい地域の若者、Uターンした若者が集まり発足。いろいろな取り組みをする中で関わる人とのつながりを増やし、地域の課題解決のために実践できる若者の人材育成が主目的。現在のおもな活動としては、自分たちがまず旭のことをもっと知るために旭の今と昔を古老に学ぶ「ふるさと探訪フィールドワーク」。旭で頑張っている若者、嫁、事業主や旭の歴史など、知っているようで知らなかった旭の魅力に焦点を当て紹介する機関誌「シトルカン」の発刊。旭に縁のある全ての人のために開催される集いの場づくり「あさひ同想会」など。

## キャッチフレーズ

みつめなおそう旭の魅力 ほんとに旭を『シトルカン』(発行しているフリーペーパーのタイトル)

## 会のモットー(何を大切にしているか)

メンバーの主体性を大切にしているいろいろなアイデアを引き出し、それを仲間のバックアップによって実現させることができるような場づくり。  
 いろいろな取り組みをする中で関わる人とのつながりを増やす。そして関わることで地域の課題を徐々に自分事にし、課題解決のための実践者を増やすことのできる場づくり。  
 気をつけていることは、Uターン増加はあくまで結果であり、決して目的としないということ。目的にしてしまうと、様々な事情で旭を出て行かなければならなかった若者が悪者になってしまう恐れがある。どんな状況であれ旭の仲間に変わりはない。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

2012年、旭のために何かしたい有志グループにより「第1回あさひ同想会」を企画。そのグループが母体となり2013年より地域予算提案事業として「Uターン・親密別居者促進事業『あさひ若者会』」が設立された。設立より月一度の会合でのディスカッションを重ねることにより、少しずつふるさとに対する想いやビジョンなどが共有されてきているように感じている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

豊田市旭支所(事務局)、旭地域会議

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

旭のまちづくりに関わる担い手人材育成が活動の主目的。「ふるさと探訪フィールドワーク」、「シトルカン」の発行、「あさひ同想会」の企画など、いろいろな活動を通して、徐々に郷土の課題を自分事にし課題解決のために自ら実践することの出来る若者を増やしたい。

## 現在直面している課題

特になし。メンバーそれぞれが主体的に関わりながら話し合いの中で生まれたものは全てが正解。想定外の結果も貴重な学びとしている。

## 今後やってみたいこと

みんながやりたい事業をバックアップできる体制づくりの強化。(鈴木)  
老人福祉施設めぐりの里などと連携した旭の情報満載の日めくり帳の作成。(戸田)  
旭町人全員集まる大イベント「3,000人集合3,000人顔つなぎ」大懇親会を実現する!(中垣)

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

世代を超えた連携体勢をつくりたい。特に地域活動の中心となっている60代、70代の方々の理解と協力が必要。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>若い女性の参加、奥様方はどのように参加しているのか教えてほしい。  
<答え>若い女性の参加は2名と少ない。しかし、他では女性によるお茶会やバンドをやってる小さなグループがあったり、こども園、小学校、子ども会等で子どもを介しての仲間づくりが行われている。そういったコミュニティと連携していきたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>旭に移住してきたからの仲間づくりはどのようにされましたか。(戸田氏に対して)  
<答え>消防団に入り活動する中で仲間がどんどん増え旭が好きになった、旭を若者で何とかしようとして「あさひ若者会」の設立に参加した。今後は「あさひ若者会」でもいろいろな活動をする中で、結果として移住や地元若者のUターン促進にも貢献できるとよい。ただ人口が増えればいいではなく、旭を元気にするために一緒に活動してくれる若者の受入れを積極的に行っていきたい。

## その他、伝えたいこと

仲間で、あーでもない、こーでもないと話し合い、考えたり行動したりしていることに気づき、心地よいと思うように変化をしてきた。「いつでも帰ってきやすいように」、「いつでも新しく移住してきやすいように」、「子供たちが自分の夢に向かいながらもこの旭に住み続けられるように」、「年を重ねながら旭で住み続けられるように」。焦らず様々な取り組みに挑戦して実現したい。

## 写真



豊田市旭支所での取材の様子  
右 会長 鈴木啓佑さん  
中央 戸田友介さん  
左 副会長 中垣隆さん



ワークショップによる会議



機関誌「シットルカン」

## あすけ里山ユースホステル

調査団体名	あすけ里山ユースホステル	団体代表者名	小川光夫
設立年	1998(平成10)年5月	対応してくれた人の名前	小川光夫
団体URL	<a href="http://www.ne.jp/asahi/asuke/satoyamayh/">http://www.ne.jp/asahi/asuke/satoyamayh/</a>		
活動拠点	豊田市椿立町坂27-2	調査員	蜂須賀功、浜口美穂
取材日	2014年12月5日	レポート作成者	浜口美穂

## 活動内容

## ●都会から田舎への軌跡

名古屋市在住だった30数年前、ユースホステルを利用して旅をしている間に田舎の良さ、豊かさ、自然の素晴らしさを知り、27年くらい前に愛知県にある村に移住する。

その後、足助町に移住。閉校になった椿立小学校を平成10年に借りて「あすけ里山ユースホステル」と「貸農園」を始める。

## ●ユースホステル(YH)の企画・運営・協力活動

① イベント…四季折々いろいろなイベントを独自に催したり、豊田市、恵那市、根羽村などにある名所や温泉、観光地を紹介したりしている。

・自然観察…星見会、ホテル観賞、香嵐溪の紅葉ライトアップ見学、休耕田ビオトープでトンボ・メダカ・カエルの観察会など。

・地域のイベント案内ツアー…中馬のおひなさん、たんころりん、綾渡の夜念仏と盆踊り、平勝寺で除夜の鐘つきとお年越しなど宿泊者と一緒に行き案内をする。

・手ノコで行う間伐のお手伝い…地主さんによる伐倒の指導や間伐の必要性の話などを通して参加者との交流を深める。

・紙すき体験、藍染め・草木染め体験など。

② 貸農園…都市部の人たちの畑作業を通じた憩いの場となっている。

③ とよた都市農山村交流ネットワーク足助地域会の人たちと共にセカンドスクール(豊田市内の小学生の田舎体験・自然体験)の受け入れ。

④ NPO法人 共存の森ネットワーク(東海地区の大学生・高校生)の受け入れ。

## ●個人的活動

## ① 「椿立里山クラブ」

近所の休耕田を借りて「休耕田ビオトープ」の維持・管理を都市部の人たちと一緒にしている。ビオトープに棲んでいるトンボ・カエル・水生昆虫・植物などの観察も。宿泊したお客さんや子どもたちにも観察や泥んこ体験をしてもらっている。

## ② 「足助YH自然観察会」

基本的に旧足助町地内に限定して観察会を行っている。メンバーは5人、市内の森林インストラクターの方が先生。2013年に「足助の自然を歩く」という冊子を発刊。

## キャッチフレーズ

宿泊客と地域の架け橋に

会のモットー(何を大切にしているか)

何気ない山里の自然や文化を大切に思っている。

設立から現在に至るまで変化したこと

開所当初は旅好きなYH会員が主な客層であったが、自然観察などイベントを行って年を経るにつれ、一般のお客さんも増えてきた。特に小さい子どもがいるグループやご家族の利用が増えた。

また、矢森協や森林学校を通して間伐ボランティアの人たちとも親交が深まってきた。

## 連携している団体・専門家・自治体など

日本ユースホステル協会、矢作川水系森林ボランティア協議会(矢森協)、足助きこり塾、とよた森林学校、とよた都市農山村交流ネットワーク、豊田市、三州足助屋敷、NPO法人共存の森ネットワークなど

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

椿立自治区では数年前より共存の森ネットワークの学生たちの受け入れを行っている。愛知・静岡・岐阜・三重の大学、高校生が参加している。地元のおじいちゃん、おばあちゃんから今までの生活や仕事などの聞き書きをしながら学び、自分たちはこの集落とどう関わっていくかを考えている。

現在、環境問題の取り組みとして、漆畑町で若者を含む地元の人たちと共に、荒れた竹林の整備を実施。その竹の利用方法として試験的に野焼きで竹炭を作るなど、研究熱心に取り組んでいる。参加人数も増え、地元の若い人たちと共に、今後さらなる地域活性化のアイデアが出てくるものと期待されている。

## 現在直面している課題

- ・ユースホステル会員の減少。
- ・里山クラブ・観察会メンバーが高齢化している。
- ・農園やビオトープがイノシシやシカによる被害を受け、修復作業に苦労している。

## 今後やってみたいこと

- ・足助より車で1時間くらいの範囲内にある、ガイドブックに載っていない地元しか知らない名所、温泉、お店の紹介。
- ・山里の自然や文化に興味のある外国人旅行者の集客。
- ・新規イベントの企画。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・愛知県、豊田市、恵那市、根羽村など近隣市町村の観光情報収集。
- ・英文観光資料を作るための英語翻訳をしてくれる人。

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 様々な体験イベントを企画されていますが、そのきっかけは何？

<答え>

田舎暮らしを始めた時、そこに暮らす人々のいろいろな手仕事や山仕事などの技術や、それに伴う知恵の素晴らしさに感動した。自分自身でできることは少ないが、いろいろな人に協力をしてもらいながら、それを宿泊者に体験を通して伝えることができたらいいなと思うようになったから。これは、田舎だからこそできることだと思う。

## その他、伝えたいこと

閉校した校舎を活用した「あすけ里山ユースホステル」の部屋の名称は、学区内の地域の名前になっている。廊下には当時の鏡や子どもたちが描いた絵も残り、フロントには校歌が額に入れて飾られている。また、談話室には「椿立小学校誌」「椿立家族ものがたり」などの地域資料も。これらが地域のことを話すきっかけになっている。

昔は地域の人をつないでいた学校が、今はユースになり、外の人と地域の人をつなげるようになった。

写真



校舎を活用したあすけ里山ユースホステルの外観



談話室にて



間伐のお手伝い



共存の森—竹林整備



セカンドスクール  
足助地域会メンバーと共に



ビオトープで生きもの探し



校庭が子どもたちの遊び場に



草木染め体験

# 新盛里山耕流塾

調査団体名	新盛里山耕流塾	団体代表者名	鈴木 智
設立年	2008(平成20)年4月	対応してくれた人の名前	鈴木 智
団体URL	<a href="http://sinmori.exblog.jp/">http://sinmori.exblog.jp/</a>		
活動拠点	豊田市新盛町(すげの里)	調査員	浜口美穂、蜂須賀功
取材日	2014年12月13日	レポート作成者	蜂須賀功

## 活動内容

「子どもの頃にあった美しい里山にしたい！次世代を担う子どもたちや孫たちに引き継ぎたい！」という想いから新盛里山耕流塾は始まる。耕流塾の「耕」は、里山の再生と人材交流(人の発掘)の2つの意味がある。耕流塾の経緯と現在の活動内容は次のとおり。

### ●裏山(ら)しい暮らしの会(平成18年4月)

手入れがされなくなり荒れてしまった裏山を再生しようと、新盛自治区の活動として「あすけ新盛裏山塾活動」がスタートする。(新盛里山耕流塾の前身と言える活動)

### ●新盛里山耕流塾がスタート(平成20年4月)

地元住民を主体とする実行委員会を発足。地元住民が講師となり、都市住民との共同作業により、年間をとおして里山の魅力を体感できる耕流塾を開塾する。豊田市との共同事業。

### ●豊田市里山くらし体験館「すげの里」のオープン(平成23年5月)

豊田市足助支所が有識者と地元住民で構成される里山耕検討委員会を設置し、21世紀の新しい里山づくりと暮らしの実現を図るための里山と都市との交流(耕流)プログラムと拠点施設の検討を行い、その拠点施設として「すげの里」がオープンする。

### ●平成25年度の耕流プログラム

- ・旬裁食講座(11回)
- ・もりの里☆市民農園(田11区画、畑15区画)
- ・そばづくり講座(7回)
- ・トヨタ自動車労働組合農業体験講座(10回)
- ・そば打ち体験(3回)
- ・石窯活用講座(7回)
- ・山遊びコース(4回)
- ・その他の講座(ホテル観賞会、さつまいも植え、芋ほり体験、もちつき大会など)

## キャッチフレーズ

エコでおしゃれな 21世紀の里山暮らし

## 会のモットー(何を大切にしているか)

田舎の風景はどこも同じで、やっていることも同じだと思う。ここがいいと言ってくれる人は、その地域の人に惹かれてここにくると思う。「人とのつながり」を大切にしていきたい。

また、塾の運営に際しては、あまり無理をせず、ちょっとだけ無理をするように心がけている。その分だけ前進する。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

### ●人との交流の楽しさ、大切さを知った。

設立当初は里山を再生できればいいと考えていたが、活動を通じて人と人との交流の楽しさ、大切さ、奥深さがわかった。場所を整備しても、もう一度来たい、もう一度あの人に会いたい、あそこに行けばあの人に会えることが大事である。

### ●塾以外の地域の人意識が変わった。(相乗効果があった)

最初は自治区の活動として立ち上げたが、地域の人になかなか理解してもらえなかった。塾の活動を重ね、耕作放棄地が田んぼになり、里山が徐々に再生されてくると、活動場所の隣の人自ら耕作したり、間伐するなど、塾以外の地域の人がやる気になり、意識が変わってきた。

## 連携している団体・専門家・自治体など

豊田市、トヨタ自動車労働組合、千年ゼミ



山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

●耕作放棄地が美しい田畑に(耕作放棄地の解消)

耕作放棄地を市民農園として使用したことにより、市民農園の周りの土地所有者も耕作をするようになり、耕作放棄地の割合が80%から30%に激減した。(30%分は一人の都市在住者の所有で、現在、借りて再生する話を進行中)

●定住者が増加

耕流塾をきっかけにUターン(都市部からの移住者)が4世帯ある。Uターンの世帯もあり、新盛地区では人口が増加し、子どもたちの元気な声がいつでも聞こえるようになった。Iターンの人は、もともと田舎での暮らしに関心があったかもしれないが、耕流塾により目覚めたのかもしれない。あるIターンの方から「私はあなた(鈴木代表)がいるからここに来ました」と言われた時はうれしかった。日本中、里山の風景はどこでも同じかもしれないが、そこにいる「人」に導かれてくることがわかった。これからも、人と人のつながり、出会いを大切にしていきたい。

現在直面している課題

塾の中心メンバーの年齢は60歳以上がほとんどで、若いメンバーがあまりいない。

今後やってみたいこと

あまりに忙しくて今後のことを考える余裕がなく、ちょっと息切れしている感じである。今後は講座数を減らして、中身を濃いものにしていきたい。

将来は、耕流塾なしでも、地域がやっていける仕組みになることが一番理想である。現在はその手段が見つからないから耕流塾をやっている。もし、耕流塾以外に良い手段が見つければ、耕流塾はいつやめてもいい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 行政(豊田市)との関係は？

<答え>

●負担金をもらっている。

耕流塾の講座は、豊田市との協働事業である。講座参加者からは会費をいただいているが、それだけではやっていけないので、豊田市から負担金をいただいて運営している。本当は、会費だけで賄いたいのが現状である。

●人としてつきあう。

行政担当者は数年で代わるが、どの人も始めはかたいが、付き合っていくうちに丸くなっていく。担当を離れても耕流塾に来てくれる人もあり、やはり、人としてお互いを認め合いながら、真剣に付き合うことが大切である。私は、行政担当者だけでなく、耕流塾参加者全員、大人から子供までみんなと真剣に付き合っている。

その他、取材者から伝えたいこと

●無いものは自分で作る。

すげの里近くの水路にある小水力発電機、バイオガス装置、ちょっとした建屋など既製品でない物は、どんどん耕流塾のメンバーで作っています。

●すげの里はすげえエコです。

すげの里は、自給自足によるかつての里山暮らしを参考に、エコで自然にやさしい循環型の暮らしを意図して、薪ボイラーや薪ストーブ、太陽光発電などを導入しています。里山暮らしの知恵と技を学び、交流や研修の場として活用でき、会議室、調理室のほか囲炉裏のある談話室や簡易宿泊部屋もあります。

●近くにおしゃれなカフェ

活動拠点施設「すげの里」の近くにおしゃれなカフェ(ganga)がある。木曜日から日曜日、朝9時から夕方5時半まで営業している。鈴木代表の奥さまが作っています。ランチもあり、是非お立ち寄りを！おすすめですよ。

写真



薪ストーブの前での取材の様子



石窯活用講座の様子



バイオガス装置の説明をする鈴木さん



すげの里



移動式の石窯と薪ボイラー



カフェ ganga

## 近藤しいたけ園

調査団体名	: 近藤しいたけ園	団体代表者名	: 近藤圭太
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 近藤圭太
団体URL	: <a href="http://kondoshiitake.blog.jp/">http://kondoshiitake.blog.jp/</a>	調査員	: 浜口美穂、蜂須賀功
活動拠点	: 豊田市和合町(下山地区)	レポート作成者	: 蜂須賀功
取材日	: 2014年12月5日		

### 活動内容

国内で多くの農家が菌床によるハウスで椎茸を栽培しているが、近藤しいたけ園では昔ながらの「味」にこだわり、原木による椎茸を実家の山で栽培している。菌床栽培では4、5ヶ月で収穫できるところ、近藤しいたけ園は原木での栽培により1年半から2年かけてじっくり育て、より自然に近い椎茸を栽培する。しかもそのホダ木(菌をつける原木)は、実家の山や地元の共有林から自ら切り出し調達している。ホダ木から作っているところは全国的に見ても珍しいケース。老木は切っても萌芽更新(切株から芽が出る)しないため、コナラを植林している。その結果、健全な森づくりにもつながり、生物多様性にも貢献している。

年間15万駒の植菌を行い、栽培、収穫、販売すべてを一人で行っている。乾燥椎茸も製造。生椎茸はその日に採れたものをその日に届けることを基本に、産直プラザなどの直売所で委託販売するほか、ファーマーズマーケットなどで直接販売をしている。また、(株)あいのう流通センターに卸売りもしている。

### キャッチフレーズ

地産地商(地元で作って地元で売る。)

### 会のモットー(何を大切にしているか)

「自然に逆らわず、自然の流れの中で育てたい」をモットーに、味、安心、安全を消費者に届ける。

### 設立から現在に至るまで変化したこと

設立後3年かけて20種以上の椎茸の種菌を栽培し、環境にあった、収穫が多く、おいしい椎茸の栽培を試みる。また、月4回のファーマーズマーケットに出店し、対面による直接販売を行い、お客さんと会話し、お客さんの反応を見ながら、味、価格設定を決めている。

### 連携している団体・専門家・自治体など

(株)あいのう流通センター、直売所(JAあいち豊田直売所、下山の里、山遊里、小久井農場)、商工会

### 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

採れた椎茸を豊田、岡崎など地元で売ることにこだわっている。おいしいものをおいしい状態で地元の人に食べてもらいたい。(インターネット等を通じて都会への販売は考えていない)

また、ホダ木を採取するため実家の山で木を切った後、その場所に次のホダ木として使えるよう植林している。原木は椎茸栽培者にとって、農業者の「畑」と同じである。椎茸栽培が持続可能になるよう、山を大切に守っていききたい。

### 現在直面している課題

原木での栽培は、収量が増えないし、時間がかかることが課題である。

また、近年獣害による被害が多くなった。イノシシ、シカは柵を設置することで防げるが、サルには効果があまりないことがわかった。そこで昨年、サル対策として「モンキードッグ」を飼い始めた。しいたけ園内を犬が散歩することで、サルが警戒するようになり、被害を防ぐことにつながる。

## 今後やってみたいこと

今後もしいたけ園を続けていきたいし、できれば、椎茸を基本に、加工にもチャレンジして、6次産業化にも挑戦してみたい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>しいたけ園を始めることになった経緯は？

<答え>

### ●子どもの頃の原体験

お父さんが森林組合に勤める傍ら、椎茸を栽培していた。山の仕事や椎茸栽培を手伝ったり、遊んだりして、楽しい思い出がある。

### ●大学時代の椎茸栽培

夏休みを利用し、自分で椎茸を栽培して出荷したところ、他のアルバイトをするよりもお金を稼ぐことができた。また、自然の中で仕事をすることや自分が作ったものを買ってくれる喜びを感じた。

### ●脱サラし、農業研修

将来、自分で何か仕事をしてみたいと思っていたが、まずは信用金庫でお金の流れを勉強し、脱サラする。その後、豊田市の地域農業後継者育成事業に応募し、矢作川自給村稲穂の里(小原農地管理センター)で農業技術を学ぶ。そこで、有機農業、流通などについて研修を受ける。研修を受ける前は直売所をやりたいと思っていたが、研修を受けて、やっぱり自分で農業をしないとと思い直し、2011年に近藤しいたけ園を設立し、現在にいたる。

## 写真



コナラの木と近藤さん



原木(太い)での栽培



原木(枝先まで余すことなく使うので細い)での栽培



モンキー犬の空太(くうた)くん

## こいけやクリエイト

調査団体名 : 株式会社こいけやクリエイト 団体代表者名 : 西村 新  
 設立年月 : 2011(平成23)年8月 対応してくれた人の名前 : 西村 新  
 団体URL : [www.koikeya-create.com](http://www.koikeya-create.com)  
 活動拠点 : 豊田市全域・根羽村 調査員 : 近藤 朗、眞柄明洋、高橋伸夫  
 取材日 : 2014年 11月25日 レポート作成者 : 高橋伸夫

## 活動内容

メンバーは6名。夫婦(デザイナー)+スタッフ3名(デザイナー)+母(「耕Life」の配達担当) [写真はカメラマンに委託]  
 各種印刷物のデザインや作成とホームページの企画・制作・運営などを生業としながら、フリーペーパー「耕Life」を  
 年に4回発行することで、皆さんに「農」「食」「暮らし」「環境」に目を向けてもらい、自分の人生を耕してもらいたい。  
 無理なく自分達のペースで活動することを心掛けており、取材活動の範囲も豊田市と根羽村程度に留めている。

## キャッチフレーズ

デザインで人と人をつなぐ。  
 (ちなみに西村代表の正装はツナギです)

## 会のモットー(何を大切にしているか)

人生を耕す・地産地消・地域で顔の見える関係性を築くこと

## 設立から現在に至るまで変化したこと

個人経営のデザイン会社として設立したが、人手が足りなくなって翌年法人化した。  
 「耕Life」は2012年10月に発行したが、当初予定の3,000部はすぐに無くなり増刷。現在の発行部数は11,000部(2014  
 年冬号)。日本タウン誌・フリーペーパー対象2014のライフスタイルコンテンツ部門最優秀賞、読者投票部門全国5位  
 受賞。

## 連携している団体・専門家・自治体など

アグロ・プエルタ(広報として立ち上げに参加)、千年委員会の山本シゲさん、株式会社M-easyの戸田さん、  
 一般社団法人物々交換局 など。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

フリーペーパー「耕Life」の発行。  
 豊橋市のセミナーで農産物のデザインについて講演を行った。

## 現在直面している課題

「耕Life」の印刷・製本費用は広告・協賛・耕縁会(後援会)からの収入で賄えるが、人件費分は持ち出しである。ただ  
 「耕Life」の読者から仕事の依頼が入ることもあるので課題ではない。  
 人と人のつながりということを含め、現時点で大きな課題は無い。

## 今後やってみたいこと

- ・ お金が溜ったら、現在会社がある場所に人が集まるカフェを開店したい。
- ・ 他の地域で「耕Life」のようなフリーペーパーを発行したい人があれば支援したい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

新しい人脈や情報も必要だがとりあえずは現状の情報・人脈の中で活動したい。  
必要なものといえばカフェを作るお金？

## チームオリジナルの質問

<質問内容>地元で開業・活動されておられるが、豊田市以外の場所であったとしても順調にできたと思いますか？

<答え>他の地方のことについては考えたことがないので分からないが、豊田市は開業・活動する環境が整っていると思う。豊田市は巨大企業のお膝元で関連企業も多いが、当社に大きな企業の仕事はほとんど入らない。逆に大企業の仕事を扱う規模の大きな会社では採算が合わない仕事があるので、その部分で仕事を得られている。豊田市は我々のような活動には大変都合が良く、「耕Life」の配布置き場300箇所の中で250箇所が豊田市の店舗や施設であり、ありがたいと思っている。

## 写真



# アグロ・プエルタ

調査団体名	: アグロ・プエルタ	団体代表者名	: 藤本浩幸
設立年	: 2012(平成24)年	対応してくれた人の名前	: 藤本浩幸
団体URL	: <a href="http://agropuerya.boo-log.com">http://agropuerya.boo-log.com</a>	調査員	: 高橋伸夫、眞柄明洋
活動拠点	: 豊田市全域	レポート作成者	: 眞柄明洋
取材日	: 2014年11月25日		

## 活動内容

農業サークル「アグロ・プエルタ」のメンバーは、普段は別に仕事を持って活動しています。農をツールに、食や暮らしのあり方を考えるきっかけをつくり、持続可能な自立した地域社会の創造に寄与することを目的に、現在は20代から30代の会員等(親と子を対象として)にフェイスブックを利用して、農に係わるイベントを豊田市市内で年間を通じて定期的に企画・案内し、○農と食をテーマとした交流・対話の場づくり、○農と食のあり方(安全な食とその確保)を題材にした問題提起、解決策の模索及びその実践を行っています。

## キャッチフレーズ

アグロ・プエルタは、農や自然を楽しみながら、食や暮らしのあり方を見つめなおすきっかけになる場があったらいいな—という思いから生まれた団体です。BBQや野菜作りをとおして、とにかくみんなで笑顔で楽しむ。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

子供達が畑(自然)の中で遊んでいないので「虫がきらい」などの問題に対して順応性を高めるために、昔のように畑や田んぼを使って多いに遊んでもらい、そこで収穫した安全な野菜などを味わって欲しい。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

野菜づくりに興味があり、無農薬の奈良県の農場で研修して民間資格を取得して、仲間をつのりこの活動に入った。豊田地域の人や農業に係わる団体の方と繋がりができるなか、益々農業にはまっています。

## 連携している団体・専門家・自治体など

千年委員会、スローライフセンター、豊田東高校、矢作川研究所など。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動の一例として、年間を通じた米づくりの「こめっこクラブ」を毎年行い、6月の親子での田植えにはじまり、草取り、稲刈り、11月の収穫祭まで行い、その苦労や楽しさ、収穫の喜びを体験することや、豊田市旭地区の農園とタイアップしたイベントもを行っています。

## 現在直面している課題

今まで20代～30代の親子を対象にしてきましたが、より地域の皆様と連携するために、幅広い層の参加を頂くことが必要と考えており、そのやり方を模索しています。

## 今後やってみたいこと

畑で育った野菜に触れ合うことを目的として、畑の近隣の幼稚園やこども園の園児と、会員メンバーが育てた「さつまいも」の「いも掘り体験」やそれを食べる「いも掘り大会」を行ってみたい。

## 今後の活動について

矢作川流域圏懇談会に関係する団体の方から、活動についての助言等を頂いている。  
また、当会のブレーンに、豊田市以外の学識者や行政に精通した人もいるので、これらのメンバーと議論しながら活動の向上に努めています。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>夏場のイベントはどのようなことを行っていますか。  
<答え>豊田市の花火大会の日に、子供たちに畑を開放し、日中は野菜の収穫等を行ってもらい、その後参加者でBBQをしながら花火を見学する企画を行っています。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>現在の活動対象が若い親子の方ようですが、今後のどのように？  
<答え>野菜を育てている畑の横には、遊歩道があり、近所のお年寄りのなかにはこの畑やイベントに興味を持っている方もあります。お年寄りとその孫(子供)というような方も参加して頂ける企画ができないか考えています。

## その他、伝えたいこと

サークル名の「アグロ・プエルタ」は、スペイン語からの造語で「農への」+「扉」=「農への扉」という意味です。  
名付け親は、このサークルを立ち上げる時に係わって頂いた、矢作川研究所の洲崎さんです。

また、活動している畑には休憩する場所(東屋等)がありません。  
このため、山の地域の方から間伐材を提供頂き、会員で東屋等を建てることを企画しています。ご協力をお願いします。

## 写真



右が代表の藤本さん



# とよたプレーパークの会

調査団体名	: とよたプレーパークの会	団体代表者名	: 小黒敦子
設立年	: 2004(平成16)年9月	対応してくれた人の名前	: 小黒敦子
団体URL	: <a href="http://toyotapp.exblog.jp/">http://toyotapp.exblog.jp/</a>	調査員	: 近藤 朗、真柄明洋
活動拠点	: 豊田市鞍ヶ池公園	レポート作成者	: 近藤 朗
取材日	: 2014年11月22日		

## 活動内容

プレーパークとは、従来型の公園、既成の遊具によるお仕着せの遊び場ではなく、子ども達の想像力により遊びを生み出す事のできる「子どもが主役の公園」である(デンマークが発祥と言われる)。子供たちのためにも、こんな遊び場が欲しいと思った豊田市のお母さんたちが、「ないなら作っちゃおう！」と勉強し、さらに仲間づくりをしながらプレーパークを開催した。幾多の変遷を経て、現在は豊田市鞍ヶ池公園の一角で1ヶ月に2~4回の冒険遊び場を開催している。

(調査員が訪れたのもこの活動日で、公園の中の坂道を上がったわかりづらい場所であったが、きわめて魅力的な秘密基地の様相で、一見放置状態のように見える子どもたちの歓声が飛び交っていた。)

活動としては他に定期的会合や講演会を実施、地域にプレーパークを作りたいという人たちへの支援も展開している。

●**創生期** …お散歩サークル「おひさまクラブ」(H15年~ 現在も活動中)の小さい子を持つお母さん8人達でH16年「とよたプレーパークの会」発足、H17年3月に高橋交流館で初開催、H17~20年は寺部町守綱寺裏庭で定期開催。共感し共に活動する仲間づくりが重要な時期であった。

●**鞍ヶ池公園時代** …鞍ヶ池公園再整備計画の一環で豊田市公園課から話がありH20年春に移転。H21年4月からは市の委託事業として定期開催することとなり現在に至る。子ども達だけでなく、お父さんも参加できる、お母さんもイキイキできるプレーパークが定着した。

●**これから** …子どもたちはどんどん大きくなっていくが、設立時メンバーの小黒さんが現在も代表として活躍。プレーパークには「卒業がない」と言う。課題として公園側の事情から、H27年4月には慣れ親しんだ現在の場所から同園内の植物園付近に移転しなければならず、奮闘中である。

## キャッチフレーズ

子どもたちがちゃんと失敗することのできる場所をあげよう! ~人の「生きていく力」を育む遊育~

- ・ 怪我と弁当は自分持ち
- ・ 心が折れるくらいなら、骨折った方がいいよ

## 会のモットー(何を大切にしているか)

- プレーパークは「オープンである」 …誰でも、その場で参加できる
- プレーパークには「禁止事項がない」 …むろんトラブルやケンカ、悩みや戦いもある。何かあればその場で話し合いルールを決めることとしている(解決力育成)。ここでは、子どもたちだけでなく親同士もよく話し合う。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

- 当然の事ながら、年齢層が上がってきた。プレーパークには卒業がない。小さな子は少し大きな子に。運営する側をやってみたいという子も出てきた。新しい人たちも入ってくる。この会自体が成長していくということ。
- 豊田市内にも育児サークルがたくさん出来てきた。プレーパークから派生したものもある。ただ育児サークルは子どもが大きくなれば人は変わっていく。そういった意味で「卒業のない」プレーパークの会が育児系ネットワークの中で頼りにされている面がある。子育ての会、グループは人の繋がりの中で楽しく「ごちゃませ」になっていて、その中で役割を果たせたらいい。年3回程度、話し合う会を開催している。

連携している団体・専門家・自治体など

県内のプレーパークの会；てんぱくプレーパーク、にいのみ池（緑区）プレーパーク、その他  
庄内緑地公園近くの団地内、知多市（そうり池）、東海市、三好市など

### 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

小黒敦子代表は現在、（豊田市企画政策部企画課）おいでん・さんそんセンターのコーディネートスタッフも務めているものの、とよたプレーパークの会が山村再生に関わっているわけではない。（鞍ヶ池公園は都市近郊に位置する）そもそも今回、この調査にプレーパークの会を対象としたのは、山村再生担い手育成の本質的な部分としての「人を育てる」活動を展開している団体だからである。

そういった意味で小黒さんから提示された

●与えられた既存のモノではなく、自ら考え想像力によって行動する力を養うこと

●決められた禁止事項によらず、問題発生時に話し合いながらルールを決める課題解決力、及び調停能力の育成

●プレーパークで主役となる子どもたちが大きくなり、次は面倒を見る側へと成長していく過程

さらに●プレーパークと育児サークルのメンバーがごちゃまぜに繋がって交流する（豊田市らしい）ネットワーク機能などが山村再生にも通じるキーワードだと感じた。

最も重要な点は、プレーパークでは、子どもたちだけでなく親たちにとってもお仕着せではない運営にやりがいを感じて積極的に取り組んでいる点。ある意味わずらわしい手法であり、役所だのみの都市的、効率的な教育とは正反対のものであるが、小黒さんは「このプレーパークがなかったら、うちの子はどうなっていたのだろうか？」とまで仰られた。

### 現在直面している課題

H27年4月の鞍ヶ池公園内での移転問題がある。プレーパークとしては現在地の方が適していると思うが、一般利用者にも使いやすいようにとの豊田市側からの要請である。現在、具体的な部分での話し合いが、うまくいっていない。

### 今後やってみたいこと

中高校生など大きな子たちの居場所づくりをしてみたい。

### チームオリジナルの質問 【遊び場・公園についての対談】

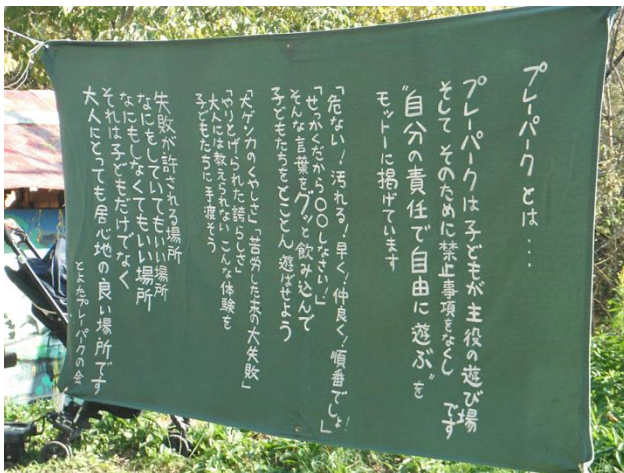
【調査者（近藤）】私は現在県営公園の指定管理者として、（公共）公園とは一体何なのだろうかと考え続けていました。自分なりの結論として、広い意味での「人を育てる場所」だと思い至ったのです。このプレーパークを見て正に公園利用のあり方としても相応しいものだと感じます。これは、社会（地域）で子どもたちを育てることの公共性の高さを確信しているから。一方で、本来の公園管理者である行政が指定管理制度を導入したことから現場感覚が薄くなり、私たち現場の者とズレが生じています。プレーパークを市から受託されている立場として、どう思われますか？

【小黒代表】プレーパークをつくるにあたって、当初は豊田市の次世代育成課にしつこく相談、鞍ヶ池公園においては公園課とよく話をしながら進めて来ました。良好な関係を築いてきたと思います。この公園は指定管理ではなく市が直接管理していますが、しかしながら私たちとの関係については以前と比べて、随分とズレを感じるようになりました。4月に控える移転の話もそうですけれど、話が通じないこともありますね。当然の事ながら市の担当者も代わっていき、その度に何度も説明をすることは厭いませんが、予算も減り、大事な部分が引き継がれていけないのは哀しいですね。

【近藤】私は県から派遣されている立場でもあり、予算が削減されたり職員が減っていく現状は理解できます。でも、鞍ヶ池でのプレーパークはお母さんたちと市が二人三脚で進めてきたようですし、その理念的な部分が十分継承される仕組みが必要だと感じました。役所もコンパクトさを余儀なくされる中、次世代の人材育成が急務となっています。行政など組織も人が基本だとすれば、人を育て続けるプレーパーク的な社会は一つのお手本のような気がします。山村、だけでなく都市など地域の抱える課題についても同様かもしれません。

写真

鞍ヶ池公園プレーパーク



取材風景。右が代表の黒さん

## NPO法人矢作川森林塾

調査団体名 : NPO法人矢作川森林塾 団体代表者名 : 碓 伸夫  
 設立年 : 2010(平成22)年4月設立 対応してくれた人の名前 : 碓 伸夫  
 団体URL : facebookページNPO矢作川森林塾  
 活動拠点 : 豊田市矢作川左岸・高橋～御立樋管間の高水敷 調査員 : 國村恵子、山本薫久、田中五月、村松憲吉  
 取材日 : 201412月22日 レポート作成者 : 國村恵子

## 活動内容

矢作川の高橋(河口から40.4km地点)から豊田大橋、久澄橋を経て御立樋管(38.4km地点)までの左岸約2kmの高水敷で主に竹林伐採と河畔林再生の作業をしている。作業着手は2006年1月。その後の8年間、雨の日も風の日も黙々と竹を切り、なんと鬱蒼と茂った十万本の竹を切り終えた時、夢に描いた、堤防から輝く水面を見通せる清々しい景観が再生されていた。と同時に旧堤防と推測される所に、榎や藪椿などの潜在植生が切り払われた竹藪から解放され勢いよく枝葉を伸ばして修復された。

それは、見る人の心安らぐ美しい風景であり、豊田都心部においては貴重な都市林ともなった。まさに人の手で再生された命漲る河畔林である。取り戻された風景に馴染みつつ、現在では様々なイベントがこの場所で開かれている。復活した木本は他にオニグルミ、クワ、ヤナギ類と絶滅危惧種の草本のタコノアシなどで、それら在来種の生育を促す工夫を凝らし、訪れる人々が憩える木製ベンチも随所に作られている。豊田スタジアムのレストランからは矢作川の水辺が一望でき、市民にも広く認知され親しまれるようになった。

## キャッチフレーズ

夢を共有する仲間歓迎。

## 会のモットー(何を大切にしているか)

豊田市の中心部に、人間が自然に溶け合い、自然と共生できる緑豊かな都市林(人間観察の森)を作る。メンバーの夢の共有による絆。上下関係や利害関係がなく、ひたすら黙々と作業し、同じ汗をかく事で繋がる人と人の輪。議論する事よりも汗をかく事で、あるがまま、さりげなく心が通じ合う優しい関係。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

最初は土手から川面が見えなかった荒廃した河畔の竹藪の竹を切って、川面が見えるようにしたいということであった。作業が進んできて川面が見えるようになってくると、今度は竹藪の伐採跡から生えてくる実生の木で、日本ではあまり例を見ない河畔の都市林を夢見るようになった。そして、今ではこの林をさらに進化させて、人間と自然が溶け合って共生する状況を観察できる人間観察の森を目指している。

## 連携している団体・専門家・自治体など

国土交通省豊橋河川事務所とアダプト(協働管理協定)を2010年10月に結び官民協働活動へと進展した。豊田市矢作川研究所。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

愛知県立豊田東高校1年生に当塾の環境改善活動を講義(1時間)現場実習(2時間)まとめアドバイス(1時間)などを行っている。次世代が育ってくれること、この水辺と河畔林に触れ合った事を、ふるさとの風景の一コマとしてほしいと願いつつ。

## 現在直面している課題

竹林伐採後のメンテナンスは、在来種や自生種の実生から幼木を経て河畔林へと誘導する順応的管理を行っているため、長期的スパンで取り組める後継者の育成と組織体制。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

豊田市公園課、河川課との連携活動の強化。

今後やってみたいこと

ヒートアイランド対策を含めて、豊田都心部の緑化を進め、緑豊かな都市にしなければならない。例えば、中央公園構想を進めて、見直しを行い、森の中の豊田スタジアムにすることを考えるべきだと考えている。加茂川水門の魚道整備とガサガサ水辺の創出。魚道は木杭連結で落差勾配を緩やかに付け、ステップ・アンド・プールで水門下の水深があるプールから遡上可能とする図面も作成。

## 現地調査の感想

川は流れてこそ川。遮るものがない空間が広がる現地、堤防からも高水敷からも川面が見渡せる。「活動をしてこられて何が一番良かったですか」と尋ねると、柔和な笑顔で「この風景」とほほ笑みながら即答された。その言葉はかけがえのないものを得た人だからこそ、穏やかでも確信に満ちたものだった。本来なら終わりが見えない作業であるはずだが、「朝の清々しさに心惹かれて毎週、みんな来とるんですよ」と続けて言われた。その積み重ねが、この風景なのだと言点がいく。車を降りた時にオオタカが右岸上を飛び、カモ、カイツブリ、カワウが川面に浮いていた。タコノアシは冬枯れていても、やはりタコノアシである。ホオジロ、アオジが柳の枝に止まり、セグロセキレイが地面を歩いている。極め付けは豊田スタジアム前の河川敷上空を群れ飛ぶツバメ15羽。越冬燕だ。これが鬱蒼とした竹藪ならツバメは目視できない。我々の車が通ることで舞い上がった虫を採餌している。矢作川森林塾の活動が、都心部ではなかなかお目にかかれぬ水辺生態系再生・復権の一端を教えてくれた。来年の干支である未＝羊の顔に葉痕が似ているオニグルミの幼木小群落。オニグルミの実を埋めてある所に竹が立ててある。対岸の倒伏密生竹林との比較で、左岸作業区域の『再生した水辺と河畔林』の良さが一目で解る。夢のバトンを渡す後継者問題は、どの世界も同じだと頷いた。

\* 現地取材の後、豊田市職員会館で、活動の様子をスライド上映しつつご説明頂いた。参加された方と共に意見交換した。都市林のあり方に話題が及び、「豊田市・緑の基本計画」での矢作川河畔林の位置付けや、都市緑化と都市林の今後の展望、街路樹枝打ちの問題などが話し合われた。

## 写真

集合写真  
(前列右から  
3番目が裕さん)



河畔林の次世代の  
主役になる稚樹の  
調査



作業風景  
(伐竹)



作業風景  
(草刈り)



# 矢作川水族館

調査団体名	： 矢作川水族館	団体代表者名	： 阿部夏丸
設立年	： 2007（平成19）年	対応してくれた人の名前	： 阿部夏丸
団体URL	： <a href="http://www.yahagi-aqua.com/index.htm">http://www.yahagi-aqua.com/index.htm</a>		
活動拠点	： 家下川、矢作川	調査員	： 田中五月・山本薫久・國村恵子・村松憲吉
取材日	： 2014年12月8日	レポート作成者	： 田中五月

## 活動内容

魚類調査、外来生物駆除なども行うが、市民参加の川遊びイベントを毎年おこなっている。

- ・矢作川たんけん隊（泳いだり、潜ったり、流れたり。捕った魚はその場で食べる）
- ・矢作川さかな釣り大会（矢作川で釣れるアユ以外の魚が対象で、いろんな種類をつるのをきそう）

まずは、体験を通し、足もとの川にいる生きものを見てもらうこと、つかまえてもらうことが大切。そのために、軽トラを使った移動式の水族館を不定期に開催している。

## キャッチフレーズ

市民と川をつなぐ、みんな川に来てよ。

## 会のモットー（何を大切にしているか）

- ・川の現状を正しく見る。（調査、研究だけでなく、釣りや遊びを通して生きものをちゃんと見る）
- ・行政、漁協、土地改良区、矢作川研究所など、河川管理者とちゃんとつながる。
- ・川の良い所を見つける。（悪い所は、誰でもわかる。川を好きにならないと、良い所は見つけられない）
- ・川遊びのおもしろさを伝える。子どもは、遊んだ川を忘れない。子どもと一緒に川で遊んだ青年が、子どもを連れてまた川に来る。「夏丸さん、昔あそこの橋の下で、おれ〇〇〇をたくさん捕ったよね！」阿部さんによると「この一言は、自然環境に対する不毛な議論より、ぼくは百倍価値があると思っている。」とのこと。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

世間の川に対する見方が変わってきた。親子川遊びを始めた当初「あんな川に子供を入れて、病気にする気か」「気が狂っている」などと散々いわれた。一度は死んだと思われていた家下川も、自らの力（自然の再生力）で生き物が増えている（取材日にもガサガサをしたが、少しの時間で本当にたくさんの魚がとれる）。みんなで川遊びをすることで、それを知ってもらえたことは大きい。楽しく遊んだり、しつこく話をすることで、まわりの河川関係者がアユ以外の話も聞いてくれるようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

矢作川研究所、矢作川漁協、土地改良区、家下川リバーキーパーズ、三河淡水生物ネットワークなど

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

土地改良区と協力して水田魚道を作った。矢作川研究所に提案し、コンクリート水路に、水深のあるマスを作った。多くの河川管理者、市民グループなどと協力して、コンクリート水路に、草を植えたり、砂利を入れたりし、魚の産卵場所、越冬場所を増した。子供たちと本気で川遊びをし、川に関心を持つ子どもをふやしている。

## 現在直面している課題

やりたいことが多すぎる。しかしメンバーはすくなく、みな仕事が忙しい。

## 今後やってみたいこと

(これは水族館としてではなく、個人的な想いとのことだが)川で子どもともっと深く遊びたい。  
以前、1歳の子供を連れて親が川遊びイベントに参加してくれたことがあった。オムツをつけたままその子は川に座っていた(紙オムツは水吸ってパンパン)んだけど、コネコネ何かを触っている。よく見ると、死んだ魚をずっといじくりまわしていた。子どもは死んだ魚とも、話ができる。そんな子どもたちに、大人が教えられることがあるだろうか。川での体験が思い出となり、遊んだ川がやがて、かれらのふるさとなれば、それだけでいい。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>子供と地元の川に着目するきっかけは？

<答え>

昔はBE-PALというアウトドア雑誌の関係もあり、四万十川やら何やら、遠い綺麗な川にばかり行っていた。地元の矢作川や家下川を見ていなかった。ある時、家下川で小学生が遊んでおり「お前ら、何やってるんだ」と聞くと、たくさんの魚をとっていた。地元の汚いと思っていた川にも本当にたくさんの魚がいることを子供に教えられた。

## その他、伝えたいこと

川は難しい。

川をどういじったら、形状がどうなる、生きものがどうなるというのが、河川管理者も分かってないはず。阿部さん曰く「自慢じゃないけど、僕もよく分からない」。しかし、分からないのを理由にしてやらないっていう河川管理者が多すぎるのは残念。分からないなら知ろうとしよう。分からないなら試してみよう。こんな面白いことがやれる立場にいるのに。

でも、ある意味、川は簡単だ。川の魚は、ほっといても(エサをやらなくても)増える。川ガキは、ほっといても(おもちやを与えなくても)遊ぶ。

それが何でいなくなるんだろう？ 答えは案外、簡単なのかもしれない。

## 写真



↑取材&ガサガサした家下川



↑「ナマズが子魚をバクバク食っていた！」と嬉しそうに話してくれた夏丸さん



↑何はともあれ、まずはガサガサ



↑短時間でたくさんの魚がとれた、豊かな川



↑取材は川の土手で、場所が良かったからかたくさんの話をお聞きすることが出来た

# じさんじょの会

調査団体名	: じさんじょの会	団体代表者名	: 荻野昌彦
設立年	: 2000(平成12)年	対応してくれた人の名前	: 荻野昌彦
団体URL	:		
活動拠点	: 岡崎市千万町木下	調査員	: 唐澤晋平、唐澤 萌
取材日	: 2014年11月15日	レポート作成者	: 唐澤 萌

## 活動内容

地域に残っていた茅葺屋敷を整備しなおし主な拠点として活動。田植え、稲刈り、餅つきなど各種イベントの主催。イベントには名古屋、豊橋などから参加する人も多く、街の住人と地域住人の間に交流がうまれた。参加者には村民制度に加わってもらい、会費を徴収する代わりに年間のイベントに自由に参加できるようにしてリピーターを獲得。茅葺屋敷では地域の女性たちによる物販もあり、こんにゃく、五平餅などがよく売れた。それらは少なからず女性たちの現金収入となり、また、家に閉じこもりがちなお年寄りや女性が集まる良い機会になっていた。屋敷は宿泊施設としても開放していて、地域外の多くの団体が利用していた。その中の一つ、happypunchは今でも地域の畑を借りて週末農業をしており、他にもお祭や盆踊り大会などにも積極的に参加、地域のメンバーとして受け入れられている。

## キャッチフレーズ

つくりつづける、ふるさとづくり

## 会のモットー(何を大切にしているか)

和気あいあい 明るく 楽しく

## 設立から現在に至るまで変化したこと

2000年、千万町小学校廃校の危機感から、移住者人口の拡大を目的として茅葺屋敷での活動を始めた。2006年、岡崎市に編入。2014年、地主の意向で屋敷を返還することとなり活動の拠点を失う。また同時に、茅葺屋敷への来客数も頭打ちになっていたこと、そして小学校も廃校となったことにより、今、会の活動の転換期をむかえている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

ふるさとづくり委員会、happypunch(農業サークル)、岡崎市

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動内容に同じ

## 現在直面している課題

茅葺屋敷にかわる新たな活動拠点を作ること。(廃校になった小学校を利用する案も出ているが、市の施設なので活動に制約がかかってしまう。)メンバーの世代交代の時期をむかえていること。  
茅葺屋敷では不十分だった、移住者人口を増やすための対策の強化。  
地域が活性化しているとはどんな姿なのか。「活性化」そのものの共通認識の模索が、今一度必要。



## 今後やってみたいこと

茅葺屋敷での活動では移住希望者を獲得するまでは至ったが、その後様々な問題が表面化した。改めてマッチングの難しさに気付かされた。今後は新たな拠点で地場の食材を売ったり、イベントを開催することで地域のPR活動をすると同時に、移住希望者リストの作成と、空き家情報リストの作成し、その両者のマッチングを、より積極的にアプローチしていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

岡崎市の企画課、商工会、マスコミ、政治家

## チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじよの会の名前の由来

<答え>

じさんじよとは、絶滅危惧種であるヨシノボリの呼び名。集落を流れる川にたくさん生息し、極ありふれた生き物だったが、昭和40年代から環境の変化や川の汚染により30年近くにわたって全く姿を見なくなっていた。しかし近年また目撃されるようになった。このじさんじよの復活のように、地域を再び活性化させたいという思いが会の名前に込められている。また、語感も「地産」や「自然薯」などに通じて面白い。

## チームオリジナルの質問

<質問内容>じさんじよの会を運営するにあたって難しかったこと

<答え>

平日、周辺の町へ働きに出ている住民も多い中、土日に集中して活動せざるをえないため、それを負担に感じる住民も一部いた。また、茅葺屋敷の運営を維持していく上でどうしても仕事を当番制にすることもあり、有志で始めた活動がいつのまにか義務化してしまい、報酬が出ないことへの不満が出たこともあった。

目に見える成果がすぐに出る活動ではないので周囲への理解が得にくいと同時に、自分たちのモチベーションを保つことも時に大変だった。

## その他、伝えたいこと

少子化、高齢化、過疎化、地域の抱える問題は山積しているが、どれもいずれは日本が全国的に抱える問題ばかり。その先陣を切っている、先駆者であることを楽しみたい。

## 写真



田んぼで農業体験



昔ながらの結婚式

# 額田林業クラブ

調査団体名	額田林業クラブ	団体代表者名	山本恵一会長
設立年	1976(昭和51)年	対応してくれた人の名前	山本恵一
団体URL			
活動拠点	愛知県岡崎市額田	調査員	唐澤晋平、今村 豊
取材日	2013年11月27日	レポート作成者	今村 豊
会員数	男49人、女12人		

## 活動内容

①優良材生産と地元建築物への活用 ②都市との交流 ③小中学生への森林環境教育の推進 ④女性部による「つまもの」の生産と出荷(紹介は次の機会)

## キャッチフレーズ

額田の森林と共に、これまでも、これからも

## 会のモットー(何を大切にしているか)

自分達が情熱をかけて育てた優良材を、自ら伐って搬出して地元で活用すること  
～岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園の事例～

・地元材スギ、末口直径30cm、8m～9m材、130本の調達

山本会長には、地域の森林資源育成や優良材づくりなどの森づくりに対する熱い情熱と、皆を引っ張っていく力強いリーダーシップがあります。その姿勢は、設立当初から現在に至るまで一貫して変わりません。優良材生産に情熱をかけたひとつの成果として、平成25年に岡崎市内に建てられた「岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園」(平成25年11月竣工)の園舎への建築材の提供が挙げられます。この園舎建築のために使用する「地元材スギ、末口直径30cm、8m材、130本」を地元の木によって調達したいという園長さんの要望に応え、山本さんが会員に声をかけ、額田林業クラブでは会員の山から3ヶ月以内の短い納期内に、自分達の手によって伐採・搬出してこれらの材を集めました。しかも、伐採時には地元の子供たちに見学してもらって、しっかりと林業を伝えています。「末口直径30cmの8m材を130本」というオーダーは、間伐を計画的に行い、搬出用の作業道が開設されている等、森づくりに真剣に取り組まれている組織でないと絶対に調達不可能な内容です。山本さんは仲間9名でこの困難な作業をやり抜きました。搬出された素材も、山本さん達の苦労に配慮した岡崎森林組合が発注者と度重なる交渉を行って、市場価格より高額で納品することができました。

・顔の見える地域林業、日本の林業の理想形

地元の子供たちのために、クラブ会員の手によって苦勞して育ててきた森林を、クラブ員が一体となって、きちんと自らの手によって伐採し活用された今回の取り組みは、正に地域林業のあるべき理想の形と言えます。こうした取り組みの先頭に立って、森づくりから木づかいまでをリードしてきた山本さんを筆頭とする「額田林業クラブ」の活躍は、日本林業の誇りであり、自伐林家と顔の見える地域林業の理想形として、これからの地域林業、日本の林業を考える上で学ぶべき多くのヒントを与えてくれます。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

・優良材生産の取り組み

1976年(昭和51年)にクラブが創立した当時、ヒノキ無節の柱材の優良材生産を目指していました。間伐、枝打ちを計画的に行い、昭和60年から柱材の製材、格付け、展示販売を行いました。当時、3m、3.5寸角の柱材で1本あたり15,000円から40,000円(120万円/m<sup>3</sup>)もしたそうです。ところが、平成25年になると3m、4寸角の柱材で1本あたり3,000円から13,000円(35万円/m<sup>3</sup>)となって、当時の約3割の金額になってしまったとのことです。それでも、しっかりと枝打ちをされたヒノキ優良材には違いなく、通常のスギ製品価格となる7～10万円/m<sup>3</sup>と比較すると非常に大きな優位性があります。こうした製品の高値取引も、優良材を作ろうと計画的に実践されてきたクラブの大きな成果と言えます。現在も毎年開催される、「岡崎市農林業祭」、「ぬかたふるさとまつり」において約80～100本の展示販売を行っており、地元自伐林家の熱い意気込みが伝わってきます。

## 枝打ち・間伐の指導や森林環境教育等の取り組み

最近、都市との交流や地元小中学生に対する枝打ち・間伐の指導や森林環境教育が非常に盛んになってきました。例えば、枝打ち・間伐指導を行う「おと川リバーヘッド大作戦」は現在まで13年間継続されています。平成23年に千万町で開催された「全国ネイチャーゲーム研究大会」では全国から160名の方が集まり、間伐指導をされました。また、平成25年には「第9回矢作川森の健康診断」が開催され、すべての会員と岡崎市民を含む220名が参加されました。平成26年には「中部北陸ブロック林業グループコンクール」が開催され、第二早蕨幼稚園の現地見学、額田ヒノキによる首相官邸用テーブル・イスの寄贈事例を紹介したとのことです。

額田中学校に対しては間伐指導を18年間も継続されており、平成26年には生徒74名が間伐を行いました。その他にも幸田町中央小学校70名、豊富小学校40名の間伐指導を行っています。また、平成17年には額田中学校により、間伐材を使ってテーブル・ベンチを作成して公共施設へ寄贈された事例が、全国から5校の事例に選ばれて、「森で学ぶ活動プログラム集」に掲載されました。平成26年にも額田中学校では同様の取り組みが行われました。

## 連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、愛知県林務課、岡崎市林務課・自然共生課自然体験班、水守森支援隊、岡崎炭焼の会、乙川水源の森づくり実行委員会、農業協同組合、漁業協同組合

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

### ・山の境界確認作業

山づくりに興味や関心のない若い方が多く、クラブへの加入もほとんどないのが現実ですが、こうした状況を少しでも打開しようと、クラブでは山の境が不明な個所について、境界の確認作業に立ち会うなど山づくりの支援作業を行っています。

### ・全会員の林業に対する継続した熱心な勉強姿勢・林業先進地調査

年会費は1万円を徴収し、その会費から会員全員が「現代林業」「林業新知識」「林業あいち」を購入されて、会員同士で様々な林業に関する事柄を熱心に勉強されています。また、年一回は必ず先進地調査に出かけて林業技術の習得と会員同士の親睦を深めており、クラブ員は林業に対する意識レベルが高く、クラブ員同士の仲も大変良いのが特徴です。本当に理想的な正に全国の林業研究グループの鏡と言えます。

## 現在直面している課題

### ・若いクラブ員の加入を望む

クラブ員が高齢化しているので、特に若い方の加入を希望しています。若い方は一般的に山に関心がなく、自分の山がどこにあるのかわからない方も多いのが実態です。そこで、クラブとしては林業に関わるあらゆる指導をしっかりと行うので、ぜひ仲間に入ってほしい切望されています。

### ・地元額田地区の岡崎森林組合職員が欲しい

岡崎森林組合の職員に地元額田出身者がいないので、地域の実情に対する理解やクラブへの参加、クラブと一体となった取り組み、意見・要望等において速やかな対応が難しいとのことです。地元額田出身の岡崎森林組合職員がいると、もう少しクラブ活動がやりやすいと思います、とのことです。

### ・岡崎市による水源基金の創設を

額田町が岡崎市と合併したことで、以前、額田町にあった水道水1t=1円を財源とした水源森づくり基金がなくなってしまったので、岡崎市に復活していただきたい、との希望も語られました。岡崎市が水源基金を実施すると、年間4,000万円の基金が生まれる、とのことです。

### ・山地災害発生に対する危機

平成23年に台風12号が紀伊半島を直撃し、深層崩壊による土砂災害ダムが発生したことにショックを受けた、とのことです。額田の人工林の山も間伐が遅れており、いつ山地災害が発生しても不思議でない放置林が年々増加しているのが現状で、非常に心配しており、クラブからも市民に働きかけて速やかに間伐を行い、健全な森林づくりを推進しなくては、とのことです。

## 今後やってみたいこと

愛知県でも事例が増えてきている「木の駅プロジェクト」にクラブとして取り組むことが決定されました。人工林は利用できる林齢に達したら自ら伐って搬出・利用すること、それに加えて、今度はかつて切り捨てた未利用材も搬出し、木質バイオマスとして利用していくと力強く話されていました。山本さんの自分達の力でやる意気込みには感心します。

## チームオリジナルの質問

### <質問内容>今一番推進したいことは何ですか

<答え>岡崎市の50%の方が額田の山を水源とする水を飲んでおり、もっと街の方に森林の大切さを理解してほしい、と語っておられました。良い山とは、適正な林分密度で林内に陽光が差し込み、下層植生が繁茂しており、その結果、森林土壌が形成され水源かん養機能が発揮されている山です。山本さんは、間伐放置林が目につくことから、こうしたクラブ員が整備した良い山をもっと街の方に見学してもらい、森林整備の重要性やこうした森林整備に取り組んでいるクラブの活躍についても、理解してほしいと語っておられました。さすがに、森林整備を実践されている方だけに、自分達のつくりあげた山を良い事例として取り上げる、自信と自負が感じられました。

## チームオリジナルの質問

### <質問内容>「森の民」としての生き様とは

<答え>地域や現場を知っている「森の民」が将来を考えて立派な山をつくり、それを自ら伐採・搬出して、地元で活用していくことが、林業の真の実践者としての「格好い」生き様だと思います。これからも益々地域リーダーとして、情熱・熱意を持って地域林業の振興に努め、1ha1億円的林業を目指して日本の林業に元気を与え、自分達の後に続く林業後継者を育て導きたい、話されていました。本当に、実に「格好い」山本会長でした。

## その他伝えたいこと

### ・全国林業グループコンテストにおける優秀な成績

過去に全国林業グループコンテストに参加しており優秀な成績を残されています。質の高い活動を継続されていること、こうした活動をきちんと報告して、コンクールに参加されていることに大変頭が下がります。

平成10年度 額田林業クラブ女性部 農林水産大臣賞を受賞

平成15年度 額田林業クラブ男性部 農林水産大臣賞を受賞

平成22年度 額田林業クラブ男性部 林野庁長官賞を受賞

中でも平成15年度の農林水産大臣賞の受賞は、テーマを「林業地域から発信する地域おこしの取り組み」とし、①1ha1億円林業 ②三河材「額田ヒノキ」のブランド化 ③森林・林業教育の推進 ④都市との交流の4項目について発表され、講評では「額田林業クラブの優良材生産活動から森林・林業教育、さらには都市との交流といった幅広い総合的な活動は、林業グループの活動として考えられるエッセンスを網羅しており、他の手本となる」と絶賛され、全国トップ的林業グループとして認識されています。なお、女性部の取り組みも大変活発ですが、紹介は次の機会とします。

## 写真



素材を提供した会員の山 手前左側が山本さん



岡崎女子短期大学付属第二早蕨(さわらび)幼稚園の外観



会員の山から調達したスギ丸太



木の温もりを喜ぶ園児の皆さん



地元材をふんだんに使った幼稚園の内部



幼稚園外部の廊下の丸太も特徴的



額田中学校の間伐指導1



額田中学校の間伐指導2



ヒノキ柱材 格付作業



1ha1億円林業を目指すヒノキの柱材展示

## 宮ザキ園

調査団体名	宮ザキ園	団体代表者名	梅村篤志
設立年	1820年頃	対応してくれた人の名前	梅村篤志
団体URL	<a href="http://www.miyazakien.com/">http://www.miyazakien.com/</a>	調査員	今村 豊、唐澤晋平
活動拠点	愛知県岡崎石原町	レポート作成者	唐澤晋平
取材日	2014年11月17日		

### 活動内容

お茶の栽培(3ha)と、自社工場での加工、梱包、販売までを一貫して行っている。年間の生産量(製品の状態)は年にもよるが1600kg~2000kgくらい。地域に茶の生産者は50人くらいいて、委託加工や買取加工をしている。普段は家族5人で経営しているが、5月の連休明けくらいから夏までが茶の収穫期で、鮮度を失わないうちに一気に加工までするため寝る暇もないほど忙しい。1日1000kgの茶葉を順次加工し、製品としては200kgのものが出来る。その時期だけは地域の方にも手伝ってもらい、10人~15人くらいで作業している。お茶は全て有機無農薬栽培で、15年ほど前に県内で初めて有機のJAS認定を受けた。以前は農協に卸していたが、今は自社で産直や百貨店などに直接営業している。お茶にこだわる方が直接店に買いに来てくれる場合もある。

### キャッチフレーズ

- ・自然のままに
- ・People make a juice, God make the tea 人々はジュースを作り、神がお茶を作る  
工業製品とは違うので、同じものは作れない。一煎一煎の出会いを楽しんで欲しいという意味。

### 会のモットー(何を大切にしているか)

出来るだけ人の手をかけず、自然のままに仕立てていく。  
お茶は収穫したものがそのまま加工されて口に入るので、農薬や化学肥料は使いたくない。肥料も最低限のものしか与えないようにしている。

### 設立から現在に至るまで変化したこと

おおよそ190年前に創業し、現在6代目。この地域は寒暖の差が激しく霧が良く出る自然環境でお茶の栽培に適しており、夏場は茶業、冬場は林業というスタイルが地域の生業となっていた。しかし昭和30年代に木材価格が下落し、林業が衰退したことでこの形態が崩れ、街に勤める人が増えて茶業も衰退していった。お茶の値段は下げ止まりの状態だが、ゆるやかに需要と供給が減ってきている。

### 連携している団体・専門家・自治体など

あいち三河農協、宮崎茶業組合、東海農政局、市役所、商工会など。  
6次産業化に取り組んでいるということで、行政からイベント出展などにお声がかかることがある。

### 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

地域に若い人が戻ってくることができるように、お茶という地域資源を活かして雇用を創っていくことを目指している。以前勤めていた茶業試験場の上司と紅茶の研究をしており、当時は珍しかった国産紅茶と一緒に作り、宮ザキ園のオリジナル商品として「三河わ紅茶」を開発した。当初はインドやスリランカから講師を招き入れダージリンやウバのような高級紅茶を国産で作れないかと思って試行錯誤したが、残念ながらダージリンやウバはつくれない。しかし日本には四季がある。気候や風土などの条件も違う中で同じものを目指してもダージリンは作れないのだ。環境にあった収穫期や茶葉の発酵時間を調整し、日本の環境に合ったものにしようという方向性をシフトして、半発酵で日本人の口に合うような柔らかい味に仕上げた。

## 現在直面している課題

生産力不足。人手が足りない。収穫期に手伝いに来てくれるのも高齢者のみで、勤めている若い人はその時期だけ来てもらうということが出来ない。今年から青年就農の研修機関として認定を受け、研修生を受け入れると人件費の補助金が出るようになったので、担い手育成をしていきたい。

## 今後やってみたいこと

12月には紅茶の製造機械が納入される。地域の方には無料で貸し出して、オリジナルの紅茶を作り、訪れる人に地域を上げて紅茶でおもてなしをするという「紅茶街道」にしていきたい。  
また、茶の実を絞った油の商品開発を計画している。茶の実油は食用や美容用などで高級油として販売されている。寒い時期に葉を摘む「秋冬番茶」というものがあり、これも商品にしてみたい。冬季の仕事になればと思う。さらにお茶の文化をアメリカやヨーロッパなど、海外に発信していくこともやっていきたい。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

県や市、農協、農政局と連携しながら販路開拓を進めていく必要がある。

## チームオリジナルの質問

### <質問内容>

梅村さんは現在35歳とのことであまり同世代が地域にいないと思うが、後を継いで地域に残ることに抵抗はなかった？

### <答え>

同級生は12人いたが、今地元に残っているのは自分だけで寂しく思う。農業高校を出て、静岡で2年間茶業試験場に勤めて、そのまま後を継いだ。お茶を継ぐことが当然だと思っていた。これまで続けてきたものを守らなくてはという使命感をもっている。

## その他、伝えたいこと

2013年5月にNPO法人インディアンサマーを設立し、現在理事長を務めている。もともと額田のくらがり溪谷で音楽イベントを主宰していたNukata Sound Projectのメンバーが中心になって設立し、現在の会員は20名程度。

活動としては、サイクリングの楽しさを発信し観光地の活性化につなげる取り組みや、障がい者のために脳の活性化を促す音楽トランポリン療法イベントの開催、上記した三河紅茶街道の取り組みなど、地域活性化に想いのある有志が様々なプロジェクトを展開している。

団体名である「インディアンサマー」は、日本語で小春日和。冬に時々温かい日があることをアメリカでそのように呼ぶことにちなんでいて、地域経済を暖めていきたいという思いを込めている。

写真



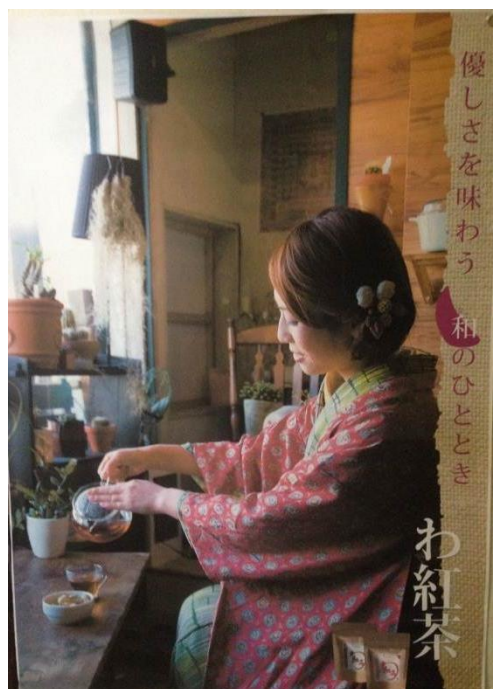
宮ザキ園外観



商品のラインナップ。贈答用のパッケージもある。



茶畑の様子と梅村さん(右側)



わ紅茶のポスター。  
モデルは梅村さんの奥さん。



# 東幡豆漁業協同組合

調査団体名	: 東幡豆漁業協同組合	団体代表者名	: 石川金男
設立年	: 1950(昭和25)年	対応してくれた人の名前	: 石川金男
団体URL	: <a href="http://www.katch.ne.jp/~higasihazu-gk/">http://www.katch.ne.jp/~higasihazu-gk/</a>		
活動拠点	: 愛知県西尾市東幡豆町	調査員	: 丹羽健司、洲崎燈子
取材日	: 2015年1月21日	レポート作成者	: 丹羽健司

## 活動内容

東幡豆町の小学生たちはもとより、県内外の子供や大人に「前島で自然とにらめっ子～干潟生物セミナー～」はじめ各種の海洋教育プログラムを提供している。

まず、①干潟に足を踏み入れる。②何か(貝やカニ、ゴカイ、生き物、風景...)を発見する。③それからおもむろにレクチャー開始...1)三河湾の現状(貧酸素隗、赤潮)。2)干潟の生き物(豊かさ、食物連鎖)。3)干潟の機能(浄化作用、アサリの浄化実験、命のゆりかご)...④そしてマテ貝採りやアサリ掘りを体験して、場合によってはバーベキューというお楽しみもついている。これらのプログラムを通して参加者は、山から海のつながりの大切さや干潟の機能、海の恵みを五感と科学で知ることができる。

## キャッチフレーズ

山川海、自然の循環が一番大事！

## 会のモットー(何を大切にしているか)

「海辺の子供たちが目の前の海のことをあまりに知らない。東幡豆では目の前に渚の生物の宝庫「前島」があり、島につながる干潟が広がっている。干潮で現われた干潟を歩いて渡り、アサリやマテ貝を採り、島から振り返ると自分たちの暮らす町の素晴らしい風景が見える。まず、それをさせたい。渚や干潟、磯との接し方を知らない。まず、海辺の子らに海の恵みや浜辺に暮らすことの素晴らしさを伝えたい。」と石川組合長。そして「こういうことは好きでなきゃできん！」と熱く語る。

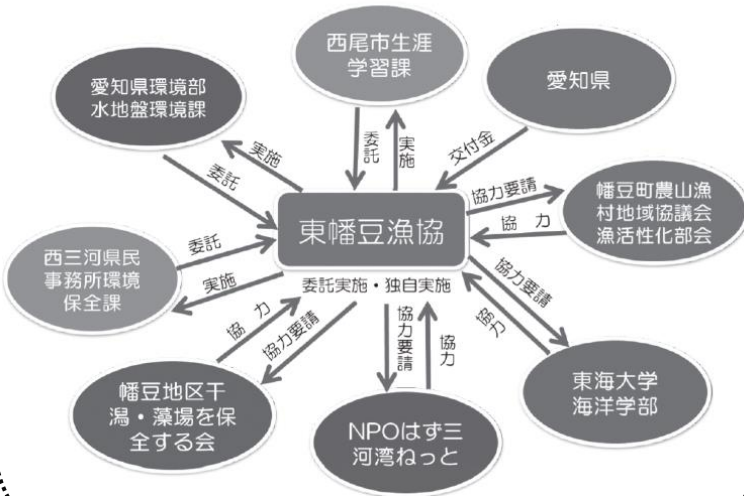
## 設立から現在に至るまで変化したこと

2003年頃から東幡豆保育園、2009年から東幡豆小学校を対象に「ふるさと幡豆の海の自然観察学習」を、2006年頃からは「ふるさとワクワク体験塾」で無人島探検や漁業体験、生き物学習、干潟観察などを関係機関と協力して企画し実践してきた。フィールド提供や漁船・魚介類の提供から石川組合長自ら講師を務めるなど漁協の自主的なボランティア活動的に取り組んできた。その内容は干潟や浅場の役割や赤潮や貧酸素隗発生要因についての学習、アサリの水質浄化機能から潮干狩りと試食まで、当初の自然観察や漁業体験的なイベントから急速に深化している。

2015年3月には矢作川流域圏懇談会のつながりで矢作ダムの堆砂を活用してトンボロ干潟付近の一角に人工干潟を造成することが実験的に始まった。今後山から海までつながるシンボリックな活動として浜辺からのバケツリレーによる搬入・造成イベントを夢想中。その後の経過観察などまで山から海までのつながりをメインにした学習の場になろうとしている。

## 連携している団体・専門家・自治体など

海洋教育における漁協の取り組みと機能をめぐって—愛知県東幡豆漁協を事例に—



東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

潮干狩りは8月初旬で終わる。子供たちの夏休みにもっと前島やトンボロ干潟に来てもらいたい。前島には休憩所もあるので観光資源としてもっと活用したい。

## 現在直面している課題

- ①海洋教育の常駐スタッフがほしい。
- ②上流から砂が来ない。海底の砂が固くなっている。柔らかく小動物が潜れるやわらかい砂が必要。砂が流れないと水も死ぬ。

## 今後やってみたいこと

山に「林間学校」があるように、前島に「海浜学校」を作りたい。

山から海までのつながりや干潟の機能、磯の生物の豊かさ、そして漁業の大切さと醍醐味を伝える場、しっかり体感できる場を作りたい。それがいつか漁師を育てることにつながると思う。

## そのためにはどんな情報・人脈が必要か

海や干潟のこと、あるいは山から海までのつながりに関心を寄せる人たちはいっぱいいるはず。それらの人たちをあつめてこういう活動の応援団になってほしい。

## プログラムの一例

時刻	内容
10:00～	東幡豆海岸集合・説明など
10:30～	干潟生物セミナー(東幡豆漁協組合長)、マテガイ採り
12:00～	昼食(バーベキュー、アサリ汁) 海の世界学習(アサリの浄化実験など) 質疑応答・意見交換
13:30～	三河湾ミニクルージング
15:00～	バス乗車・出発

東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」12-1-12-22(2012年)より

## チームオリジナルの質問

<質問内容> 海洋教育を続けてよかったことは?

<答え>

子どもたちは干潟や磯で海に触れると確実に変わり、海に親しみを感じてくれる。特に地元の子らは島から陸を眺めると感動してくれる。

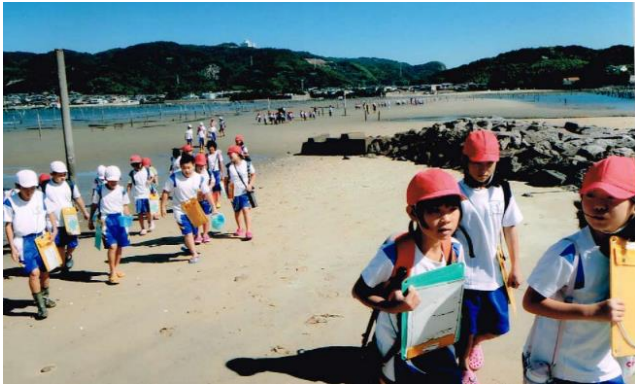
## 取材者の感想

この取り組みは東幡豆漁協の取り組みというより石川金男氏のライフワーク、漁協の業としての取り組みでなく石川金男個人の使命感が漁協や関係団体を巻き込み突き動かした成果だと思った。孟子曰く「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり。」

## その他、伝えたいこと

山には山の働き、川には川の働き、海には海の働きがある。山と川がしっかり水や砂の循環を行えば、海はそれを受け止める。もっと、実際の海に浜辺に、干潟に足を運んでほしいし、海からも山に出掛けたい。現場で空気を吸い、景色を眺めながらつながっていきたい。続けることで子供たちには確実に伝わっていくが、これからは漁業の当事者たちこそが理解を深め、より多くの人々に働きかけていくことが必要と痛感している。

写真



左上:トンボロ干潟を前島に向かう子供たち 左下:石川組合長のレクチャー 右上:潮干狩り 右下:石川組合長

## 佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ

調査団体名 : 佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ  
 設立年 : 2009(平成21)年  
 団体URL : <http://sakushiba.blog102.fc2.com/>  
 活動拠点 : 愛知県西尾市一色町佐久島立岩47  
 取材日 : 2014年12月21日

団体代表者名 : 神谷芝保  
 対応してくれた人の名前 : 神谷芝保  
 調査員 : 近藤朗、浜口美穂、洲崎燈子  
 レポート作成者 : 洲崎燈子

## 活動内容

畑で育ったお野菜や島の素材を使ったおやつ＝Oyaoyaを提供するカフェを営業している。ハンドメイドの雑貨類も販売している。金～月曜の営業で、冬季休業あり。店主の神谷さんが仲間たちに協力してもらいながら、床が抜けてつる植物と竹藪に覆われていた廃屋を古民家カフェに再生させた。ライブや流しそうめん、餅つき大会などのイベントや「まるけマルシェ」と名付けたマルシェも開催している。「まるけ」は「～まみれ、～でいっぱい」の意味で、畑をやっているから店名を「もんぺまるけ」にした。来店するお客さんの多くは東海3県の若者で、島の人を訪れる。

## キャッチフレーズ

種まきからキッチンまで

## 会のモットー(何を大切にしているか)

畑で育ったお野菜や島の素材など、誰が育てているかたどれるものを食材にしている。

## 設立から現在に至るまで変化したこと

(店主の神谷さんが)いろいろなことができるようになった。例えばチェーンソーを使った薪づくり。炊飯やストーブ、お風呂を沸かすのに薪を使っている。薪材は森林組合が切捨間伐する広葉樹でまかなえる。佐久島に移り住む前、通いで来ていた頃は島の人に怪しまれたりもしたが、住み着くようになってからは助けてもらえるようになった。野菜や魚を頂いたり、家具職人さんが家具づくりを手伝ってくれたり、お世話になっている方の家にあがりこんで食事をしたりテレビを見させてもらったりしている。今年は観光協会の委員や「島を美しくつくる会」のいにしえ分科会のリーダーをしている。佐久島太鼓の練習に毎週参加するようになり、篠笛も吹くようになった。

## 連携している団体・専門家・自治体など

島を美しくつくる会、名城大学谷田研究室、イニユニックビレッジ

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

お店の運営を手伝ってくれるバイトを雇っている。佐久島ブランドとしてハブ茶の生産を始めた。佐久島ブランド品を増やしたい。ちなみにハブ茶の原材料はエビスグサの実だが、枝は焚きつけになって助かる。

## 現在直面している課題

相方がいない。1人でやれることは大体できるようになったので、次のステージに進みたい。

## 今後やってみたいこと

今は店舗に寝泊まりしているので、自分の住居になる小屋をつくりたい(現在製作中)。畑や、海水からの塩づくりも、もっとちゃんとやりたい。また、島でウェディングをやれるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

やはり相方です。

### チームオリジナルの質問

<質問内容>なぜこのお店を始めようと思ったのですか。

<答え>以前は名古屋のカフェで働きながら好きなことをしていたが(半カフェ半X)、周囲の皆が畑をやっている自分もやりたくなり、場所を探していたら最初にここを見つけた。最初は週の半分を名古屋、半分をここで過ごしていた。廃屋を建て直し、周囲の竹を伐採するために、以前弟が在籍していた名城大学理工学部建築学科の谷田研究室に企画を持っていったら話に乗ってくれ、4~5回作業に協力しに来てくれた。竹の伐採・抜根は友達や、以前働いていたカフェのお客さんにも手伝ってもらった。家の建て直しで難しいところは大工をしている友人に頼んだ。また、島でたまたま出会った、ここに別荘があるおじさんが何でもできる方で、建て直しの指導をしてくれた。設計図なしで壁や床をはがしつつ考えながら作業をしたが、設計図の必要性を認識した。こうした作業を、島に通いながら半年かけて行った。

### チームオリジナルの質問

<質問内容>一年間の過ごし方を教えてください。

<答え>春から秋はカフェで働き、冬は店を閉めて東別院や甚目寺の手づくり朝市にお菓子を出品したり、家直しや小屋建てをしたり、長期の旅行をしたりする。

### しばちゃん(店主の神谷さん)語録

- ・以前マイ箸を普及させるために自転車で日本一周旅行をしていたが、その時泊めてもらった石川の方が偶然来店してくれて驚いた。
- ・2006年にアースデイの実行委員会で出会った大人たちを見て、定職に就かなくても生きていけるんだと思った。
- ・今も島内外に泊めてもらえる家がたくさんある。どこでもストレスなく泊まれる。
- ・みんなに助けられているので、ずっと独身だが1人で生きている感じがしない。

### 取材者のひとこと

取材をさせてもらったカフェは心癒やされるとも素敵な空間でした。取材の日は餅つき大会とマルシェがあり、その後にお話を聞いたのですが、取材中もお店のスタッフや仲間たちができてきぱきと後片付けをしてくれていて、みんなに支えられているお店なんだと実感しました。しばちゃんの人柄のなせる技だと感じました。取材者の浜口さんの、「しばちゃんのやりたいことが、みんなのやりたいことなんですよね」という言葉が印象的でした。また、半農半Xと放浪癖を両立するライフスタイルを実現していることに感銘を受けました。

### 写真



カフェの前庭。餅つき大会&マルシェ開催中



左が神谷さん。取材者も餅つきに参加

写真



おしゃれなカフェの玄関



お友達が描いた店内の絵



雑貨の販売コーナー



取材風景。中央が神谷さん

## 取材者名

浅田益章

今村 豊（根羽村森林組合）

大島光利（NPO法人奥矢作森林塾）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

唐澤晋平（NPO法人日本の森バイオマスネットワーク）

唐澤 萌

國村恵子（愛知・川の会）

蔵治光一郎（東京大学 大学院農学生命科学研究科附属演習林 生態水文学研究所）

近藤 朗（愛知・川の会）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

高橋伸夫（西三河野鳥の会）

田中五月（一般社団法人 ClearWaterProject）

丹羽健司（地域再生機構）

蜂須賀功（岡崎市環境部 環境保全課）

浜口美穂（ライター）

真柄明洋（国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所）

松井賢子

村松憲吉（名古屋市水辺研究会）

森本徳恵（岡崎市環境部 環境保全課）

山本薫久（NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター）

（五十音順）